



福島県文化財調査報告書第515集

福島県文化財調査
報告書第515集

農山漁村地域復興基盤総合整備事業関連遺跡調査報告書2

五畠田・犬道遺跡

2017年

福島県教育委員会
公益財團法人福島県文化振興財団
福島県農林水産部

福島県教育委員会
福島県農林水産部
福島県文化振興財団
福島県農林水産部
福島県教育委員会
福島県農林水産部
福島県文化振興財団
福島県農林水産部

農山漁村地域復興基盤総合整備事業

関連遺跡調査報告2

五畠田・いぬばい
遺跡

序 文

福島県農林水産部が実施する農山漁村地域復興基盤総合整備(農地整備)事業は、主に津波被害を受けた農地を再整備・大区画化し、収益性の高い農業を展開することにより、地域農業の復興を図るものであります。

上記事業に伴って実施した五畝田・犬這遺跡の発掘調査では、縄文時代、古墳時代、平安時代の集落の跡が発見され、五畝田・犬這遺跡が所在する南相馬市零地区が歴史深い土地であることがわかりました。

こうした地域の歴史を後世に伝えていくため、福島県教育委員会では、復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護の両立を目標に取り組んでまいりました。本報告書は、復興事業に伴う埋蔵文化財調査の成果をまとめたものです。本書が広く活用され、埋蔵文化財の保護に役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査及び報告書作成に御指導と御協力を賜りました南相馬市教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に、厚く御礼申し上げます。

平成29年2月

福島県教育委員会

教育長 鈴木淳一

あいさつ

当財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模開発に伴う埋蔵文化財の調査を実施しております。本報告書は、東日本大震災からの復興事業の一つである農山漁村地域復興基盤総合整備事業にかかる埋蔵文化財のうち、平成27年度に発掘調査を実施した五畠田・犬這遺跡の成果をまとめたものです。

今回の発掘調査では、縄文時代前期の集落跡の他に、古墳時代前期の集落跡、平安時代の土器づくりに関連する遺構を確認しました。

古墳時代の住居跡には規模に差があり、大型となる9号住居跡からは、土器類の他に装身具と考えられるガラス製小玉2点、石製管玉1点が出土したことは特筆に値します。

本報告書が今後の歴史研究の基礎資料として、さらには生涯学習の場やふるさとの歴史を解明するなど、「ふるさとの文化」を理解するために幅広く活用していただければ幸いです。

終わりに、東日本大震災からの早い復興が達成されますことを祈念するとともに、今回の発掘調査にご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元住民の皆様に厚く御礼申し上げます。また、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年2月

公益財団法人 福島県文化振興財団

理事長 杉 昭 重

緒 言

- 1 本書は、農山漁村地域復興基盤総合整備事業に関連して、平成27年度に調査を実施した南相馬市五畠田・犬這遺跡の発掘調査報告書である。
五畠田・犬這遺跡 福島県南相馬市原町区零字五畠田・犬這 遺跡番号：212500645
- 2 当遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が福島県農林水産部と協定を締結して実施し、調査に係る費用は福島県農林水産部が負担した。
- 3 福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財團に委託して実施した。
- 4 公益財団法人福島県文化振興財團では、遺跡調査部の下記の職員を配して調査にあたった。
副 主 幹 能登谷宣康 専門文化財主査 福田秀生 専門文化財主査 谷中 隆^{*1}
文化財主査 植松暁彦^{*2} 文化財主事 山田和史^{*3} 文化財主事 佐藤 俊
主 事 枝松雄一郎
*1 公益財団法人とちぎ未来づくり財团埋蔵文化財センターより出向
*2 公益財団法人山形県埋蔵文化財センターより出向
*3 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センターより出向
- 5 本書の執筆分担は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 6 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、ならびに福島県農林水産部相双農林事務所が製作した工事用地図を複製したものである。
- 7 引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、序章及び本文末にまとめて掲載した。
- 8 本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関及び個人から協力・助言をいただいた。
南相馬市教育委員会
松岡 克雄 後藤 信祐 天本 昌希 及川 良彦 小倉 徹也
(順不同・敬称略)

用例

- 1 本書における遺構図版の用例は、以下の通りである。
- (1) 方位 方位表記がない遺構図は、すべて本書の天を座標北とした。
 - (2) 縮尺 各挿図中にスケールとともに縮尺率を示した。
 - (3) 標高 断面図及び地形図における標高は、海拔標高を示す。
 - (4) 座標 平面図における座標は、平成23年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」による歪みを補正した平面直角座標系のIX系の数値を示している。
 - (5) 土層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字lと算用数字を組み合わせて表記した。
 - (6) ケバ 遺構内の傾斜部は「ミ」と、相対的に緩傾斜の部分には「ア」、後世の搅乱部や人為的な削土部は「ア」の記号で表現した。
 - (7) 用例 挿図中の網点等は同図中に用例を示した。
 - (8) 遺構番号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は略号で記載した。
 - (9) 土色 土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修『新版標準土色帖』に基づいている。
- 2 本書における遺物図版の用例は、以下の通りである。
- (1) 縮尺 各挿図中にスケールとともに縮尺率を示した。
 - (2) 番号 遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、写真図版中では「1-1」と示した。
 - (3) 土器断面 須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記し、胎土中に纖維が混和されたものには▲を付した。
 - (4) 用例 挿図中の網点等は以下を示す。これ以外は同図中に用例を示した。
-  黒色処理
- 3 本文中及び遺物整理に使用した略記号は、以下の通りである。
- | | | | | | |
|--------|-----|-----------|-----|--------|-----|
| 南相馬市 | MSC | 五畝田・犬這遺跡 | GSI | 竪穴住居跡 | S I |
| 掘立柱建物跡 | SB | 土器焼成遺構・土坑 | SK | 性格不明遺構 | S X |
| 埋甕 | SM | グリッド | G | 柱穴 | P |
| トレンチ | T | 遺構外堆積土 | L | 遺構内堆積土 | l |

目 次

序 章

第1節 事業の概要と調査経過.....	1
1. 事業の概要(1) 2. 調査経過(2)	
第2節 遺跡の位置と自然環境.....	5
第3節 歴史的環境.....	8
第4節 調査方法.....	12

第1章 調査1区の調査成果

第1節 遺跡の概要と基本土層.....	15
1. 調査1区の概要(15) 2. 調査1区の基本土層(15)	
第2節 壺穴住居跡.....	18
8号住居跡(18) 19号住居跡(23) 23号住居跡(28) 29号住居跡(30)	
30号住居跡(34)	
第3節 土坑.....	35
4号土坑(35) 5号土坑(36) 6号土坑(36) 7号土坑(40)	
第4節 その他の遺構と遺物.....	40
小穴(40) 遺構外出土土器(41) 遺構外出土石器・石製品(50)	

第2章 調査2区の調査成果

第1節 遺構の分布と基本土層.....	53
1. 遺構の分布(53) 2. 調査2区の基本土層(55) 3. 保存地区的出土遺物(56)	
第2節 壺穴住居跡.....	58
4号住居跡(58) 5号住居跡(60) 6号住居跡(62) 7号住居跡(68)	
9号住居跡(70) 20号住居跡(83) 22号住居跡(88) 28号住居跡(90)	
第3節 掘立柱建物跡.....	92
1号建物跡(92)	
第4節 土器焼成遺構.....	94
1号土器焼成遺構(94) 2号土器焼成遺構(97) 3号土器焼成遺構(98)	
第5節 土坑.....	100
3号土坑(100) 8号土坑(100) 9号土坑(100) 21号土坑(102)	
22号土坑(102) 23号土坑(103)	
第6節 その他の遺構と遺物.....	104
2号埋甕(104) 4号性格不明遺構(105) 遺構外出土遺物(105)	

第3章 総 括

第1節 旧石器・縄文・弥生時代の遺構と遺物	107
第2節 古墳時代の遺構と遺物	114
遺構について(114) 古墳時代前期の遺物(115)	
第3節 平安時代の遺構と遺物	118
土器焼成遺構(118)	
第4節 ま と め	119

挿図・表・写真目次

[挿図]

図 1 復興基盤総合整備事業位置図	1
図 2 調査区位置図	3
図 3 遺跡周辺の地形分類図	7
図 4 周辺の遺跡	10
図 5 グリッド配置図	13
図 6 調査1区遺構配置図・基本土層(1)	16
図 7 調査1区遺構配置図・基本土層(2)	17
図 8 8号住居跡(1)	19
図 9 8号住居跡(2)カマド	20
図 10 8号住居跡(3)	21
図 11 8号住居跡出土遺物	22
図 12 19号住居跡	24
図 13 19号住居跡出土遺物(1)	26
図 14 19号住居跡出土遺物(2)	27
図 15 23号住居跡・出土遺物	29
図 16 29号住居跡	31
図 17 29号住居跡出土遺物(1)	32
図 18 29号住居跡出土遺物(2)	33
図 19 30号住居跡	35
図 20 4・6・7号土坑	37
図 21 5号土坑	38
図 22 6・7号土坑出土遺物	39
図 23 調査1区遺構外出土遺物(1)	42
図 24 調査1区遺構外出土遺物(2)	43
図 25 調査1区遺構外出土遺物(3)	44
図 26 調査1区遺構外出土遺物(4)	46
図 27 調査1区遺構外出土遺物(5)	47
図 28 調査1区遺構外出土遺物(6)	49
図 29 調査1区小穴・遺構外出土遺物	51
図 30 調査2区遺構配置図・基本土層	54
図 31 保存地区住居跡出土遺物	57
図 32 4号住居跡	59
図 33 4号住居跡出土遺物	60
図 34 5号住居跡	61
図 35 6号住居跡(1)	64
図 36 6号住居跡(2)	65
図 37 6号住居跡出土遺物(1)	66
図 38 6号住居跡出土遺物(2)	67
図 39 7号住居跡	69
図 40 9a号住居跡(1)	71
図 41 9a号住居跡(2)	73
図 42 9a号住居跡出土遺物	75
図 43 9b号住居跡(1)	79
図 44 9b号住居跡(2)	81

図45	9号住居跡出土遺物	82
図46	20号住居跡(1)	84
図47	20号住居跡(2)	85
図48	20号住居跡出土遺物	87
図49	22号住居跡・出土遺物	89
図50	28号住居跡	91
図51	28号住居跡出土遺物	92
図52	1号建物跡	93
図53	1~3号土器焼成遺構	95
図54	1号土器焼成遺構・出土遺物	96
図55	2号土器焼成遺構	97
図56	3号土器焼成遺構・出土遺物	99
[表]		
表1	周辺の遺跡一覧	11
[写真]		
1	五畝田・犬道遺跡遠景(1)	125
2	五畝田・犬道遺跡遠景(2)	125
3	調査1区遠景(1)	126
4	調査1区遠景(2)	126
5	調査1区西部全景	127
6	調査1区東部全景	127
7	調査1区調査前現況・調査風景	128
8	調査1区全景・基本土層	128
9	8号住居跡全景	129
10	8号住居跡(1)	129
11	8号住居跡(2)	130
12	8号住居跡(3)	130
13	8号住居跡カマド(1)	131
14	8号住居跡カマド(2)	131
15	19号住居跡全景	132
16	19号住居跡	132
17	23号住居跡全景	133
18	23号住居跡	133
19	23号住居跡細部(1)	134
20	23号住居跡細部(2)	134
21	29号住居跡全景	135
図57	3・8・9・21~23号土坑	101
図58	21・22号土坑出土遺物	103
図59	2号埋甕・出土遺物	104
図60	4号性格不明遺構	105
図61	調査2区遺構外出土遺物	106
図62	五畝田・犬道遺跡の縄文~ 弥生時代の遺構分布	108
図63	五畝田・犬道遺跡出土の 主な縄文時代前期土器群	112
図64	住居跡規模	114
図65	古墳時代前期の関連遺物	116

表2 調査2区堅穴住居跡一覧 55

22	29号住居跡	135
23	30号住居跡全景	136
24	30号住居跡	136
25	4・5号土坑	137
26	6・7号土坑	137
27	8号住居跡出土遺物	138
28	19号住居跡出土遺物	139
29	29号住居跡出土遺物(1)	139
30	29号住居跡出土遺物(2)	140
31	6号土坑出土遺物	140
32	調査1区遺構外出土遺物(1)	141
33	調査1区遺構外出土遺物(2)	142
34	調査1区遺構外出土遺物(3)	143
35	23号住居跡・7号土坑・ 調査1区小穴・遺構外出土石器	144
36	調査2区全景(1)	145
37	調査2区全景(2)	145
38	調査2区保存地区全景	146
39	調査2区圃場整備区域全景	146
40	調査2区調査前現況・調査風景	147
41	調査2区全景・基本土層	147

42	4号住居跡全景	148	70	20号住居跡遺物出土状況	162
43	4号住居跡	148	71	20号住居跡(2)	162
44	5号住居跡全景	149	72	22号住居跡全景	163
45	5号住居跡	149	73	22号住居跡	163
46	6号住居跡全景	150	74	28号住居跡全景	164
47	6号住居跡(1)	150	75	28号住居跡	164
48	6号住居跡(2)	151	76	1号建物跡全景	165
49	6号住居跡(3)	151	77	1号建物跡	165
50	6号住居跡遺物出土状況(1)	152	78	1~3号土器焼成遺構遺物出土状況	166
51	6号住居跡遺物出土状況(2)	152	79	1号土器焼成遺構	166
52	6号住居跡遺物出土状況(3)	153	80	1·2号土器焼成遺構	167
53	6号住居跡遺物出土状況(4)	153	81	3号土器焼成遺構	167
54	7号住居跡全景	154	82	3·8号土坑	168
55	7号住居跡	154	83	9·21号土坑	168
56	9a号住居跡全景	155	84	22·23号土坑	169
57	9a号住居跡(1)	155	85	2号埋甕、4号性格不明遺構	169
58	9a号住居跡(2)	156	86	6号住居跡出土遺物	170
59	9a号住居跡(3)	156	87	9a号住居跡出土遺物	171
60	9a号住居跡(4)	157	88	9b号住居跡出土遺物	172
61	9b号住居跡全景	157	89	20号住居跡出土遺物(1)	172
62	9b号住居跡(1)	158	90	20号住居跡出土遺物(2)	173
63	9b号住居跡(2)	158	91	4·22·28号住居跡、 22号土坑出土遺物	173
64	9b号住居跡(3)	159	92	1·3号土器焼成遺構出土遺物	174
65	9b号住居跡掘形全景	159	93	9a号住居跡·2号埋甕、 遺構外出土遺物	175
66	9b号住居跡(4)	160	94	調査2区保存地区住居跡出土遺物	175
67	9b号住居跡(5)	160	95	土器細部、玉類集合	176
68	20号住居跡全景	161			
69	20号住居跡(1)	161			

序 章

第1節 事業の概要と調査経過

1. 事業の概要

平成23年3月11日、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震が発生した。この地震により太平洋沿岸を中心に高い津波が襲来し、福島県内では相馬港で高さ9.3m以上、小名浜港で3.33mの津波を観測し、福島県内沿岸市町村面積の5%にあたる112km²が浸水した。

これを受け、福島県農林水産部では、津波により被災(浸水)した農山漁村地域の復興を目的として、農地等の生産基盤整備(区画整理)事業を行う農山漁村地域復興基盤総合整備事業計画を策定した。この整備事業計画は、単なる原状復旧だけではなく、農地の大区画化により面的な集約・経営の大規模化・高付加価値化を行い、収益性の高い農業経営の実現を目指し、復旧・復興を加速化させるものである。また、集落周辺の地域における農業生産の整備を図るために、農業生産基盤の整備とその機能の発揮に不可欠な集落生活環境施設の整備を総合的に実施し、農村生活環境の向上に寄与するものであり、農林水産省の東日本大震災復興交付金の採択事業である。

この事業にかかる埋蔵文化財の取り扱いに関しては、平成24年度から福島県教育委員会と福島県農林水産部の間で協議を進めてきた。その中で、地震による地盤沈下や津波により耕土が流出した耕地の復旧・復興には大量の土が必要となるが、農地整備事業地に隣接する海岸丘陵の土取りにあたっては、福島県教育委員会と福島県農林水産部で遺跡及び遺跡の可能性の高い箇所を極力回避

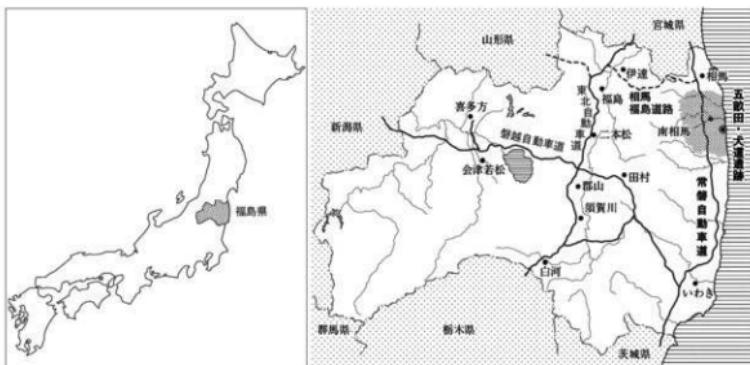


図1 復興基盤総合整備事業位置図

するよう調整を進めてきた。なお、農地整備事業の内の原町東地区において、福島県教育委員会が平成24年度に実施した分布調査では、五畝田・犬這遺跡をはじめとする9遺跡を周知の埋蔵文化財包蔵地として確認した。

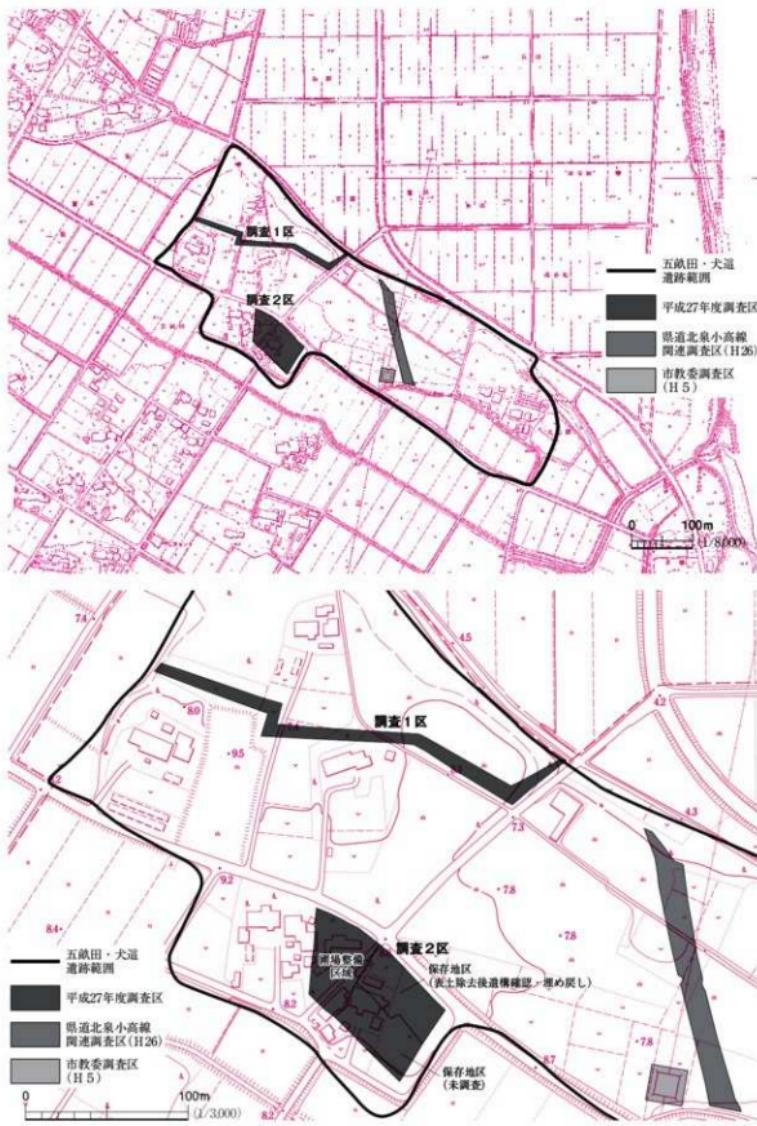
2. 調査経過

五畝田・犬這遺跡は、縄文・弥生・奈良・平安時代の集落跡及び遺物散布地として周知されている。平成5年には、送電線鉄塔建設に伴って原町市教育委員会(現、南相馬市教育委員会)が発掘調査を実施し、縄文時代前期の焼土遺構などが発見された(南相馬市2011)。

震災後、平成25・26年度に福島県教育委員会は農地整備事業及び県道北泉小高線整備事業に伴う確認調査を行い(福島県教育委員会2015)、平成26年度には福島県教育委員会は公益財團法人福島県文化振興財團に委託して、県道北泉小高線整備事業に伴う発掘調査(調査面積2,800m²)を実施した。この発掘調査で、縄文時代前期の集落跡及び弥生時代中期の土器植墓が発見された(福島県教育委員会2016)。また、平成26年7月には、農地整備事業に伴う確認調査の結果を受けて、福島県農林水産部・福島県教育委員会・南相馬市教育委員会の3者による協議がもたれ、要保存範囲の内、遺跡南西部の4,700m²の区域に関しては、水田として工事をするにあたり設計上掘削が避けられないことが確認された。さらに、この区域は南相馬市の防災集団移転事業に伴い市有地となっていることから、南相馬市と福島県のどちらが発掘調査をし、費用負担をするのかについて協議されたが、その後の協議で、福島県農林水産部で費用を負担し、福島県教育委員会が発掘調査することになった。

平成27年2月26日、福島県農林水産部・福島県教育委員会・公益財團法人福島県文化振興財團・JV(特定建設工事共同企業体)による協議がもたれ、発掘調査を4月下旬から開始することとし、発掘調査箇所・排土置場・調査連絡所用地・駐車場等の確認を行った。なお、この際に、福島県農林水産部が同市原町区金沢地区で農地整備事業の土取り候補地としている谷地中遺跡の発掘調査についても協議し、工事側による条件整備が整わず、発掘調査開始が7月以降にずれ込むことになった。当財團では、年度当初から五畝田・犬這遺跡と谷地中遺跡の調査を同時並行で実施する準備を進めてきたが、谷地中遺跡の調査にあたる予定である調査員を当面は五畝田・犬這遺跡の調査にあてることに関して、福島県農林水産部及び福島県教育委員会の了解を得た。

平成27年度になり、公益財團法人福島県文化振興財團では、平成27年4月1日付の福島県教育委員会との委託契約に基づき、遺跡調査部調査課の職員3名とそれに加えて、当初、谷地中遺跡の調査にあたる予定であった4名の調査員を配して、五畝田・犬這遺跡の調査にあたることにした。4月15日付で福島県教育委員会から当財團に対して、4,700m²の発掘調査の指示が通知され、4月22日の福島県農林水産部・福島県教育委員会・公益財團法人福島県文化振興財團による連絡調整会を受けて、当財團では調査準備作業を進め、4月下旬に調査連絡所のプレハブや仮設トイレを設置した。なお、4月22日の連絡調整会後に行われた福島県農林水産部・福島県教育委員会による



打ち合わせで、当初の発掘調査予定区域(圃場整備部分)の北側の遺跡範囲内において、福島県農林水産部で掘削面積が2,000m²を超える排水路設置を計画していることが判明した。再度、4月30日に福島県農林水産部・福島県教育委員会・公益財團法人福島県文化振興財團による連絡調整会が開かれ、当初の発掘調査予定箇所に加えて、排水路部分の発掘調査も実施することを確認した。これを受けて、翌5月1日付で福島県教育委員会から当財團に対して、排水路部分2,300m²の発掘調査の追加指示が通知され、この時点で、発掘調査指示面積は合計7,000m²となった。

当財團では、この2カ所の調査区を北側の排水路部分は調査1区、南側の圃場整備部分は調査2区と呼称して、5月7日から重機により調査1区の表土剥ぎを開始し、11日からは調査2区の表土剥ぎを開始するとともに、作業員10名を雇用して駐車場や調査区周辺の整備作業を実施した。18日からは作業員約30名を追加雇用し、本格的に両調査区の遺構検出作業に着手した。

ところが、5月15日に地元から福島県農林水産部に対して、調査2区の南東半2,300m²の区域に農機具格納庫を設置するための非農用地設定の要望が出された。これを受けて、19日に福島県農林水産部と福島県教育委員会の間で協議した結果、調査は既に開始されていたが、この区域の調査を一旦中断することになった。26日に福島県農林水産部・福島県教育委員会・公益財團法人福島県文化振興財團・南相馬土地改良区により、この区域の取り扱いについて協議がもたれ、この区域は圃場整備部分から除外し、既に表土除去が完了した部分については、竪穴住居跡などの遺構の検出状況の図面と写真撮影による記録を探るに留め、表土掘削前の地盤まで埋戻し表土掘削の及んでいた区域も含めて保存することになった。また、この際に除外された区域の面積は、5月1日付で調査指示のあった排水路部分の面積と相殺することになった。これにより、調査2区の調査面積は2,400m²となり、発掘調査指示面積は当初と変わらない4,700m²となった。

6月中は比較的好天に恵まれ、遺構の精査が順調に進んだ。調査の結果、調査1区では縄文時代前期前葉頃の竪穴住居跡4軒と平安時代の竪穴住居跡1軒を確認し、調査2区では古墳時代前期後半頃の竪穴住居跡7軒、平安時代の土器焼成遺構3基を確認した。調査2区では圃場整備から除外された部分を含めると、古墳時代前期に属する竪穴住居跡が20軒を超えることが推定され、南相馬市を含む浜通り地方北部地域でも比較的大規模な集落跡であったことが判明した。6月末にはラジコンヘリコプター搭載カメラにより、調査2区を中心とした空中写真撮影を実施し、空中写真撮影後、圃場整備除外範囲については埋戻しを実施した。

7月は雨天により作業中止となることもあったが、海沿いであるためか比較的涼しい天候であり、作業が順調に進捗した。調査2区では竪穴住居跡の精査が進み、中でも9号住居跡からは土器類の他にガラス玉や土製丸玉などが出土した。

8月1日には福島県教育委員会主催の現地説明会が開催され、気温30度を超える炎天下となつたにも拘らず、約80名の来賓者がいた。現地説明会後は遺構の最終的な調査を進め、8月5日には調査1区を中心とした空中写真撮影を実施し、7日には調査1区の調査が終了し、盆休み明けの21日には調査2区の調査が終了した。これを受けて、21日に福島県教育委員会・福島県農林

水産部・公益財團法人福島県文化振興財團の3者により調査終了を確認し、工事側へ現地を引渡した。その後、31日までに調査連絡所のプレハブと仮設トイレ等を撤収し、五畠田・犬道遺跡の発掘調査の全てを終了した。

(能登谷)

第2節 遺跡の位置と自然環境

五畠田・犬道遺跡は、福島県南相馬市原町区零字五畠田及び犬道地内に所在する。遺跡の中心は、北緯 $37^{\circ} 37' 04''$ 、東経 $141^{\circ} 00' 56''$ に位置する。現在の地理的位置は、JR常磐線原ノ町駅の南西約4.6kmに位置し、海岸線からの距離は約500mである。

福島県は、東北地方南部の太平洋岸に位置する。総面積は約13,782km²で、全国3番目の県土を有する。本県土は、およそ8割が山地で占められ、阿武隈高地、奥羽山脈や越後山脈の各山地に隔てられた地形・気候・交通・歴史の異なる3地方に区分される。これは、日本海側内陸部の会津地方、太平洋側内陸部の中通り地方、太平洋岸沿岸部の浜通り地方である。

遺跡の所在する南相馬市は、浜通り地方北部に位置している。同市は、東側が太平洋に面し、北は相馬市、西は相馬郡飯館村、南は双葉郡浪江町と接する。平成18年(2006年)に北から旧相馬郡鹿島町、旧原町市、旧相馬郡小高町が合併して南相馬市となり、現在人口約63,000人、市域面積は398.5km²を測り、県土の約2.8%を占める。気候は、太平洋の影響を受けた海洋性の気候で、夏季は比較的涼しく、冬季は降雪が少なく、稲作や梨をはじめとする果樹栽培などが盛んである。

浜通り地方の地形は、大きく阿武隈高地と浜通り低地帯の2つに分けられる。西部の阿武隈高地は、山棱の標高が500～700mと定高性を示し、隆起準平原と考えられている。阿武隈高地の東縁には、双葉断層が北北西から南南東へと走る。双葉断層は、宮城県境の宮城県亘理町から相馬市・南相馬市原町区を経ていわき市久之浜に至る、双葉断層崖に沿った延長約100kmの活断層または推定活断層で、その活動は新第三紀以前に遡るとされ、特に、本遺跡のある原町区を含む北部区間では第四紀後期以降も活動を繰り返したと考えられる。活動履歴は、最新活動時期は約2,400年前以降、2世紀以前とされ、その一つ前の活動時期は約14,000年前以降、約10,000年前以前と推測され、平均活動間隔は8,000～12,000年程度と推定されている(福島県1999)。

一方、この双葉断層の東側は、標高約120m以下の丘陵・段丘・平野の広がる浜通り低地帯となる。丘陵は、西から東へと緩やかに標高を下げながら海浜部まで延び、阿武隈高地から太平洋に向かって東に流れる河川によって樹枝状に開析され、その合間に河岸段丘や谷底平野が形成されている。

南相馬市域では、北から順に真野川、新田川、太田川、小高川などの河川が東流し、双葉断層以東の、特に、新田川と太田川に挟まれる原町区中心部においては、広範に段丘及び平野が形成されている。原町区の段丘は、高位・中位・低位各2面の計6面に分類(上から第1～6段丘。鈴木1986)され、さらに下位に埋没・海底段丘がある。原町区の中心部には、新田川支流の水無川沿い

に中位Ⅱ段丘(第4段丘)が幅広く形成され、南相馬市の伝統祭事である相馬野馬追が開催される雲雀ヶ原台地と称される。なお、この段丘や下位段丘(第5・埋没海底段丘)堆積層中の植物化石からは、亜高山帯の針葉樹種が優勢で、現在よりかなり寒冷気候であったことが知られる(鈴木1989)。

南相馬市は、阿武隈高地中央部を双葉断層に並走して走る畠川破碎帯以東に位置しており、阿武隈高地と低地帯の地質は、双葉断層を挟んで大きく異なっている。阿武隈高地内は、主に新生代の先第三紀(6,600万年前)の岩石で構成される。大部分は、中生代白亜紀前期(約13億年前)の造山活動で貫入した花崗岩・閃綠岩などの深成岩である。

市域北西の水無川・新田川・真野川の上流部には、これよりも古い、中生代のデボン紀から二疊紀(約2.9～3.7億年前)の粘板岩・砂岩・石灰岩などで構成される相馬古生層や、古生代先デボン紀系(約4.1億年前以前)の泥質・珪質片岩などで構成される松ヶ平変成岩が分布する。また、双葉断層の東側に接しては、中生代ジュラ紀から白亜紀最前期(約18～14億年前)の砂岩・頁岩などで構成される相馬中村層群・白亜紀前期(約14億年前)の火山岩石である高倉層が残存している。

なお、当地域の縄文時代や弥生時代に特有の打製石斧や磨製石斧、石包丁などの石材である粘板岩や変成岩類が産出する地層もこれらに含まれる。粘板岩は、前述した古生代デボン紀～二疊紀の相馬古生層(上から上野層・真野層・合ノ沢層など)に分布し、主により古期に属する合ノ沢層には灰色から青灰色のもの、新期に属する上野層・真野層には黒色のものが含まれるとされる(竹谷1983)。変成岩類(ホルンフェルスや緑色片岩など)も前述した相馬古生層よりも古い同先デボン系の松ヶ平・山上変成岩類との指摘がある(竹谷1983)。

一方、低地帯は、主に新生代新第三紀以降の堆積物で構成されている。双葉断層際では、阿武隈高地東麓部の谷を埋めるように新第三紀中新世前期(約2500万年前)の礫岩・砂岩・凝灰岩である塩手層・塩手層の上位の火山岩層である天明山層が散布する。丘陵部は、鮮新世に形成した半固結の泥岩・砂岩・凝灰岩が主体の仙台層群(約520万年前)を基盤とする。段丘及び平野は第四紀(165万年前)の未固結の礫・砂・泥で構成される。

なお、この第四紀の各河谷に発達する平野の下には、20～60mの厚さの「沖積層」が発達する(中馬他1981)。これは、約20,000年前頃の最寒冷期の最も低下していた海水面(後期旧石器時代後半。現海面より-100～-140m)が、その後列島の温暖化と共に4,000年前頃(縄文時代中期)までに行われた海水準の上昇運動により上昇したが、その運動に伴って集積された海成層を主とするものである。但し、この間一時期海水面の上昇運動の停滞や、末期には海面が現在よりも数m～約5m高く(中村2008)なっていたこと(縄文時代前期。縄文海進)、それ以降(縄文時代晩期)は海水準が若干低下したことなども知られている。そして、前述した沖積層は軟弱で、より深いところにある新第三紀層(仙台層群の滝の口層など)からの地下水の過剰揚水のため脱水を生じ収縮しやすく、この地域の地盤沈下を発生する原因ともなった(鈴木1989)可能性もある。

本遺跡は、新田川右岸にあたり、雲雀ヶ原台地の先端部から海岸低地の広がる海浜部へと、さらに南東方向に細長く伸びる幅150m程の中位段丘上に位置している。遺跡の標高は7～9mで、な

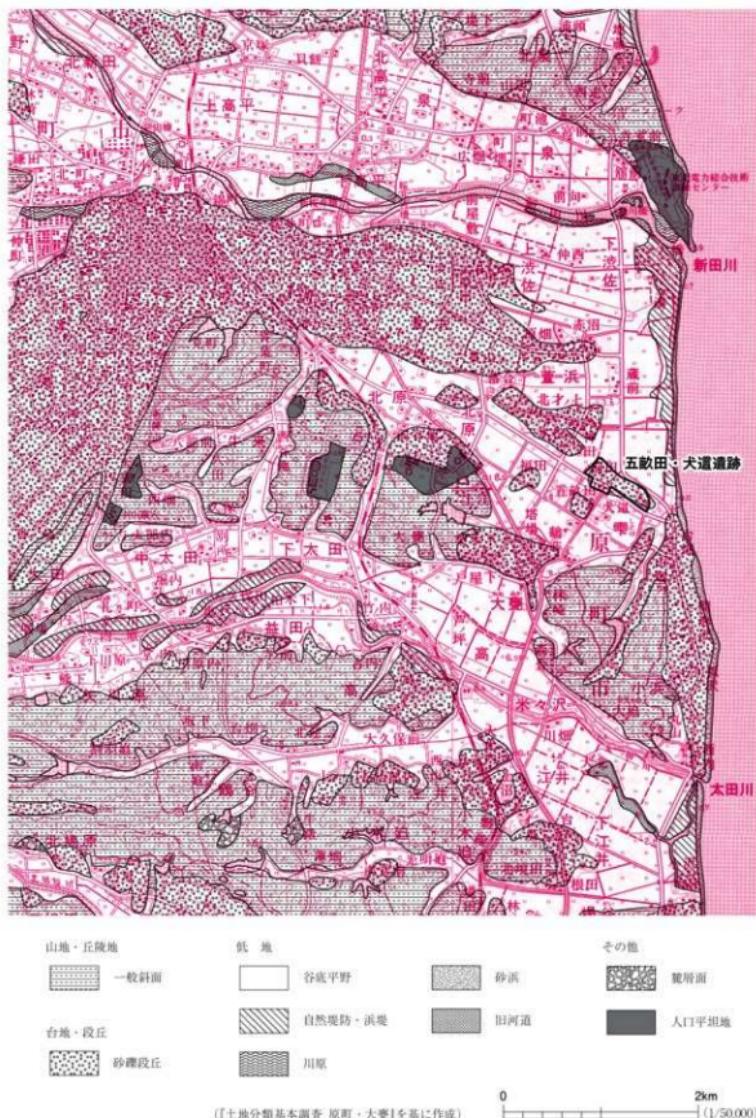


図3 遺跡周辺の地形分類図

だらかに東に向かって下がる。なお、本遺跡と同じ段丘上の縁辺には、ほぼ同じ標高で本遺跡と同時期の縄文時代早期末～前期の遺跡（南才ノ上遺跡・上渋佐前屋敷遺跡・桜井遺跡群）が、北に約2.5km離れた新田川まで断続的に分布する。周囲の海岸低地との高低差は約4m程度である。（植 松）

第3節 歴史的環境

今回の発掘調査の結果、調査1区では縄文時代前期前葉頃の竪穴住居跡や平安時代の竪穴住居跡、調査2区では古墳時代前期後半頃の竪穴住居跡や平安時代の土器焼成遺構を確認した。

本項では、本遺跡の周辺に所在する遺跡に触れながら南相馬市域の歴史的環境を概観する。なお、周辺の遺跡については、図4及びこれに対応する表1に示した。

南相馬市域における最も古い人類痕跡は、後期旧石器時代から始まり、八幡林遺跡、畦原A・C遺跡などが挙げられる。ただし、これらの遺跡は河川中流域の高位・中位段丘上に分布しており、いずれも図4及び表1中には現れてこない。

原町区内の縄文時代の遺跡では、遺跡が確認されるのは早期からであり、赤柴遺跡などで早期中葉の沈線文系土器が出土している。早期後葉から前期初頭は八重米坂A・B遺跡、原B遺跡など双葉断層に程近い高位・中位段丘上において集落が形成されることが多い。本遺跡と同時期の遺跡としては、集落遺跡である上渋佐前屋敷遺跡(33)が挙げられる。前期前半以降になると、海浜部にも遺跡が目立つようになる。小高区では丘陵及びその端部に形成された段丘上に宮田、加賀後などの貝塚が形成される一方で、原町区内では南才ノ上遺跡(40)、赤沼遺跡(37)のように、中位段丘の先端部に貝塚を形成しない集落が営まれている。中期には広い平坦な段丘地形に大規模な集落が形成され、小高区では国指定史跡浦尻貝塚が著名である。原町区では未調査ではあるが前田遺跡や高松遺跡が大規模集落と目されている。後・晩期には再び分散して遺跡が小規模化する傾向が見られ、海浜部の浜堤上にも北斎浜遺跡(22)のように遺跡が分布するようになる。

弥生時代では中期中葉から遺跡が見られるようになり、中期後葉に爆発的に増加する。桜井A遺跡(26)ほか周辺を含めた桜井遺跡の採集資料を標識とする桜井式土器を伴う遺跡が、原町区内の海寄りの丘陵や段丘の上を中心に各所に見られる。全面的な発掘調査は、川内迫B遺跡群(42)や原町火力発電所用地内の長瀬遺跡・大船迫A遺跡など主に丘陵上の遺跡で実施され、数軒程度の散在する住居跡と遺物包含層もしくは土器棺墓が見つかっている。これらの桜井式土器の出土する遺跡には、相馬古生層から産出される粘板岩(頁岩)を素材とする石包丁をはじめとする石器が多数伴うことが特徴である。後期の遺跡は少なく、原町火力発電所内の船沢A遺跡で天王山式土器が出土している。

古墳時代から飛鳥時代には大小多数の古墳・横穴墓が築かれる。著名な古墳としては、前期の前方後方墳である国指定史跡桜井古墳を含む前期～後期の桜井古墳群(24～26)がある。6世紀代には各地に群集墳が築かれはじめ、7世紀代は群集墳に加え横穴墓群も多数形成されるようになる。横穴墓の中でも国指定史跡羽山横穴は装飾横穴として有名である。また、史跡桜井古墳の西側に

は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、江戸時代の複合遺跡である高見町A遺跡(24)が隣接している。

奈良・平安時代には当地域は行方郡に属していた。新田川の北岸に位置する泉官衙遺跡(9)は行方郡家と目される遺跡であり、これまで郡守院、正倉院、館院、付属寺院などが確認されている。本遺跡は、平成22年に国史跡に指定され、福島県内にある官衙遺跡としては、3例目となる。泉官衙遺跡の所在する新田川周辺の低地を挟んで位置する北の北泉丘陵と南の大甕丘陵には、古代の生産遺跡が多数存在することが知られている。北泉丘陵では原町火発地内の金沢地区製鉄遺跡群が有名である。7~10世紀にわたって鉄生産及びその燃料の木炭生産が行われ続け、製鉄炉、木炭窯の変遷も追えるという非常に重要な遺跡群である。伴出する墨書き器等の遺物や火葬骨蔵器を伴う墳墓の存在から郡司階級の人物が操業を管掌していたと考えられている。大甕丘陵にも泉官衙遺跡の創建時から前半期に瓦を供給した京塙沢瓦窯跡B(64)や川内迫B遺跡群(42)、蛭沢遺跡群(43)といった製鉄遺跡などの生産遺跡が多数分布している。ただし、これらの遺跡は遅くとも10世紀まで終わるものが多く、平安時代末期については史料や該期の遺跡例に欠け、詳細は不明である。

鎌倉時代には、下総国相馬郡・相馬御厨の地を支配した千葉氏の流れを汲む相馬氏が、奥州藤原家討伐の功により当地域を所領として得たものとされている。泉官衙遺跡では13世紀後半に遡りうる屋敷地が確認されている。遺跡に隣接して所在する泉觀音堂には弘安6(1283)年の胎内銘を持つ十一面觀音立像があり、また、新田川沿いには14世紀代の銘を持つ板碑が複数発見されており、新田川下流域がこの時代の中心であったことを窺わせる。

1323(元亨3)年に千葉氏後裔の相馬重胤が下総国から入部して以降は、近世の終焉まで相馬氏の支配地として発展する。下総国から入部した相馬氏の最初の居城となる別所館跡や、相馬中村城が築かれるまで重要な役割を占めた小高城跡、家臣の居館である泉平館跡(5)、壹山館跡(52)等、城館が多数築かれるが、これらは、1611(慶長16)年に相馬氏が相馬中村城へ移転するとともに廢されるようである。

また、相馬氏は伝統的に馬を手厚く保護しており、近世には現在の原町区市街地の大部分を取り囲むように、野馬土手と呼ばれる東西10km×南北約2.6kmの範囲で土塁を築き、その内部を相馬中村藩営の牧として野馬の育成、軍事教練に生かしている。このような馬を育む伝統は、国指定重要無形民俗文化財として有名な相馬野馬追となって、現代にも受け継がれている。

明治の廃藩置県後は、中村県、平(磐前)県の所属を経て、明治9年に福島県の所属となった。昭和29年には原町市、鹿島町、小高町の1市2町がまとまり、平成の大合併により現在の南相馬市となった。

(枝 松)

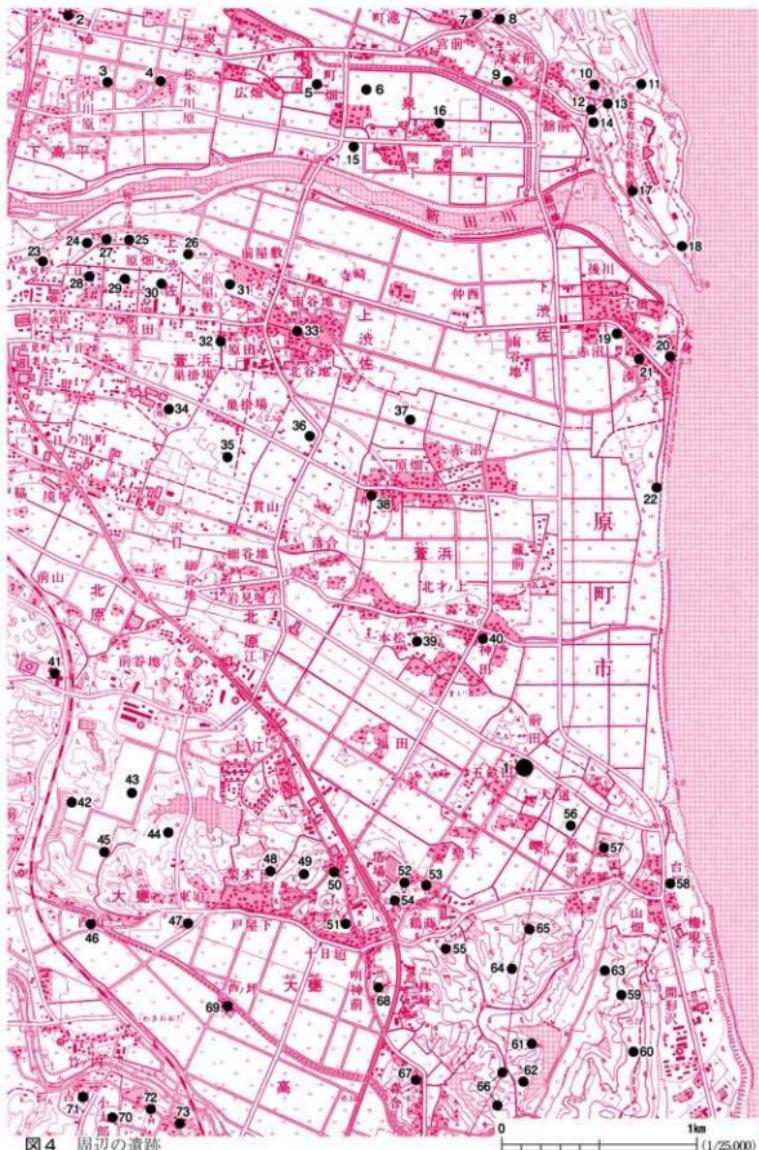


図 4 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧

遺跡名	時代	種別	遺跡名	時代	種別
1 五軒田・大道	绳文・弥生・古墳・奈良・平安	集落跡	38 豊浜原遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	散布地
2 古館	弥生	散布地	39 愛原	奈良・平安	散布地
3 荒井前	古墳・奈良・平安・中世	寺社跡・集落跡	40 南才ノ上	绳文・古墳・奈良・平安	散布地
4 牛渡前	弥生・奈良・平安	散布地	41 川内庭	弥生	散布地
5 風船跡	奈良・平安・中世	城郭跡・散布地	42 川内庭B道路群	绳文・弥生・奈良・平安	集落跡・製鉄跡
6 武塚	奈良・平安	集落跡・散布地	43 綾沢道路群	绳文・弥生・奈良・平安	集落跡・製鉄跡
7 西走B	弥生・平安	製鉄跡・散布地	44 西道東船橋穴墓群	古墳	横穴墓
8 西走	弥生	散布地	45 西道	古墳	横穴墓
9 国指定史跡象宮街	弥生・古墳・奈良・平安・中世	官衙跡・集落跡	46 尾田	古墳	散布地
10 皇船跡	平安・中世・近世	城郭跡	47 吉古船跡	中世	城郭跡
11 地藏堂横穴墓群	古墳	横穴墓	48 戸屋下船跡	中世	城郭跡
12 鎌前古墳A	古墳	古墳	49 梨木下西船跡	中世	城郭跡
13 鎌前古墳B	古墳	古墳	50 梨木下東船跡	中世	城郭跡
14 竹ヶ沢	弥生	散布地	51 菩提船跡	中世	城郭跡
15 正福寺跡	近世	寺社跡	52 貴山船跡	中世	城郭跡
16 司	古墳・奈良・平安	集落跡	53 鶴跡	弥生	散布地
17 鶴塚古墳群	古墳	古墳	54 鶴跡B	弥生	散布地
18 大戦横穴墓群	古墳	横穴墓	55 鶴跡船跡	中世	城郭跡
19 下浜佐奉沼	绳文・奈良・平安	散布地	56 大道瓦窯跡	奈良・平安	窯跡
20 大身	弥生	散布地	57 五畠田B	弥生	散布地
21 嵐	绳文・古墳	散布地	58 京塙沢	绳文・弥生	散布地
22 北黄浜	绳文	散布地	59 京塙沢B	奈良・平安	製鉄跡
23 高見町C	弥生・古墳・奈良・平安	散布地	60 京塙沢C	奈良・平安	窯跡
24 高見町A・桜井古墳群 高見町支群	绳文・弥生・古墳・奈良・平安	集落跡・古墳	61 京塙沢E	奈良・平安	製鉄跡
25 国指定史跡桜井古墳	古墳	古墳	62 京塙沢D	奈良・平安	製鉄跡
26 桜井A・桜井古墳群 上浜佐支群	绳文・弥生・古墳	集落跡・古墳	63 京塙沢E・京塙跡A	奈良・平安	窯跡
27 桜井荒廃敷	绳文・弥生・平安	散布地	64 京塙沢瓦窯跡B	奈良・平安	窯跡
28 桜井C	弥生・古墳・奈良・平安	散布地	65 京塙沢F	奈良・平安	製鉄跡
29 高見町B	绳文・弥生・古墳・奈良・平安	散布地	66 田堤	平安	製鉄跡
30 桜井B	弥生・古墳・奈良・平安	散布地	67 叩下横穴墓群	古墳	横穴墓
31 桜井D	弥生・古墳・奈良・平安	散布地	68 明神船跡	中世	城郭跡
32 上浜佐原田	弥生・古墳・平安	集落跡	69 芦ノ坪	奈良・平安	散布地
33 上浜佐原屋敷	绳文・弥生・古墳・奈良・平安	集落跡	70 枝の上	绳文・弥生・古墳・奈良・平安	散布地
34 草原場	绳文・弥生・奈良・平安・中世	散布地	71 古内	奈良・平安	散布地
35 草原場B	绳文	散布地	72 城ノ内	奈良・平安	散布地
36 草原	弥生	散布地	73 高船跡	中世	城郭跡
37 赤沼	绳文	散布地			

第4節 調査方法

五畠田・犬這遺跡において公益財團法人福島県文化振興財團が実施した発掘調査は、平成26年度に実施した県道北泉小高線整備事業に関わる発掘調査に続き、平成27年度の復興基盤総合整備事業に伴う調査で2度目である。当該年度の発掘調査は、北側の排水路建設部分と南側の圃場整備部分の大きく2カ所の調査区に分かれたことから、便宜的に前者を調査1区、後者を調査2区と呼称した。

遺跡の位置表示や測量にあたっては、これまでの調査記録との整合を図るために、測量の基準として遺跡全体を網羅する世界測地系を基準とする国土座標第Ⅷ系を用いた10m四方の方眼(グリッド)を設定した。グリッド原点の座標は、X座標が180,400、Y座標が104,000である。グリッドは、100m四方の大グリッドを設定し、原点から東に向かってA・B・C…、原点から南に向かって1・2・3…とした。さらに大グリッドの内部を10m四方となる100個の小グリッドに分けた。小グリッドは北西隅から南東隅に向かって1～100とした。そのためグリッドの呼称は、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、例えばA 3-77グリッドとした。平成26年度の発掘調査で用いたグリッド原点(X座標180,200・Y座標104,400)は、平成27年度調査におけるE 3-1グリッドに該当する。

本書の遺構番号については、当財團が平成26年度に実施した五畠田・犬這遺跡の発掘調査(『福島県文化財調査報告書第507集』)に統いて通し番号を付した。本書では4号住居跡、3号土坑、2号埋甕、4号性格不明遺構から付している。

遺構の図化などの諸記録にあたっては、小グリッドを1m四方の方眼に分け、それらを基準として図化した。遺構などの位置は国土座標値を用いて表示した。標高については、調査区周辺の既知点から水準点を移動し、それらを測量の基準とした。

調査区の現況は、調査1区が畠・宅地、調査2区が宅地である。発掘調査に伴う排土に敷砂利や建物基礎などが混入することを避けるために、調査2区では宅地とその進入路にある敷砂利等の撤去から開始した。本格的な表土除去は調査2区の北側から着手したが、第1節で前述したとおり、急きょ工事計画の変更があり、調査1区の表土除去が優先された。一方、一部表土除去に着手していた調査2区の南東半分は発掘調査が検出作業まで中止となり、北西半部のみが調査対象となつた。なお、遺構検出面や遺物包含層の上面までを覆う表土については、重機を用いて除去し、クローラーダンプで排土置き場まで運搬した。表土の除去後は基本的に人力で掘削作業を進め、遺構や遺物の確認に努めた。

遺構の掘り込みにあたっては、遺構の性格を把握できるように土層観察用畔を設け、遺物などの出土状況を確認しながら精査した。特に竪穴住居跡や大型となる土坑は十字に畔を残し、小型の土坑は堆積土を半裁して堆積状況を確認した。遺構外の遺物は、出土位置をグリッド及び、出土層位

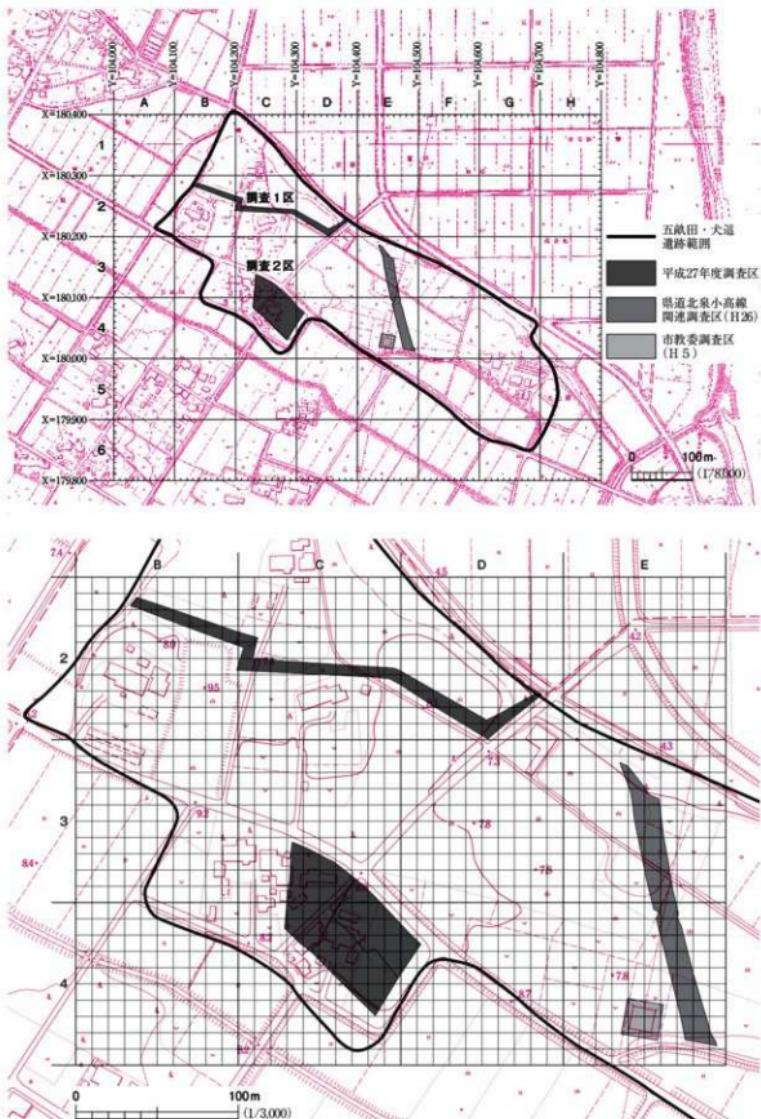


図5 グリッド配置図

序　　章

を表示して取り上げた。遺構内の遺物は、出土状況を確認するとともに土層観察で分層した層位ごとに取り上げた。

発掘調査の記録は、実測図作成と写真撮影を実施した。実測作業は、遺構の特徴や遺物の出土状況を表現できる縮尺(1/10・1/20など)で図化し、調査区の地形測量図は1/200で作成した。写真記録は、検出状況や堆積状況、遺物の出土状態と全景など、調査の進捗に併せて隨時撮影した。写真は同一被写体を35mm判のモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルム及びデジタルカメラで撮影している。また、ローリングタワーを用いた高位置からの写真撮影だけでなく、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、調査区の全景写真や遺跡の立地する地形を含めた遠景写真も撮影した。

発掘調査で得られた諸記録と資料は、当財團で整理作業を行い、調査報告書を作成した。報告書刊行後は各種台帳を作成し、閲覧が可能な状態で福島県教育委員会に移管し、福島県文化財センター白河館に収蔵する。

(福　田)

引用・参考文献

- 南相馬市教育委員会 2010 「南相馬市埋蔵文化財調査報告書第16集 野馬土手・原町西町遺跡」
- 南相馬市教育委員会 2010 「南相馬市埋蔵文化財調査報告書第17集 鮫崎船跡」
- 南相馬市教育委員会 2010 「南相馬市埋蔵文化財調査報告書第18集 南相馬市内遺跡発掘調査報告書6」
- 福島県教育委員会 2016 「賀道北泉小高線開通遺跡発掘調査報告1 五戸田・大這遺跡」
- 南相馬市 2011 『原町市史 第三巻 資料編Ⅰ「考古」』
- 福島県教育委員会 2015 「東日本大震災復興関連遺跡調査報告1」福島県文化財調査報告書第503集

第1章 調査1区の調査成果

第1節 遺跡の概要と基本土層

1. 調査1区の概要（図6・7、写真5～8）

五畠田・犬道遺跡は太平洋に向かって南東方向に延びる標高8m前後の微高地上に立地する。調査1区は、東西長が約280mで、南北幅が6mとなる東西方向に長大な調査区となり、遺跡が立地する微高地の北側縁辺に沿ってトレンチ調査を行ったことになる。

調査1区では、縄文時代前期前葉を主体とし、旧石器時代、弥生時代と平安時代の遺構・遺物を確認した。縄文時代に属する堅穴住居跡の年代は、縄文時代前期前葉でも19号住居跡は大木1式期、29・30号住居跡は大木2a式期に属する。なお、平成26年度の調査では縄文時代前期中葉頃の大木4式期に属する堅穴住居跡が確認されている。調査1区でも縄文時代前期中葉頃の遺物は採集されているが、その出土量は極めて少ない。調査1区の成果として、遺跡が立地する微高地の縁辺部を中心に、縄文時代前期に属する集落域が、時期ごとに細かく移動していることがわかる。なお、旧石器時代と弥生時代については、いわゆるナイフ形石器と弥生土器の破片と石包丁などを採集したに止まる。

平安時代の遺構は、調査1区の西端部で検出された8号住居跡のみである。カマドや貯蔵施設を伴う住居跡であるが、その規模は東西21m、南北3mと小型である。また調査2区の平安時代の遺構は掘立柱建物跡1棟と土坑3基、土器焼成遺構3基が検出されている。各調査区とも遺構や遺物が希薄であることから、小規模な集落であったと推定される。

2. 調査1区の基本土層（図6・7、写真8）

調査1区の基本土層については、L I～L IVまでの大きく4層に分けた。L Iは現在の表土層を総称する。そのうちL I aは調査区の中央部に認められ、津波被害後に行われた住宅等の撤去工事に起因する瓦礫などが含まれる。L I bは水田耕作土である。

L IIは表土以下でL IIIを覆う土層を総称した。L IIは炭化物を含む暗褐色土で、遺跡が立地する微高地上の平坦地全域に認められる。L IIの厚さは10～20cmである。L IIには縄文時代前期を主体とする遺物が含まれる。また、調査区東端は標高3.7m付近で、海岸平野となる低地にあたる。その堆積層をL II a～L II fまで細分した。黒色を基調とする粘土層で、部分的に灰白色砂や植物を多く含む泥湿地状の堆積物が確認できた。なお、低地堆積物には遺物が確認できなかった。L II d上面からは湧水が認められる。

L IIIは黄褐色を基調とする基盤土で、縄文時代に属する遺構の検出面となる。L IIIは堆積状況と

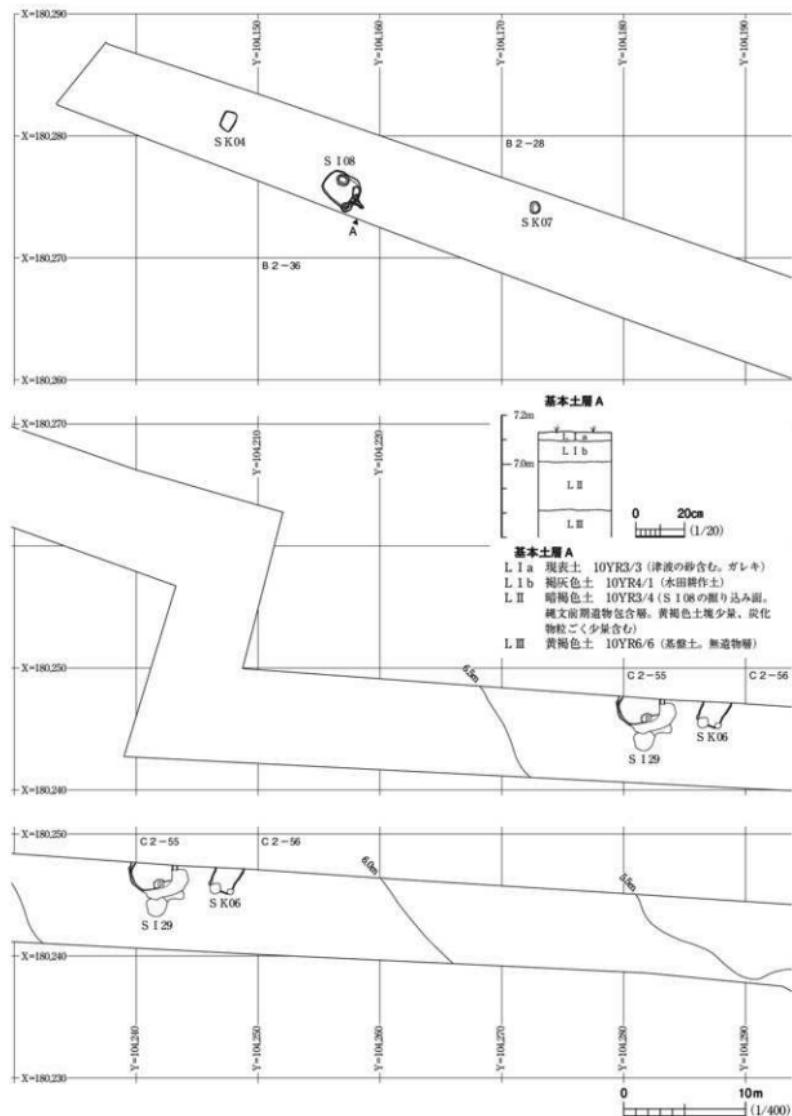


図6 調査1区遺構配置図・基本土層（1）

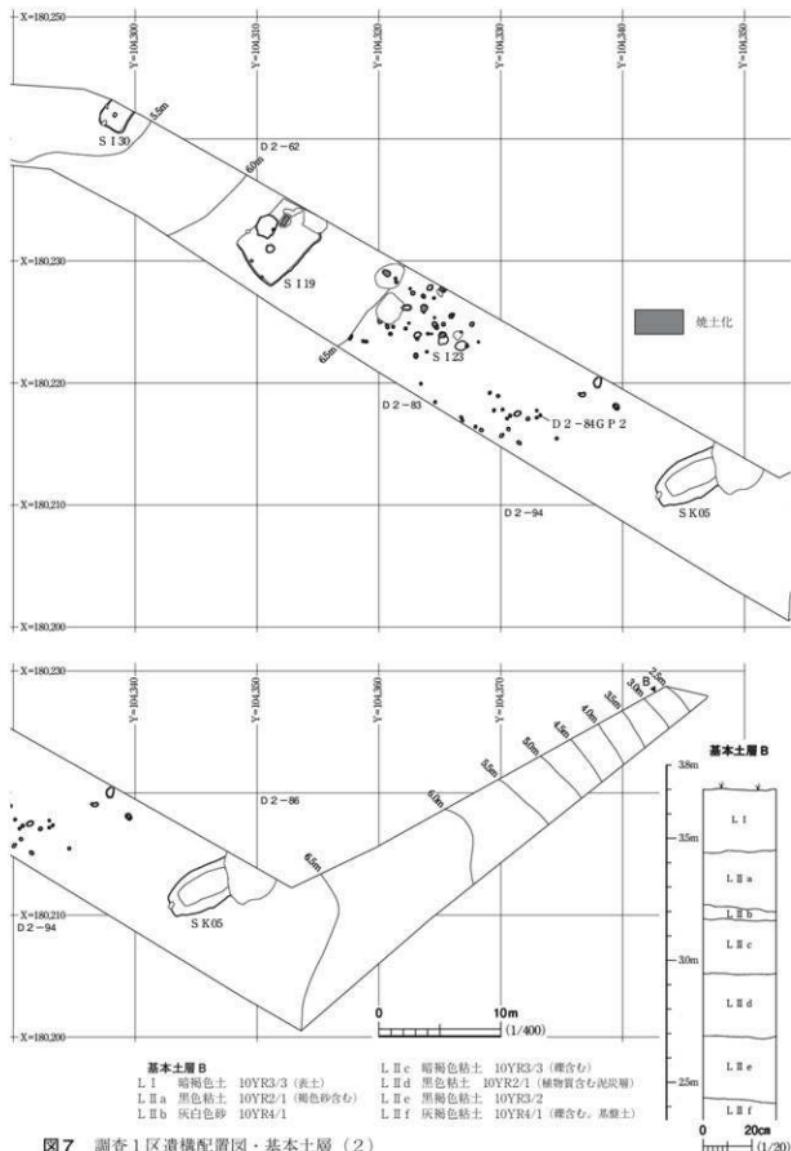


図7 調査1区遺構配置図・基本土層（2）

含有物の違いから複数に分けられる。調査区東端部で、標高6.5m付近では礫を含む黄褐色土が露頭する。なお、旧石器時代の石器は認められなかった。

L IVは褐灰色岩盤である。29号住居跡の掘形底面となる標高6m前後の深さで確認した。

(福 田)

第2節 壁穴住居跡

8号住居跡 S I 08

遺構 (図8~10、写真9~14)

8号住居跡は調査1区の西端部、B 2~26グリッドに位置する。周囲は平坦地で、その標高は6.9mである。本遺構と重複する遺構はないが、北西側9mに4号土坑が分布する。遺構検出面は、L IIとした縄文時代の遺物を含む暗褐色土の上面である。

8号住居跡の平面形は長方形を基調とするが、東壁に比べて西壁がやや狭い台形状をなす。規模は東壁の長さが2.1m、西壁の長さが1.85mを測り、南北壁の長さが3.0mを測る。遺構検出面から床面までの深さは20cmである。住居内の堆積土は9層に分けた。 ℓ 1~2は床面を覆う黒褐色土で、堆積状況の観察から自然流入土と判断した。 ℓ 3は南壁際にのみ認められる暗褐色土で、壁面崩落土を含んでいる。 ℓ 4~8は、P 3に堆積する黒褐色土である。床面を覆う ℓ 2がP 3内部に流れ込む堆積状況から、本住居跡の廃絶時までP 3が開口していたものと推察できる。 ℓ 9は東壁を除いた周壁際を巡るように掘り込まれた浅い溝状の窪みを埋める土層である。黒色土と黄褐色土が混ざる土層で硬く締まることから、 ℓ 9の上面が床面となると判断した。

周壁は北壁の遺存状態が悪いが、それ以外の周壁は急傾斜となって立ち上がる。床面はL IIIまで達しており、ほぼ平坦に造られている。床面中央部は、住居跡の掘形の底面をそのまま床面とするが、東壁を除いた周壁際に巡る浅い溝状の窪みを埋めて床面が造られている。

住居跡内の施設として、カマドとP 1~9を確認した。カマドは東壁の中央部に造られている。カマドは天井部が崩落しているが、比較的の遺存状態が良好である。カマドの燃焼部底面には、一辺の長さが45cm、奥行きが35cm、厚さが8cmの粘土を貼って平滑な火床面を造っている。カマド前面における床面との段差は7cmとなる。カマド袖は扁平な石を芯材として用い、それに粘土を被覆して造られており、燃焼部の両端に揃えて立てられている。燃焼部底面に残る火熱を受けて焼土化した範囲から、カマド燃焼部の内幅は35cmで、袖の厚さが20cmであることが推定される。煙道は燃焼部奥壁をトンネル状に掘り込む構造で、東壁に対して直交するように真っ直ぐに延びる。煙道の先端部に向かって燃焼部底面よりも深くなるように緩やかに傾斜している。煙道の先端は垂直気味に立ち上がる。底面には小穴状の掘り込みは認められない。

粘土を用いて作られた燃焼部底面を除去した後に、わずかに焼土化し、浅い窪みが認められ、これを7層とした炭化物を含む黒褐色土が覆っていた。作り替えられた古いカマドに関わるものと考

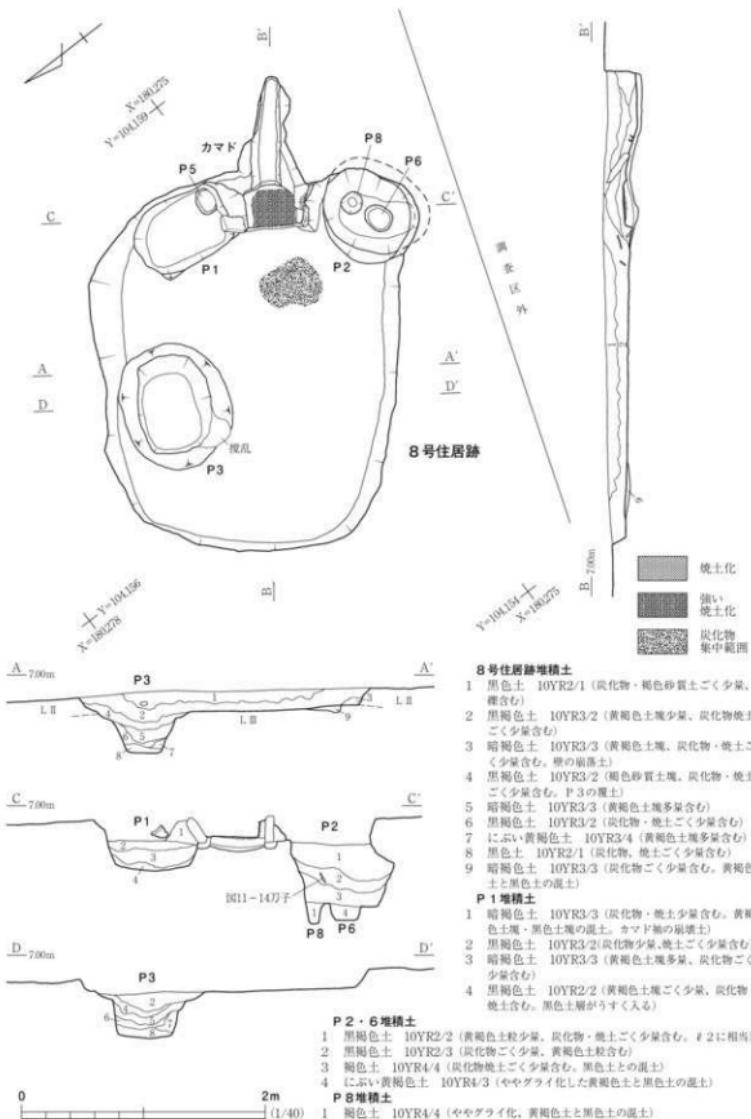


図8 8号住居跡 (1)

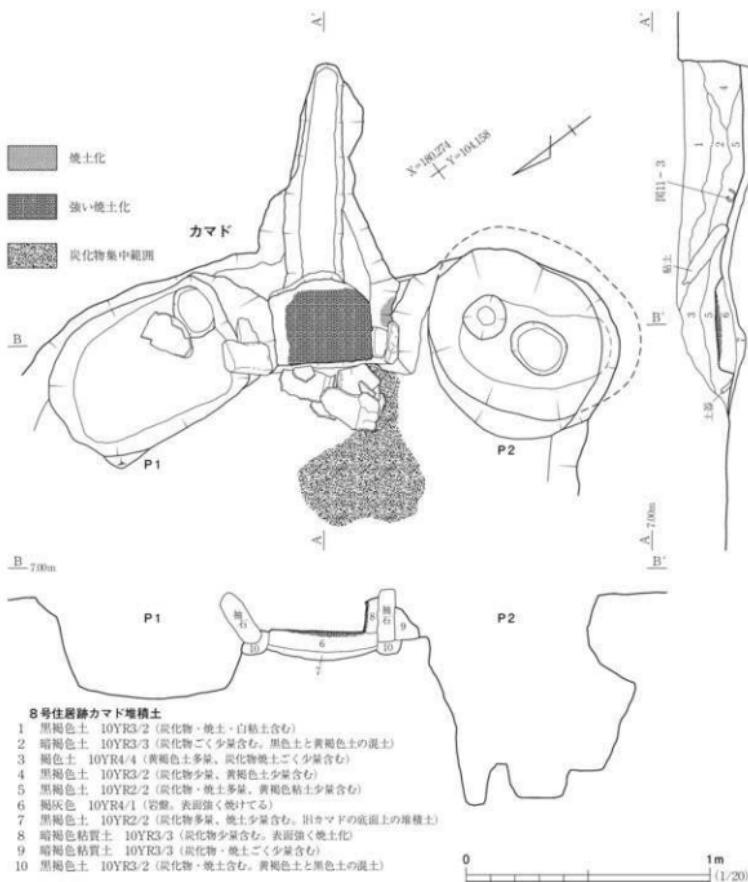


図9 8号住居跡（2）カマド

えられるが、詳細な構造を復元できる痕跡は確認できない。

P 1 はカマドの北側に位置する。土層観察とカマド袖が倒れ込んでいる状態から、廃絶時には埋められていたものと判断した。P 2 はカマドの南側に位置する。底面付近が袋状に掘り込まれ、南側の周壁がオーバーハンプグしている。堆積土の観察から、廃絶時まで埋められることなく開口していたと考えている。床面からの深さが50cmと深い。P 3 は北壁の中央に接する位置にある。床面に接する部分に浅い段を持って、2段に掘り込まれている。この浅い段について、P 3 を塞ぐ木蓋の痕跡であろうか。土層観察からも本住居跡の廃絶時には開口していたものと判断した。P 4・7

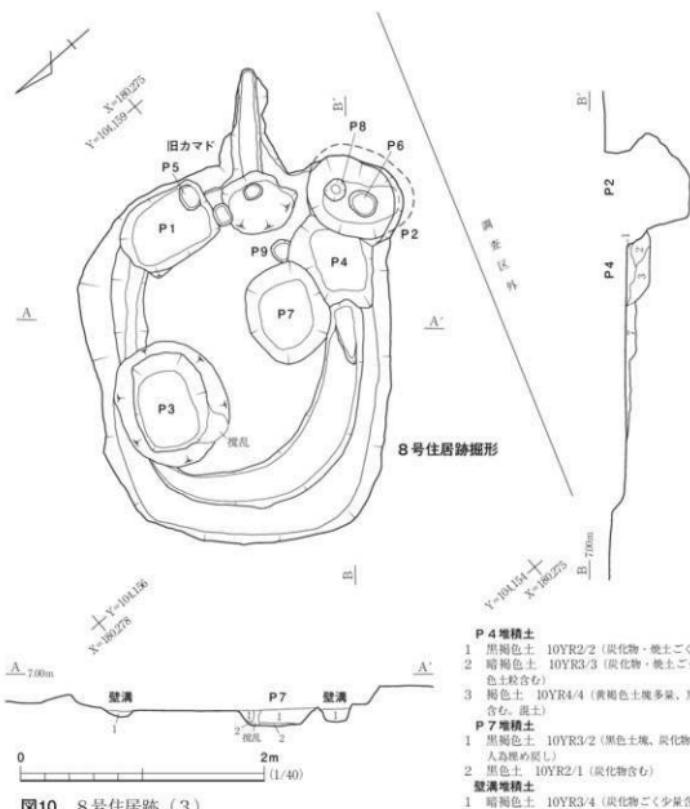


図10 8号住居跡（3）

はカマドの前面でやや東壁寄りの場所に位置する。P 2が開口している段階では、既に人為的に埋められている。P 5・6・8はいずれも直径が20cm程の小穴である。P 5はP 1の南端、P 6・8はP 2の底面を掘り込んでいる。カマド袖の外側の位置に配されることから、カマド周囲の東壁を支える柱材を据えた穴であろう。P 9はカマドの前面に位置する。床面からの深さは10cmと浅い。堆積土は炭化物や焼土をわずかに含む黒褐色土である。P 9の具体的な性格は不明であるが、古い段階のカマドに伴う施設であろうか。

遺物 (図11、写真27)

8号住居跡からは、土師器片が160点、須恵器片が10点、鉄製品が1点出土した。土師器片のはほとんどは図11に示すとおり、カマド前面から出土した土師器甕(図11-8～13)である。器種では土師器杯の破片は極めて少なく、図示した2個体程度であろう。

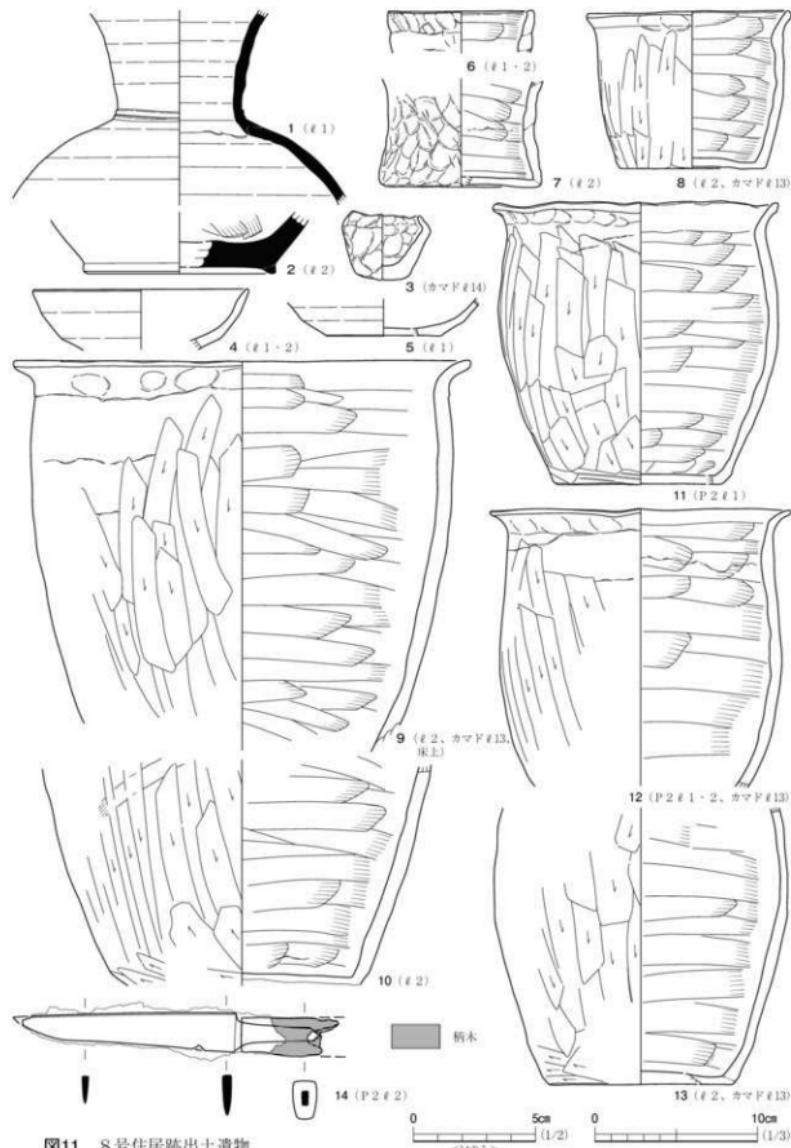


図11 8号住居跡出土遺物

図11-1・2は口縁部と体部の大半を欠損するが、同一個体となる須恵器長頸瓶である。頸部と体部の境にやや形状の崩れたリング状の突帯がめぐる。底部にはややつぶれているが、つま先立ちとなる高台が貼り付けられる。図11-4・5は土師器杯である。全体的な器形がわかるものがなく、体部が底部からやや丸みを帯びて立ち上がる。内面にミガキと黒色処理は施されない。図11-3はカマド煙道の中ほど位置から底面と接して出土した。甕形となるミニチュア土器で、口縁部が小さく内湾する。住居廻廊に伴い煙道内に置いたのであろう。図11-6・7は筒形土器である。外面には粘土積み上げ痕を残し、内面は横位のナデ痕が明瞭に観察できる。図11-7は体部下半から底部にかけての破片で、体部が内傾してくびれる。

土師器甕は全体的なサイズがわかるものが少ないが、口径の違いが明瞭である。図11-8は口径が12.4cmで小型、図11-9は口径が28.4cmとなる大型、図11-11・12は口径が17.6・18.2cmで中型に分けた。なお、9・10は同一個体である。土師器甕の基本的な作りは、サイズによる違いではなく、整形にロクロは用いられていない。口縁部は幅が短く、頸部で大きく開く。体部は中央部に最大径を持ち底部に向かってわずかにすぼまる。口縁部はユビオサエの痕跡を残し、体部は継位のケズリが施されている。内面は横位のナデによって器面が整えられる。

図11-14はP2のℓ2から出土した刀子である。刀身と柄部の境が、峰方と刃方とも直角に切り落とされる。柄は端部に向かって細く尖る。また、柄部には木質痕跡が遺存する。

まとめ

本住居跡は調査1区で検出された平安時代に属する遺構である。住居跡の規模が3m前後と小さいが、東壁の中央にカマドが設けられ、カマドの脇や床面を掘り込む施設を伴う特徴が認められる。土師器甕が数個体分認められるものの、杯はわずかである。その他に須恵器長頸瓶と刀子を伴う。本住居跡の年代は、出土した遺物の特徴から9世紀後半頃と考えている。(福田)

19号住居跡 S I 19

遺構 (図12、写真15・16)

19号住居跡は調査1区の中央からやや東よりのD2-61・62・71・72グリッドに位置する。微高地の北側縁辺部にあたり、北西側に向かって低くなる緩斜面に立地する。その標高は6.2~6.4mである。本遺構と重複する遺構はないが、北西13mに30号住居跡が分布する。遺構検出面はLⅢ上面である。

本遺構は北端部が調査区外へと続き、その全容は不明である。確認できた範囲から、平面形は長方形である。住居跡の長軸方向は、周囲の等高線と平行する。規模は長軸が6.0m、短軸が4.8mを測る。検出面から床面までの深さは最大で25cmである。遺構内堆積土は3層に分けた。ℓ1・2は住居跡の床面を覆う黒褐色を基調とする堆積土である。堆積土に含まれる含有物が均質となる堆積状況から、住居の廻廊後に自然流入土によって埋没したものと判断した。ℓ3はLⅢを起源とする黄褐色土を含む堆積土で、斜面上位となる壁際にのみ認められる。住居跡の埋没過程において、

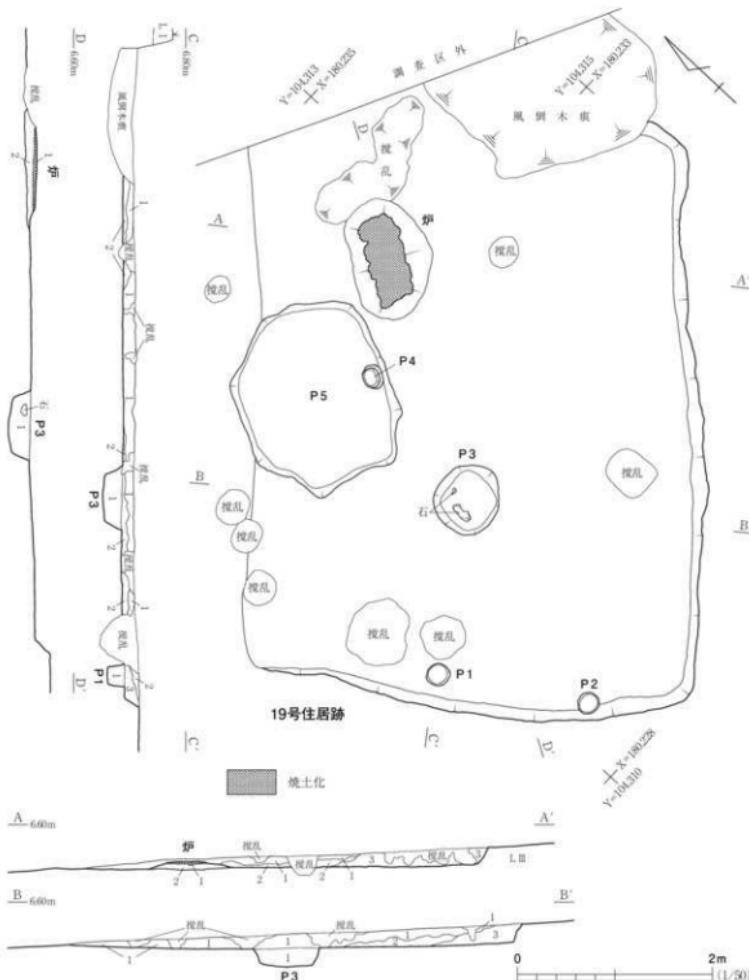


図12 19号住居跡

比較的早い段階の周壁の崩落土と考えている。

本住居跡は斜面に立地するため、斜面下位側の西壁は遺存していないが、それ以外の周壁は垂直気味に立ち上がる。床面は平坦で、わずかに西側に向かって低く傾斜する。床面上で確認した施設として、炉跡を1基とP1～5を確認した。炉跡は床面の中軸線上からやや北に寄った位置に設けられる。炉跡の上面は、火熱を受けたために赤褐色に変色し、非常に硬く焼土化している。この焼土化した炉面は、床面から10cm程高い位置で確認できる。炉跡の構造として、床面を掘り込まない特徴が見られる。

P1・2・4は住居跡の周壁際に配された小穴である。周壁際に全周しないだけでなく、その配置が不揃いであるため検討を要するが、住居の上屋を支える柱穴の一部となる可能性が高い。平面形はいずれも円形で、その直径は20～25cmである。床面から底面までの深さはP4が最も深く42cm、P1が15cm、P2が10cmと浅い。P3は床面の中軸線からやや南よりの位置に配される。平面形は楕円形である。規模は長径が75cm、短径が66cmを測る。床面からの深さは22cmである。P3の堆積土は黄褐色土塊を含む黒褐色土で、火熱を受けて割れた礫が含まれている。

P5は床面の中央部から西壁に寄った場所に位置する。平面形は不整な楕円形で、規模は長径が1.92m、短径が1.6mを測る。床面からの深さが10cmと浅く、細かい凹凸が認められる。P5の性格については、西壁際に配された浅い窪みであることから、住居の出入口に関わる施設であろうか。

遺物（図13・14、写真28）

19号住居跡からは縄文土器片が398点、石器が4点出土した。堆積土の上層から出土したものが多く、住居の廃絶後に自然流入土とともに混入したもので、特に床面上において使用時の痕跡を残す出土状況のものはない。また、土器は破片となったものがほとんどで、土器の全体的な器形がわかるものが少ない。口縁部がわずかに開く円筒形に近い深鉢形をなすものが多い。口縁部は平縁となるもの他に、小突起が4～5カ所配されて波状口縁となるものも認められる。

図13-1～4は押し引き状の沈線で文様を描き、その沈線の交点や沈線で閉まれた中に小さな粘土粒を貼り付ける特徴が見られる。図13-5～15はループ文を多用とする土器であり、12・14はループ文の直下に非結節の羽状縄文が施される。図13-16～18は円形竹管状工具も用いた刺突文が配される。16は深鉢形土器の体部下半である。体部はループ文を多段に巡らし、体部下半は押し引き状の連続刺突による沈線を8条施す。また底部外面にも文様が施され、底部外縁に沿って5条の押し引き状の沈線文を巡らせ、5～6カ所の円形刺突を配し、これを起点として円周の内部を区画するような文様が描かれるのである。図13-19～21は押し引き状の沈線で文様が描かれる土器である。図13-22・23は口縁部に突起が配されて波状口縁となる。22は突起外面に短い粘土紐を2本縦位に貼り付けられる。23は口縁部が全周しないが、突起が3単位配されるのである。

図14-1～12は地文に斜縄文を多用する土器をまとめた。8・9は条の細い撲糸文が施される。図14-13～17は底部資料である。底部外面に文様または土器製作時の痕跡を残す。13は底部

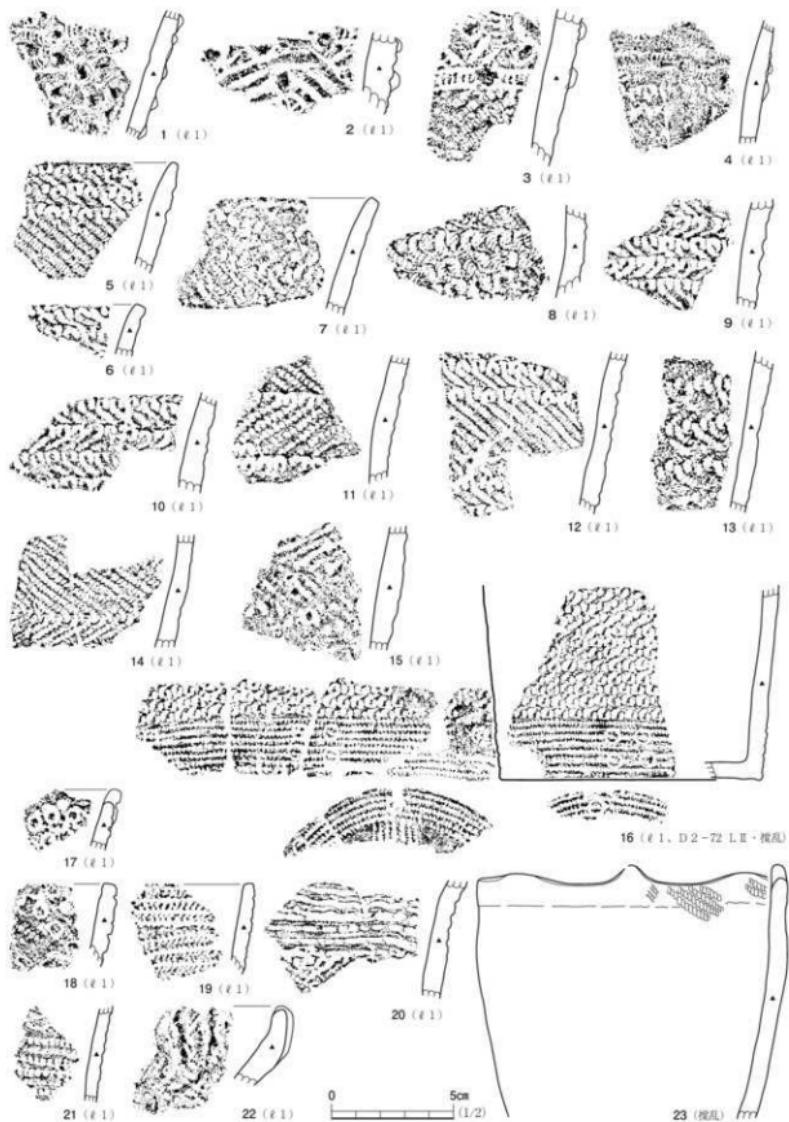


図13 19号住居跡出土遺物（1）



図14 19号住居跡出土遺物（2）

外縁に沿って押し引き状の沈線を巡らせ、その内部に直線的な沈線を主体とした文様が描かれる。14～16は上げ底風の底部で、底部外面に縄文が施される。16は底部外縁に沿ってループ文が施される。17は小破片のため不鮮明であるが、網代痕が観察できる。

まとめ

19号住居跡は平面形が長方形を基調とする。床面上の施設として、炉跡が1基設けられる。炉跡は掘り込みを伴わず、火床面が周囲の床面よりも高い位置となる。本住居跡の年代は、出土した縄文土器の特徴から、大木1式期に比定され、概ね縄文時代前期初頭頃には廃絶したものと考えている。

(福田)

23号住居跡 S I 23

遺構 (図15、写真17～20)

調査1区東半部のD 2～73グリッドで検出された竪穴住居跡と考えられる。検出面はL III上面である。L II掘り下げ時に、近接し直線状に並ぶ複数の炉跡と焼土と、周辺に小穴群の集中が確認され、一部西部と北東部で風倒木に切られた可能性もあるが、壁や床が削平された竪穴住居跡と判断した。なお、周辺の柱穴・小穴群は、現場段階で本遺構に伴う柱穴番号を通して付した。一部は木根など搅乱状を呈するものがあるが(P 1・6・26)、大半は、遺物、覆土から明確に新しい時期と判断できず、概ね本遺構に伴うか近接時期と判断し、煩雑さを防ぐため報告でも番号を踏襲した。

平面形と大きさは、壁が削平され周溝なども不明で判然としない。しかし、南北方向は、炉跡(1・2号炉)やその中間に位置する焼土遺構(3号炉)が直線的に約30～100cm間隔で並び、北から33度西に傾き北西方向に配置され、1～2号炉までの長さは3.2mある。また炉跡群の北側の柱穴(P 2・8)は、炉跡とは同じライン上に並ぶ。東西方向は、炉跡や焼土のラインに直交して、周辺の柱穴・小穴群(P 5～P 7・P 17～P 10)の広がりが約4.0mで、その範囲の以南や以東では遺構は全体に希薄となる。これらからは、全体に南北方向に長い長軸約5.5m以上、短軸約4.0m以上の縄文時代前～中期に特有の縱長の複数の炉跡を有する竪穴住居跡と考えられた。

柱穴は、全部で6個以上が検出されたが、明確なものは炉跡群の北側に並ぶP 2・8のみである。他の4個(P 5・7・10・17)は、全体に中央の炉跡や焼土を挟み、対称的配置や同等な平面規模などから柱穴と判断した。なお、P 17には近接して同じ覆土で深さも同じ小型のP 16があり、明確な柱穴であるP 2(支柱穴)に近接する小型のP 8(補柱穴)と同様な性格を持つかもしれない。

但し、この4個は、覆土や確認面からの深さが一様ではなく、全てが本遺構に伴うかは判然としないところもある。柱穴の大きさは口径が33～18cm、深さは8～41cmのもので、覆土は①地山を塊でまだらに多く含む暗褐色のもの(P 5・7)、②地山をほぼ含まない黒褐色のもの(P 17)、③その中間的なもの(P 2・8・10)の3種に大別される。なお、他にも炉跡周辺には、柱穴や小穴が検出されたが、全体に平面形が大型や確認面からの深さが浅いものは①、小～中型で深いものは②

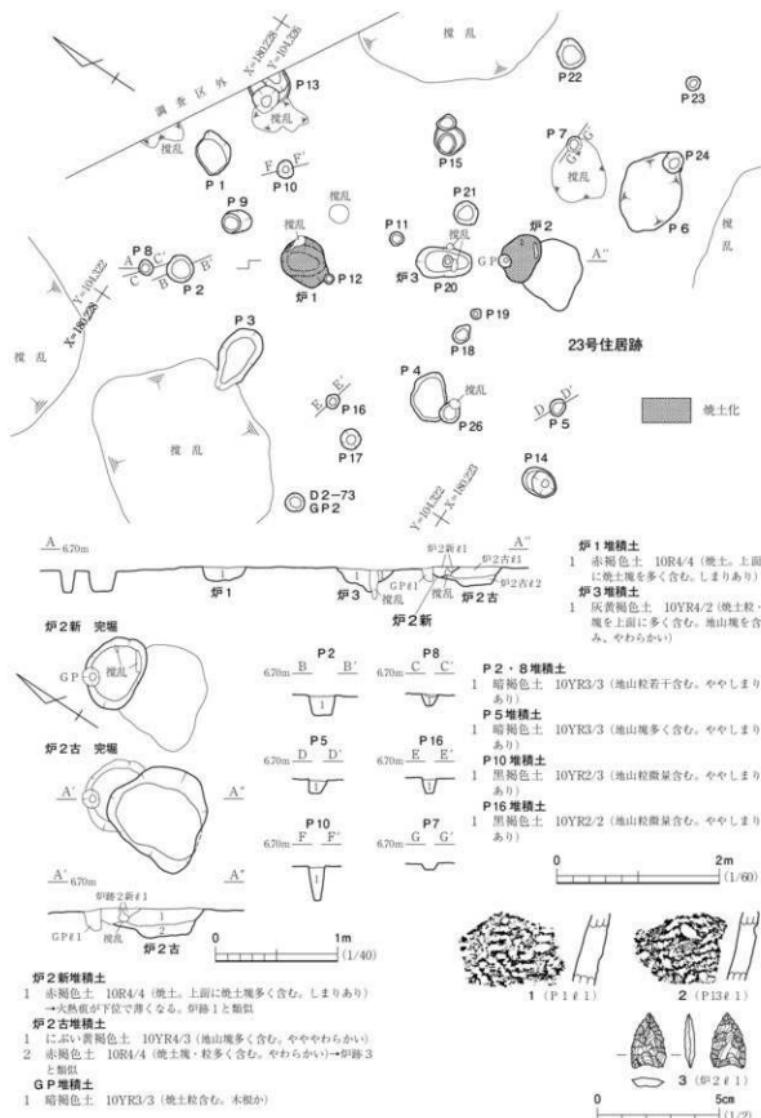


図15 23号住居跡・出土遺物

が多く、全体に前者が多く分布する。

炉跡や焼土は、3カ所で平面では直線上に検出されている。明確な炉跡は2カ所で、北側が1号炉、南側が2号炉である。その間に当初3号炉とした焼土遺構がある。1号炉は、やや北・南側に現代の木根が混入するが、 $45 \times 61\text{cm}$ の範囲が最厚部で16cmとよく焼けていて、特に上面には焼土塊が混入する。2号炉は、北側で小穴が切るが、 $43 \times 60\text{cm}$ の範囲が最厚部で26cmとよく焼けていて上面の被熱が著しい。なお、3号炉跡は、焼土を多く含みよく縮まる。

遺 物 (図15、写真35)

P 1・13より纖維を含む斜縄文施文の土器片が出土し、R L(図15-1)、L Rと反燃り(図15-2)の側面圧痕状の文様、器厚などから概ね大木1~2a式期の所産であろう。図15-3は、3号炉上面から出土した流紋岩製の石鏃で、基部は浅い丸みのある抉りで当該期に多い形態である。

ま と め

本住居跡は、南北方向に長い堅穴住居跡と推測され、複数の炉跡を有している。本住居跡の年代は、出土した土器から、大木1~2a式期頃と推測される。

(植 松)

29号住居跡 S I 29

遺 構 (図16、写真21・22)

29号住居跡は調査1区の中央からやや西よりのC 2-54・55グリッドに位置する。標高6.3mの平坦地に立地する。本遺構と重複する遺構はないが、東側3mに6号土坑が位置する。遺構検出面はL IIIとした黄褐色土の上面である。

本住居跡は北半部が調査区外へと続き、南半部が風倒木痕で壊されていることから、その全容は把握できない。平面形は確認できた床面の形状から、円形をなすと推察される。住居跡の規模は、直径が3.92mを測る。検出面から床面までの深さは50cmと深い。遺構内堆積土は7層に分けた。 ℓ 1~5は炭化物をわずかに含む黒褐色土で、住居廃絶後に堆積する自然流入土と判断した。 ℓ 6はL IIIを起源とする黄褐色土を含む堆積土で、周壁際にのみ認められる。住居廃絶直後の壁面崩落土と考えられる。 ℓ 7は住居跡掘形の底面を覆う貼床土で、その厚さは最大で28cmである。黒褐色土と褐色土が混ざって非常に硬く縮まる。

周壁は上半部が崩落して傾斜が緩くなるが、下半部は垂直気味に立ち上がる。床面の中央部は ℓ 7とした貼床が認められるが、壁際はL IIIをそのまま床面とする。床面は東半部が低く凸凹となるが、西半部は平坦になる。また、床面上では炭化物を多量に含む黒色土の範囲が認められた。非常に薄い土層で、粒状になった炭化物を含んでいる。その性格を窺う所見はないが、床面を覆う敷物の痕跡であろうか。

住居内施設として、南側の周壁に接する場所でP 1を確認した。平面形は梢円形をなす。規模は長径が80cm、短径が70cm、床面からの深さは25cmである。床面上において、P 1の他に炉跡や上

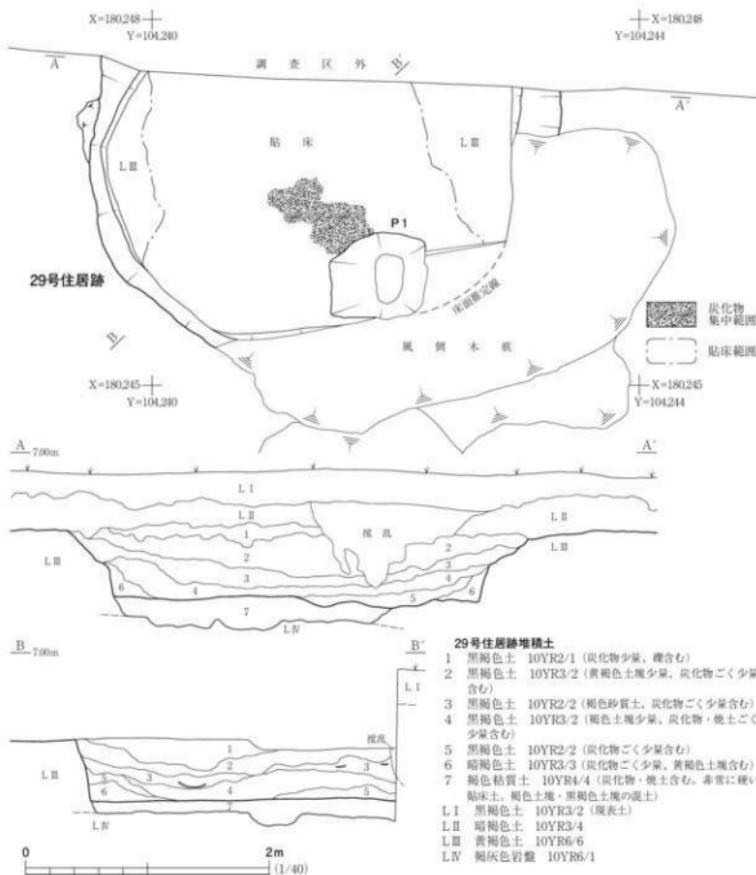


図16 29号住居跡

屋を支える柱穴などの施設は確認できなかった。

遺物 (図17・18、写真29・30)

本住居跡からは繩文土器片が193点出土した。これら出土遺物はℓ 1～4に含まれたものが大半を占める。住居の廃絶後に流入した土に混入した遺物で、土器の使用時の痕跡を残すような出土状況は認められない。また、破片となって出土したものが多く、土器の全体的な器形がわかるもののが少ない。深鉢形土器の他に、頸部や胴部中央で括れて口縁部が大きく開く器形、いわゆるキャリパー形をなすものもある。さらに口縁部が平縁と波状となるものも確認できる。これら繩文土器の

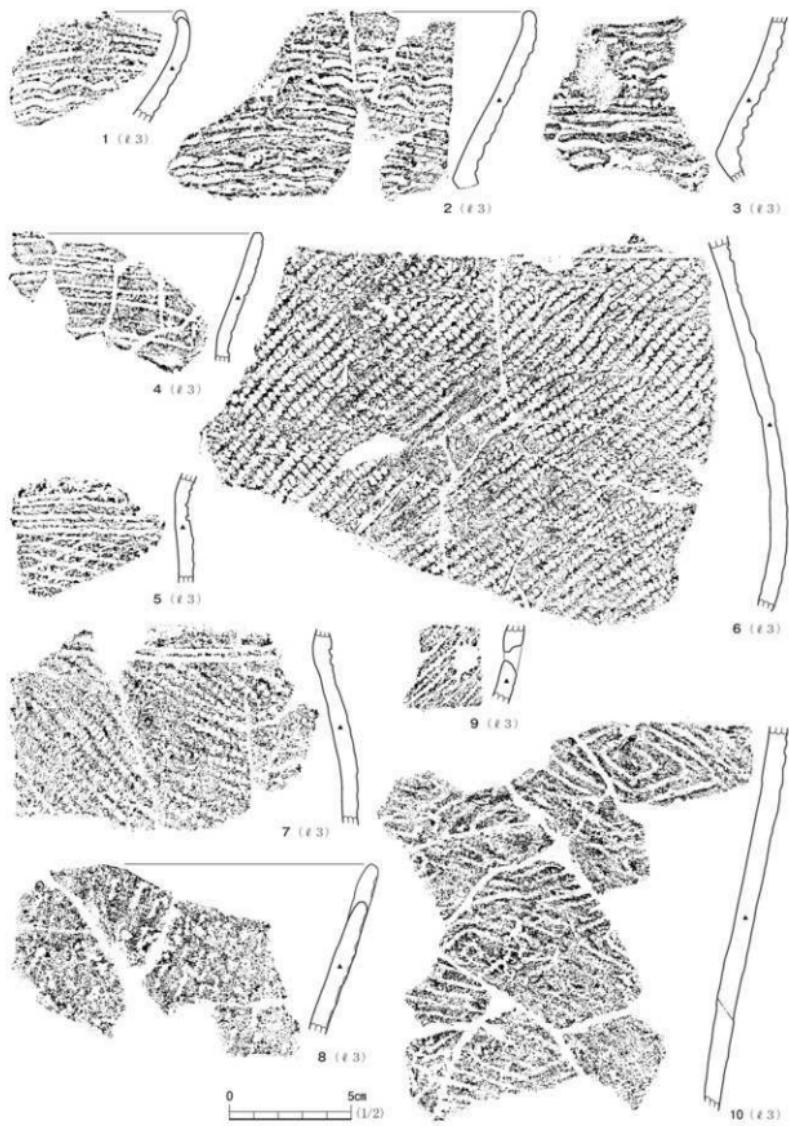


図17 29号住居跡出土遺物（1）

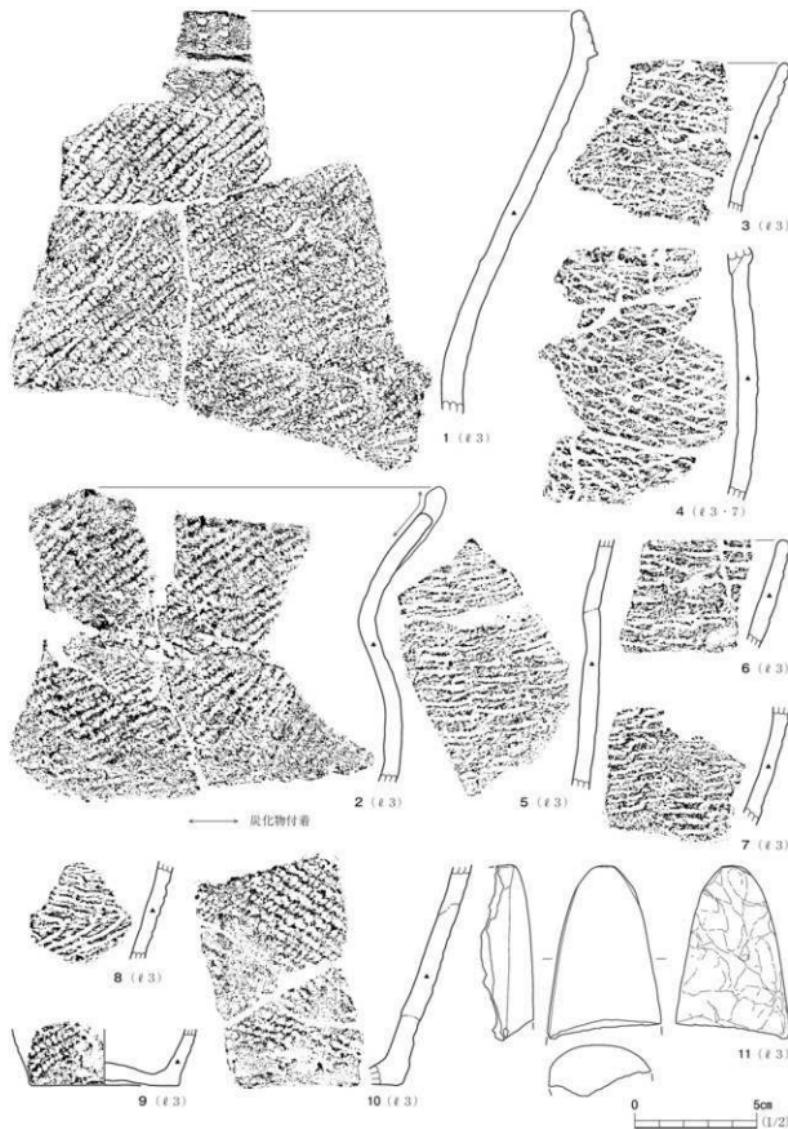


図18 29号住居跡出土遺物（2）

胎土には纖維混和痕が観察できる。

図17-1～3は口縁部破片で同一個体である。3本同時施文具を用いて、波状文と押し引き状連続刺突による平行沈線を施す。図17-4は2本同時施文具の先端部が細い特徴があり、口唇部直下から平行沈線を数条巡らす。図17-5～7は口縁部の文様帯と体部の地文を区画する2本同時施文具を用いた押し引き状連続刺突によって平行沈線が巡らされる。図17-8は器面の磨滅が著しく文様は不鮮明であるが、口唇部直下に刺突文が巡らせている。図17-9は補修痕跡であろうか、焼成後に穿たれた円孔が認められる。

図18は沈線等による文様がなく、斜綱文や撚糸文を地文とする土器をまとめた。図18-1は口縁部が厚く肥大し、下端部に明瞭な稜を持つ。口縁部の外面には3本同時施文具による刺突文が巡る。図18-3・4は地文に網目状撚糸文が施され、図18-5～7は瓦葺状撚糸文が施される。

図18-11は磨製石斧の破片である。火熱を受けて割れたものであろうか。表面は丁寧な研磨が施され、各面とも平滑に整えられる。断面形はやや丸みを帯びた楕円形をなし、表面と側面の稜が明瞭になる。

まとめ

29号住居跡は北半部が調査区外へ続くため、炉跡や上屋を支える柱穴などは確認できなかつた。本住居跡の年代は、出土した縄文土器の特徴から、大木2a式期に相当し、縄文時代前期前葉頃には廃絶したものと推察される。

(福田)

30号住居跡 S I 30

遺構 (図19、写真23・24)

30号住居跡は調査1区の中央、C 2-60グリッドに位置する。北に向かって低くなる緩傾斜地に立地する。その標高は53mである。本遺構と重複する遺構はないが、東側13mには19号住居跡が分布する。遺構検出面はL IIIとした黄褐色土の上面である。

本遺構の平面形は、北半部が調査区外へと続くため、その全体的な形状は不明である。遺存する南半部の形状から判断すれば、長方形をなすと推察される。遺構検出面から底面までの深さは10cmと浅い。遺構内堆積土は炭化物をわずかに含む黒褐色土で、堆積土の混入物が均質になることから、自然堆積によって埋没したものと判断した。床面はほぼ平坦である。P 1は床面を掘り込む小穴で、直径が25～38cm、床面からの深さが45cmと深い。その形状から上屋を支える柱穴と推察される。

まとめ

本住居跡の全容は把握できなかつたが、床面中央に柱穴を持つ住居の構造的特徴が認められる。本住居跡の年代は、出土遺物が少なく図示していないが、概ね縄文時代前期頃と考えられる。

(福田)

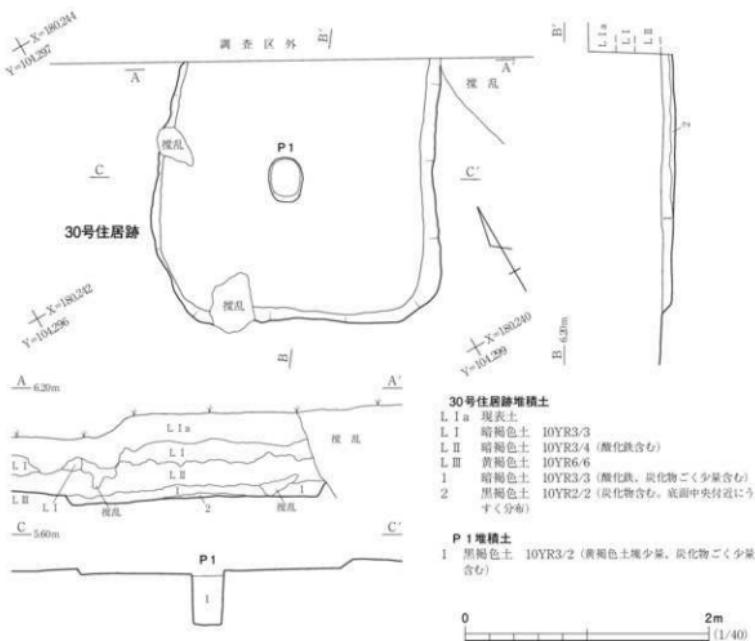


図19 30号住居跡

第3節 土坑

4号土坑 SK 04 (図20、写真25)

4号土坑は調査区1区の北西隅部、B 2 - 15グリッドに位置する。標高6.8mの平坦地に立地する。本遺構と重複する遺構はないが、南東へ向かって8.7m付近に8号住居跡が分布している。検出面はL IIIである。当初、長方形を呈する平面形や垂直な掘り込み、覆土に炭化物をやや多く含むことから墓坑などの可能性も検討したが、底面付近の覆土や底面に明瞭な墓坑に関連する痕跡などがないことから小型の土坑と判断した。

平面形は長方形を基調とするが、南東辺が長く、北西辺が短い。規模は南東辺の長さが1.5m、北西辺の長さが1.2m、南北辺の長さが84cmとなる。検出面からの深さは20cmである。周壁はいずれも垂直に立ち上がる。底面は平坦であるが、中央がわずかに窪んでいる。

遺構内の堆積土は2層に分けた。ℓ 1が炭化物粒、黄褐色土塊を含む暗褐色土、ℓ 2が炭化物粒、黄褐色土塊、黑色土塊を含む黒褐色土である。いずれの層もL IIIを起源とする黄褐色土塊を含んで

いることや、堆積土の性状から自然堆積と判断した。

本遺構の出土遺物は、点数が少なく小破片で図示していないが、 $\ell 1$ より繊維痕をわずかに含む縄文L R、R L施文の縄文土器の体部片が出土した。これらは、繊維痕をほとんど含まず、胎土にほとんど砂などを含まないことから縄文時代前期でも後出で前期中葉以降の所産と推測される。但し、覆土は明らかに同区の縄文時代の竪穴住居跡や土坑と異なる黄褐色土主体で、遺物も遺構の年代や性格を決定する資料ではない。なお、近接する遺構分布や主軸方向の類似からは、東接する古代の8号住居跡との関連する時期の可能性もある。全体では本遺構の具体的な性格や年代は不明である。

(佐藤)

5号土坑 SK 05 (図21、写真25)

5号土坑は調査区1区の北東隅部、D 2 - 85・95グリッドに位置する。標高6.5mの丘陵際に立地しており、北東は谷地形となる。本遺構と重複する遺構はないが、北西へ向かって5m付近に小穴群が分布し、その西側に23・19・30号住居跡などの竪穴住居跡群が同一の平坦面に立地する。本遺構の北東側は搅乱により破壊されていた。検出面はL III上面である。

当初、梢円形ながら長大な細長い平面形や主軸方向、覆土の類似から19号住居跡などと同じ大型の竪穴住居跡も推測されたが、緩やかな船底状の掘形や、底面での炉跡や柱穴が明確でないことから、大型の土坑と判断した。

平面形は梢円形で、規模は長さが5.7m以上、幅が3.3mと大型で、南西から北東方向に細長い形状である。さらに調査区北側に延びる可能性もある。検出面からの深さは23cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、断面形は皿状となる。底面は平坦だが、中央へ向かってわずかに窪んでいる。

遺構内の堆積土は3層に分けた。 $\ell 1$ が黒色土、 $\ell 2$ が砂礫を多量に含む黒褐色土、 $\ell 3$ が黒色土塊、黄褐色土塊を含んだ暗褐色土である。レンズ状の堆積を示すことや、覆土にL IIIを起源とする黄褐色土塊や砂礫を含むことから、自然堆積と判断した。

本遺構から遺物は出土していないため、具体的な性格や年代は不明である。

(佐藤)

6号土坑 SK 06 (図20・22、写真26・31)

6号土坑は、調査区1区の中央部、C 2 - 55グリッドに位置する大型の土坑である。標高6.0～7.0mの丘陵際に立地しており、東側はやや谷地形となる。本遺構と重複する遺構はないが、西側には29号住居跡が隣接する。本遺構の南側は搅乱により一部破壊を受ける。検出面はL III上面である。

当初、規模や隅丸方形の平面形から竪穴住居跡の可能性も考えられたが、精査段階で炉跡や主柱穴が未検出で、大型の土坑と判断した。土坑の範囲は、直線的な南北の両端が搅乱により切られるが、南北に直交する東西両辺は平行に延び、北側がさらに調査区外に延びる。



図20 4・6・7号土坑

平面形は、北側にさらに延びるが南北約2.1m以上、東西約2.0mを測る、やや南西から北東方向に長く延びる長方形状で、長軸の北東方向で、北から東に26°傾く。

底面は、確認面からの深さが13cm程度で、壁は削平を受けているが緩やかな立ち上がりを示す。底面の炉跡や柱穴、周溝などは確認できないが、底面は全体に平坦である。

遺構内の覆土は、大別3層で上層の ℓ 1が炭化物などを含む暗褐色シルト、その下位に ℓ 2とした薄い炭化物層が部分的に広がり、遺物がその前後から倒圧した状態で複数出土した。 ℓ 2の炭化物層の下位には、地山塊などを多く含む貼床土状の ℓ 3の灰黄褐色シルトである。

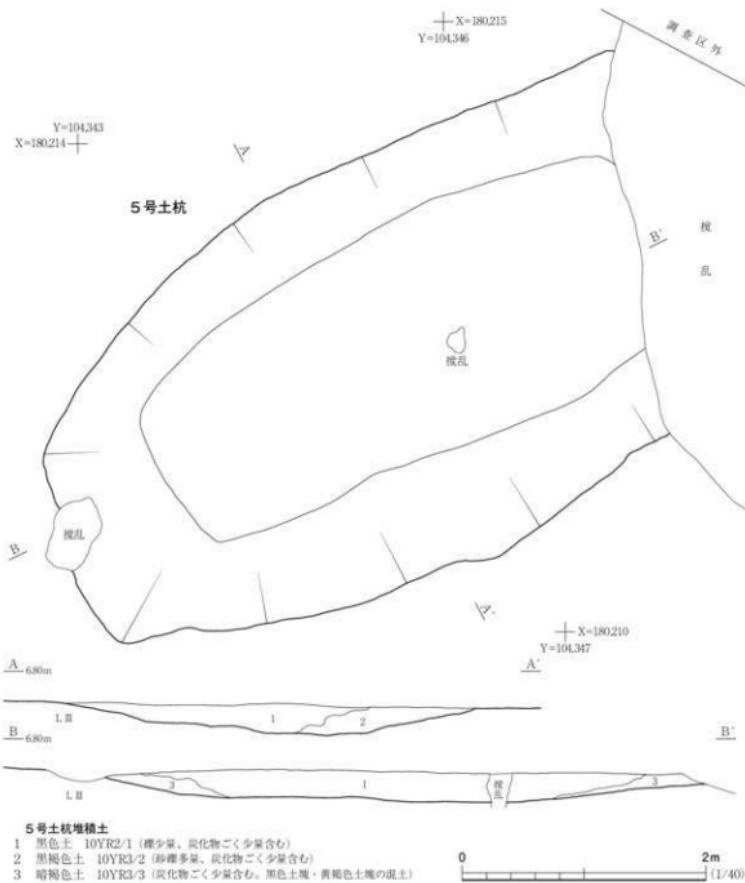


図21 5号土坑

本遺構からの出土遺物は、縄文土器片27点を数える。堆積土中の床面付近から横位で出土したものが多く、器形や文様がわかるものもある。このうち主な土器や石器の13点を図22に示した。土器は全体に纖維痕が多く認められ、砂粒や石英粒を多く含むものが大半である。

図22-1は口縁部片で口唇直下に網目状撚糸文が施文される。図22-2・3は幅の狭い口縁部文様帶を隆線・隆帶で区画するもので、口縁部文様帶内は2が縄文、3が刺突文を施す。また、2には波状口縁頂部から短い瘤状突起や短い隆線が垂下する。

図22-4は緩く外反する頸部の直下に、半截竹管の押し引き手法による波状文を描き、胴部に

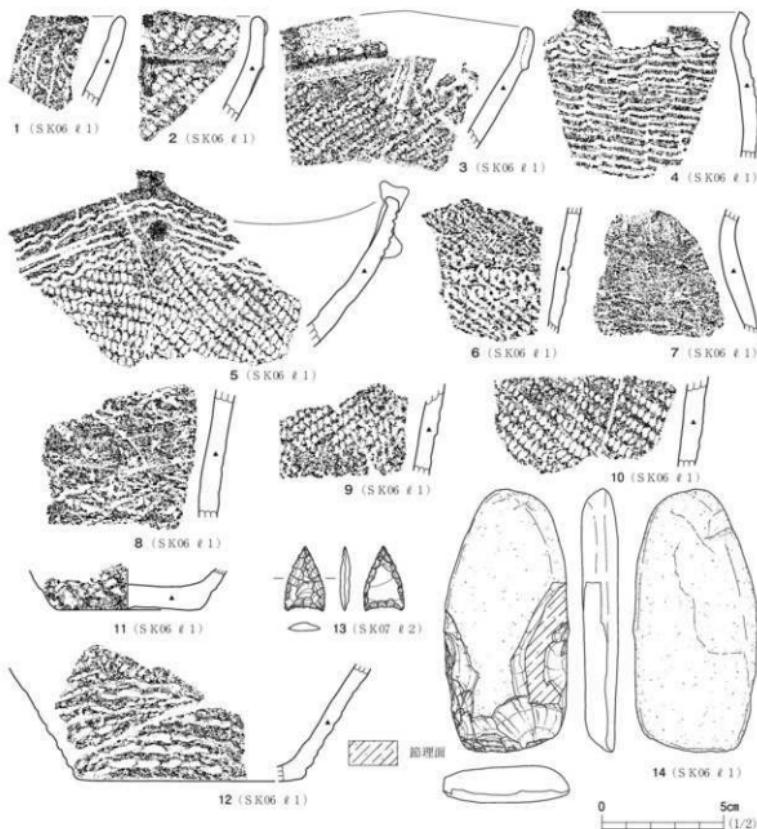


図22 6・7号土坑出土遺物

葺瓦状撚糸文を施文する。

図22-5は波状口縁頂部にボタン状の突起があり、その下位には瘤状の突起も付けられる。幅狭い口縁部文様帶には半截竹管による2条の波状沈線文の2列間に平行沈線を巡らし、胴部はR L施文する。

図22-6は破片上半が直前段多条縄文、下半が単節斜縄文の環付ループ文を多段に横位回転させたものである。

図22-7～10は胴部部の地文などで、網目状撚糸文(8)、斜縄文(9・10)、無文(7)がある。

図22-11・12は底部資料で、両者とも底部から緩やかに開き立ち上がる器形である。11は縄文、12は押し引き手法による沈線文や波状文が巡る。

他に図示しないが、土器では ℓ 1より纖維、砂粒、石英などを多く含む土器底部片と胴部片が出土した。底部片は、わずかに上げ底で、底径16cm前後を測り、底部に一部縄文Lの原体痕跡が残る。胴部片は、小破片で判然としないが、羽状を呈するものや直前段多条のL $\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}$ のものがある。

図22-14は、長さ10.8cm、幅5.3cm、厚さ1.5cmの粘板岩の細長扁平な川原石を素材にした打製石斧で、背面・腹面とも表皮を残し、背面の長軸先端部の刃部と両側縁の刃部側のみ粗い剥離の後、刃部や左側縁に調整剥離を施し、片刃状の刃部を作成する。なお、刃部の稜打痕から敲き石の可能性もある。

全体に、一部古相のループ文はあるが、全体に狭い隆線区画の口縁部文様帶(2・3)、半截竹管による押し引き手法を用いた波状文(4・5・12)、網目状撚糸文(1・8)、葺瓦状撚糸文(4)などから、概ね縄文時代前期前葉の大木2a式期と考えられる。
(植 松)

7号土坑 SK 07 (図20・22、写真26・35)

7号土坑は調査区1区の南東側、B 2-28グリッドに位置する。標高6.7mの平坦地に立地している。本遺構と重複する遺構はないが、西へ向かって13.8m付近に8号住居跡が分布している。検出面はLIII上面で、褐色土の不整形の平面範囲として確認した。

本遺構の平面形は楕円形で、小型の小穴状を呈する。北西隅は角をもつて対し、それ以外の隅は緩やかな弧状をなす。規模は長辺の長さ94cm、短辺の長さが60cmとなる。検出面からの深さは24cmである。周壁は急角度で立ち上がる。周壁から底面にかけての断面形は逆台形状となる。底面は平坦で、北西側から南東側へ向かってわずかに傾斜している。

遺構内の堆積土は3層に分けた。 ℓ 1が褐色土、 ℓ 2が黒褐色土、 ℓ 3がにぶい黄褐色土である。流れ込みの堆積を示すことから自然堆積と判断した。

本遺構の ℓ 2から石鎚が1点出土した(図22-13)。石材は泥岩である。基部が弧状となり、わずかに内湾している。両側縁に加工を施すが、背・腹面ともに素材剥片の中央部を残している。

本遺構の具体的な性格や年代は不明である。
(佐 藤)

第4節 その他の遺構と遺物

小 穴 (図7・29、写真35)

23号住居跡の西方のD 2-72・73グリッド及び南東のD 2-83・84グリッドから小穴が39個検出された。平面形が円形のものと楕円形のものがあり、いずれも周壁は直立気味である。規模は円形のものは径20~30cm、楕円形のものは長径40~85cmを測る。これらの小穴からは縄文土器片5点、弥生土器片3点、土師器片1点、石器1点が出土した。図29-13は直縁刃石器である。粘板岩製の板状の横長剥片を素材とし、基部作出のため二次加工を表裏両方向からノッチ状に加え、幅広の基部が作出される。刃縁には、使用によると思われる微細剥離痕が若干認められる。

遺構外出土土器（図23～28、写真32～34）

調査区の遺構外からは、約1,450点の土器片が出土した。これらは主として縄文土器片であり、次いで弥生土器片、そして古墳時代前期の土師器片が極僅かに確認できた。以下に、今回の調査で主体を占める縄文土器をⅠ群とし、弥生土器をⅡ群として記述する。

Ⅰ群土器（縄文土器）

図23～27、図28～1～16が該当する。主な文様や施文方法、当該期に特徴的な地文などから1～6類に分類し、更に文様の詳細な特徴は個別に記した。

Ⅰ群1類（図23～1～4） 早期末葉の土器群である。出土量は少ない。地文地に縄压痕文が確認できるもの（1）や、撲糸文を地文とするもの（2～4）がある。2の口唇端部は上方に摘み上げられている。

Ⅰ群2類（図23～5～27、図24、図25～1～9） 前期前葉の大木1式期及びそれより若干先行する土器群をまとめた。

図23～5・6は頸部や上胴部にコンバス文を施すものである。5は口縁直下に連続爪形文を多段に施し、爪形文の上から半裁竹管による横走沈線が加えられ、頸部にコンバス文、その直下にはループ文が確認できる。6は波状口縁の資料で、無文地の口縁部に角状工具の先端による刺突文が施されている。コンバス文は下胴部にもわずかに確認できる。

図23～7・8は同一個体資料で、斜縄文の地文地に円形竹管文が確認できる。今回の調査の19号住居跡資料（図13～16～18）と類似している。

図23～9～16は多段のループ文を施す資料で、10・13のループの原体は小さく、他は比較的大きい。図23～17～21は多段のループ文の最下段がいわゆる長足になるもので、17・18は口縁上方を多段とし、頸部にもタガ状に足長のループ文が観察できる。19～21は単一の足長ループ文であり、19では2種類の撲りが異なる原体により羽状縄文が確認できる。

図23～22～26は結束一種の原体による羽状縄文を施すもので、施文原体幅は2指頭幅以上と長い。22の口唇部は平坦に面取りされ、23の口唇部は丸く成形されている。

図23～27、図24～1～2・11は非結束の羽状縄文で、1は部分的に重菱文が観察できる。施文原体幅は幅広等間隔になっている。

図24～3～9は0段多条の原体で斜縄文を施すもので、3の口唇上端は平坦であり、5の口唇外面は外削ぎ状を呈する。6・7の口縁上部は無文帶をなしている。

図24～10は上胴部が膨らむ器形の深鉢で、R L撲りの斜縄文が観察できる。

図24～12～15・17は複節の斜縄文を施す資料で、13は波状口縁もしくは双頭突起を有するものである。13・15のように結節部が確認できるものがある。図24～16は前々段合撲りの原体を施文するもので、一つずつの節が異なる異節斜縄文の資料である。

図25～1～3は組紐文が観察できる資料で、1・2は口縁部資料、3は胴部資料である、2の



図23 調査1区遺構外出土遺物（1）

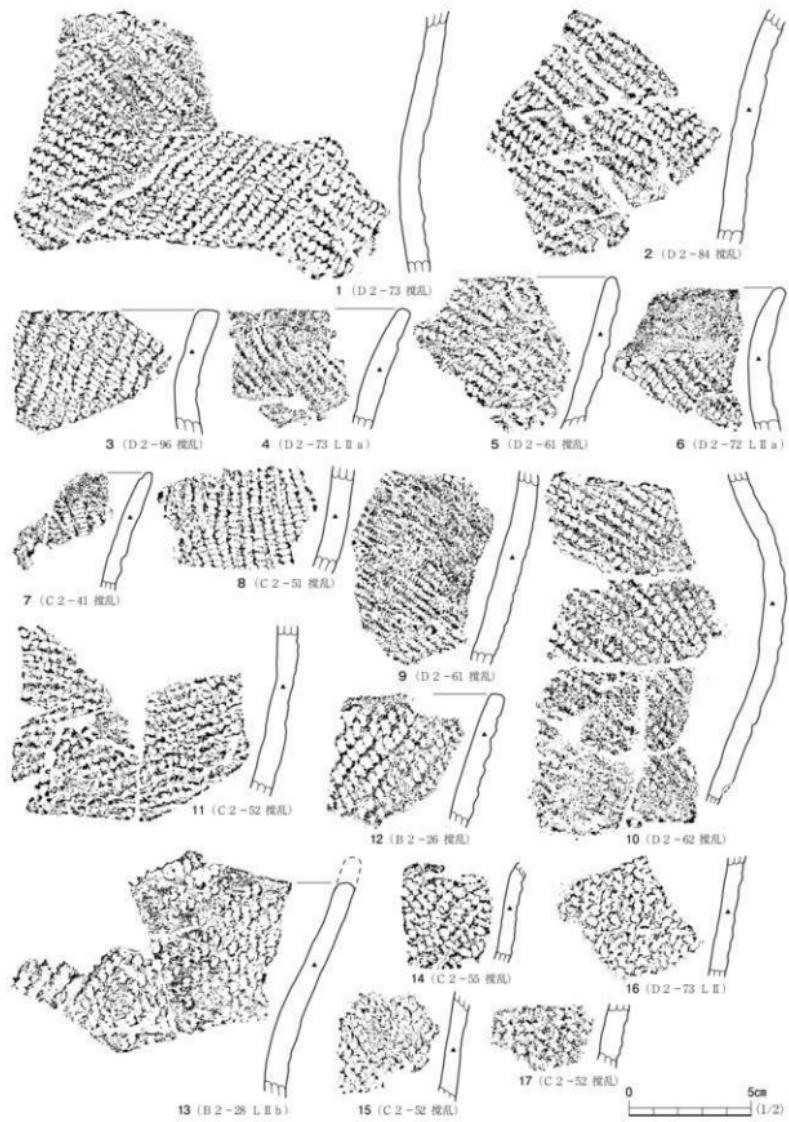


図24 調査1区遺構外出土遺物（2）

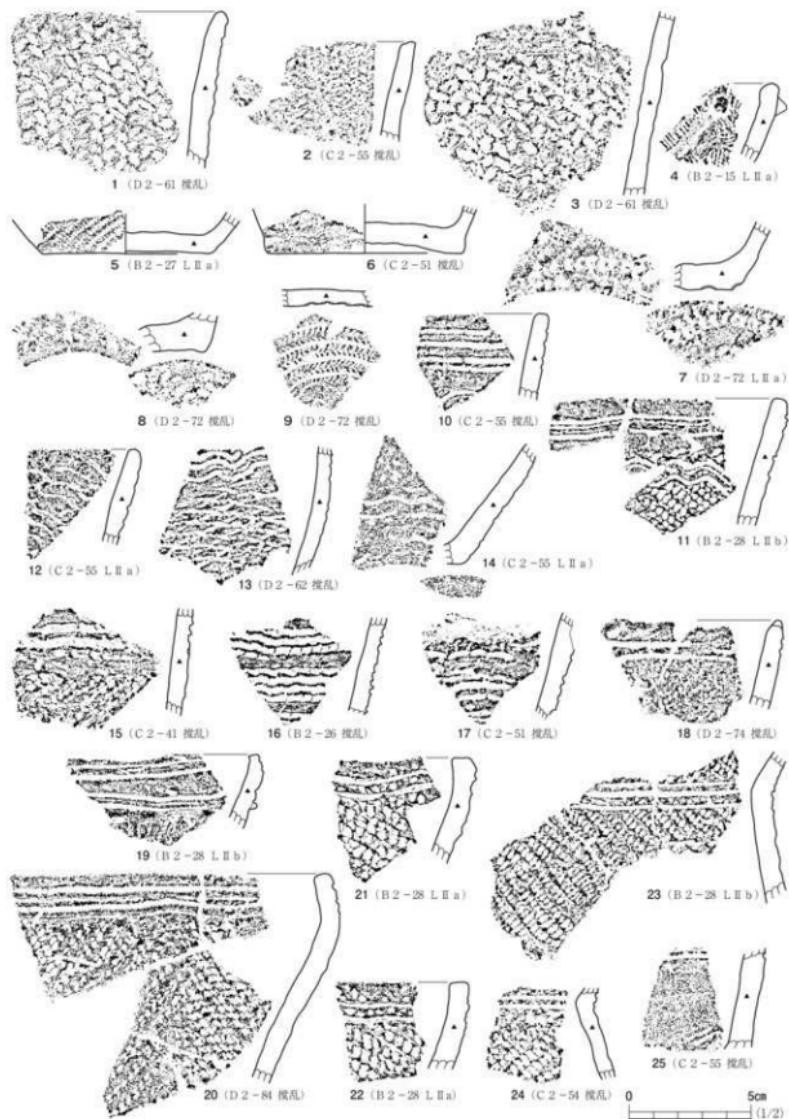


図25 調査1区遺構外出土遺物（3）

原体は非常に細かい。

図25-4は関東系の関山I式に比定できる資料で、波状口縁の波頂部に円形の貼瘤を配し、若干肥厚した口縁端部及び波頂部直下にハシゴ状沈線が確認できる。

図25-5～9は本類に該当する底部資料を示した。底部の施文には5・6が無文、7・9が爪形文、8が斜繩文である。9の爪形文の施文間隔は短く、施文後に円弧の沈線が加えられている。胴部最下端には、5・6・8が斜繩文、7が爪形文である。

I群3類(図25-10～25、図26、図27-1) 今回の調査で出土した資料では主体的な土器で、前期前葉の大木2a式期に比定できるものである。

図25-10～14は波長の短いコンパス文を描くものである。10・11は平縁の口縁直下に横走沈線を施し、その下位に同一工具によるコンパス文が観察できる。11の地文はR L斜繩文である。12～14は地文地にコンパス文を描くもので、12・14は施文の器面の食い込みが浅い斜繩文、13は不整の網目状撲糸文である。12のコンパス文は斜行している。

図25-15～17は半裁竹管の押引き状技法によりコンパス文を描くもので、コンパスの波長が非常に短いものである。16・17は無文地に多段にわたりコンパス文を描き、15は下脇部に斜繩文が施されている。

図25-18～25、図26-1～3は半裁竹管の平行沈線文が確認できるものである。図25-18は小波状突起を有し、口縁上端に2条の横走沈線が走る。地文は器面への浅い施文の斜繩文である。図25-19・20は平縁の口縁部に複数の横走沈線文が描かれる資料である。図25-19の頭部には浅い隆帶状の突起が確認できる。図25-20は比較的大型の資料で、頭部が屈曲し、口縁部が内傾する深鉢である。脇部には施文方向を変えて縱方向の羽状繩文が見られる。

図25-21・22は同一個体で、地文地に2条の横走沈線が走る。地文は複節の斜繩文である。図25-23・24は屈曲した頭部に横走沈線を施すもので、図25-25、図26-1・2は上脇部に沈線が確認できる。図26-1の地文は不整撲糸文である。3は無文地に複数の平行沈線文が施されている。

図26-4～6は半裁竹管の沈線文により山形文を施すもので、4は口縁部資料、5・6は脇部資料である。4の資料左側は補修孔のような円形の窪みが見られるが、これは器面の剥落によるものである。

図26-7～13は隆帶をもつものである。7・8は波状口縁の資料で波頂部から縱方向に下垂する隆帶とこれに交わる横方向の隆帶が確認できる。脇部には連続爪形文(7)や、平行沈線文(8)が見られる。9～13は頭部に横走する隆帶を持つもので、9の資料左側には楕円形状の隆帶の一部が確認できる。口縁部文様帶は棒状の刺突文(9・13)、半裁竹管の刺突文(10・11)、斜繩文(12)などがある。

図26-14～29、図27-1は本類土器の地文のみの資料を集めた。図26-14は本類土器の典型的な地文である葺瓦状撲糸文が確認される資料で、15～18は不整な葺き瓦状撲糸文が施されたも

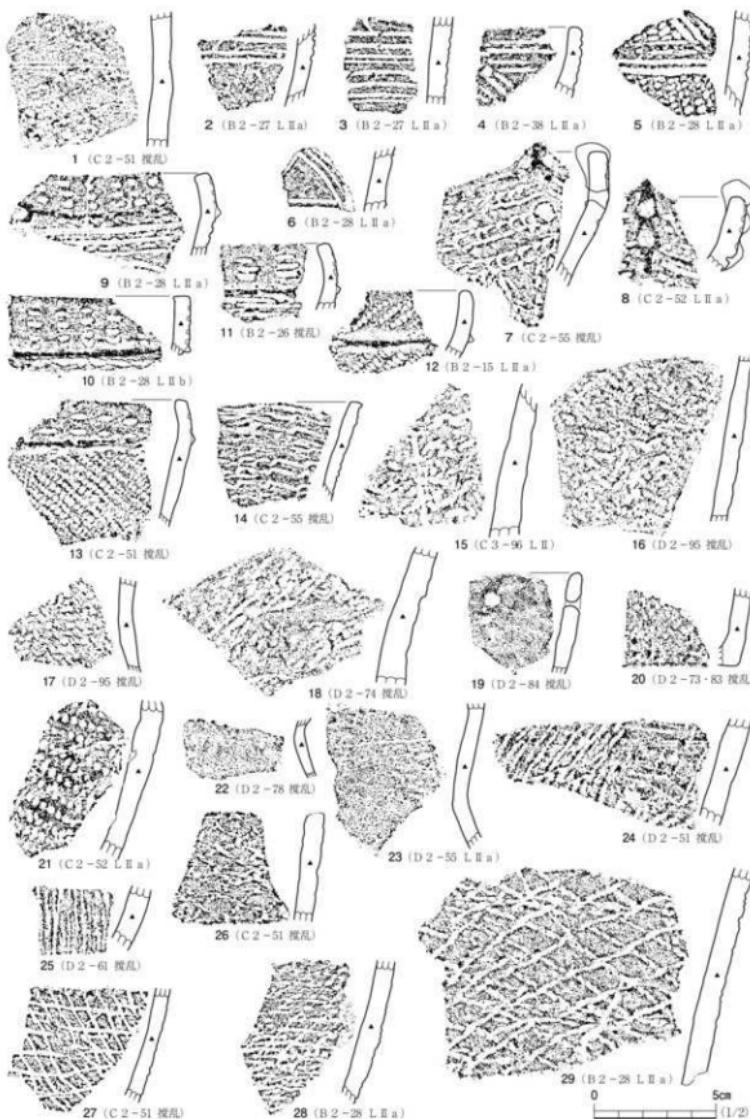


図26 調査1区遺構外出土遺物（4）



図27 調査1区遺構外出土遺物（5）

のである。16は側面環付文の可能性も高い。19・22・23は無文の資料で、19には補修孔が見られる。22・23は上胴部が屈曲する深鉢である。20・21は斜縄文、24・25は撚糸文を施した資料で、図26-26～29、図27-1は網目状撚糸文の資料である。

I群4類(図27-2～13) 前期前葉の大木2b式土器と思われる土器群である。全体に数量は少ないが、器形が分かるものが多く、深鉢が主体を占める。

2・3は、波状口縁の資料で、口縁部直下に円形状の隆帯の一部が確認できる。2は「δ」字状の隆帯の大半が剥落している。波頂部には切り込みを持つ山形突起を配し、口縁部には連続爪形文が確認できる。3も剥落が大きいが、頸部には半裁竹管状工具による連続刺突文が施されている。

4～7は口縁上方あるいは頸部に1条ないし2条の隆帯を施し、隆帯上に刺突を加えるものである。隆帯で区画された口縁部文様帶は無文(4・6・7)が多いが、5のように半裁竹管による刺突文が施されるものもある。隆帯直下には、4が本類土器で典型的なS字状連鎖沈文であり、6・7は角棒状工具の先端による刺突文で、中央に楕円形文、それを開むように大型菱形文あるいは山形文が描かれている。

8・9は隆帯上の刺突が隆帯を切るように継長のスリット状に施される資料である。8は2条の横走する隆帯で口縁部文様帶を区画し、口縁部には角状工具の刺突による3個1対によって弧線文が確認できる。8の胴部にはS字状連鎖沈文、9には施文が浅い斜縄文が施されている。

10～13は資料に隆帯が確認できないもので、10・13は先端がやや丸い棒状工具、11・12は角状工具による刺突文が見られる。12は横走する沈線と縦に下垂する沈線間に3個1対の刺突を施し、胴部にはS字状連鎖沈文が見られる。13の地文も粗いS字状連鎖沈文である。10・13の刺突の施文間隔は粗い。

I群5類(図28-1～7) 半裁竹管による連続爪形文が主文様になるものである。大木3式期に比定できる。資料数は少ないが、1点ずつ記述する。

1は平縁の口縁端部に2条の連続爪形文を施し、胴部には幾何学的な文様を描いている。2も胴部に弧線状の爪形文が見え、そこから半裁竹管による連続山形文が描かれている。

3は先端が丸い棒状工具による刺突文が三角形状に見え、4の口縁端部はわずかに肥厚し、施文間隔が非常に狭い爪形文が施され、口縁端部から縦に下垂する隆帯上には、棒状工具による刺突が加えられている。胴部には平行沈線文も確認できる。

5は波状口縁の資料で、波頂部直下に細い粘土紐による楕円形の隆帯が貼付されている。6は丸く張った上胴部に器面に対し直角に近い角度で刺突する連続爪形文が施され、下胴部には斜縄文が見られる。その特徴から諸磲a式に近い。7は無文地に沈線により楕円形文が描かれ、胴部には浅い斜縄文が観察できる。

I群6類(図28-8～16) 前期後葉の大木4式～5式土器の土器である。胴部には粘土紐を鋸歯状や梯子状に貼り付ける。全体的に繊維の混和痕があるものは少なく、焼成はやや軟質で、色調は明褐色が主である。

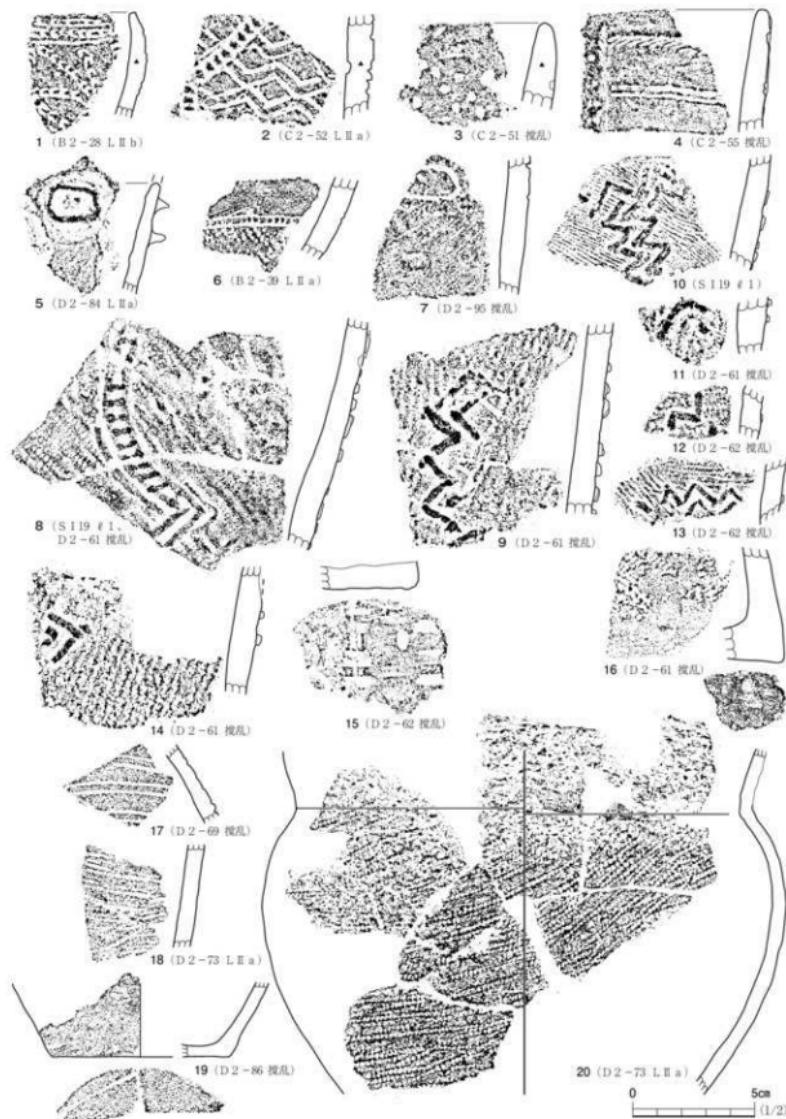


図28 調査1区遺構外出土遺物（6）

図28-8は、曲線的な梯子状の貼り付けである。図28-9~14は、鋸歯状(9・10・12)や波状(11)の粘土紐を地文上に縦位や横位に2列に貼り付けている。これらには、粘土紐幅が2mm前後の細い1本の粘土紐を折り曲げて鋸歯状に貼り付けるもの(10・13)と3~5mmの太く短い粘土紐をちぎり重ねて鋸歯状に貼り付けたもの(9・11・12・14)がある。

図28-15・16は底部資料で、底面には網代痕(17・18)が見られる。18は底部の張り出しが強く、胴部が内傾して立ち上がっている。

これらは、粘土紐を波状に細く、1本の粘土紐で折り曲げて表すものが大木4式と考えられるが、全体に縦位の鋸歯状で短い粘土紐の重ねた貼り付けのもが多く、一部大木4式に通る可能性もあるが、大木5式でも前半(興野1968)と考えられる。

Ⅱ 群土器(弥生土器)

図28-17~20が該当する。量的には少ない。いずれも中期後半の桜井式に比定できる。17は壺形土器の上胴部資料で、半裁竹管による二本一对の平行沈線で弧線文が描かれている。18は胴部資料で、附加条第1種の原体で斜縄文が見られる。

19は鉢形土器の底部資料で、底部には布目痕が確認できる。20は頸部が屈曲し口縁部が外反する壺形土器で、上胴部に最大径を持つ。地文原体は附加条第1種である。 (植 松)

遺構外出土石器・石製品(図29、写真35)

調査1区の遺構外から出土した石器は計26点である。そのうち、旧石器時代の石器が1点あるが、これ以外では縄文時代と思われる石器が大半を占める。これらの多くは、本遺跡で主体を占める縄文時代前期前半の竪穴住居跡近辺や、調査区中央部の谷跡周辺から出土しているため、石器もこの時期に所属すると考えられる。ただ、その特徴から縄文時代前期中葉の石器も確認されている。

一方、礫素材の打製石斧や磨製石斧は、弥生時代のものと思われ、今回の調査で少量であるが出土した当該期土器群に伴うものと考えられる。以下に主なものを時代毎に概述する。 (植 松)

旧石器時代(図29-1)

1はナイフ形石器である。1区C-2-59グリッドの搅乱から出土した。石材はメノウである。切出形ナイフに相当し、左刃で基端が尖る撥形を呈する。素材は横長もしくは幅広の不定形剥片を横位~斜位に用いている。素材打点部は器体背面の右斜め上に位置し、器体は素材背面左側の縁辺を刃部、素材打点部側を右側縁、末端側を左側縁として整形している。器体の調整は両側縁に腹面側からの急斜度剥離が施された後、右側縁上半に背面側からの対向剥離、背面下半に左側縁側からの平坦剥離によるものである。素材利用、形態的特徴から、後期旧石器時代後半頃、立川ロームV層上部~IV層下部段階に位置付けられる。 (山 田)

縄文時代(図29-2~10)

2は頁岩製の石槍の折損品で、丁寧な両面加工によってやや厚手の尖った基部を作出している。

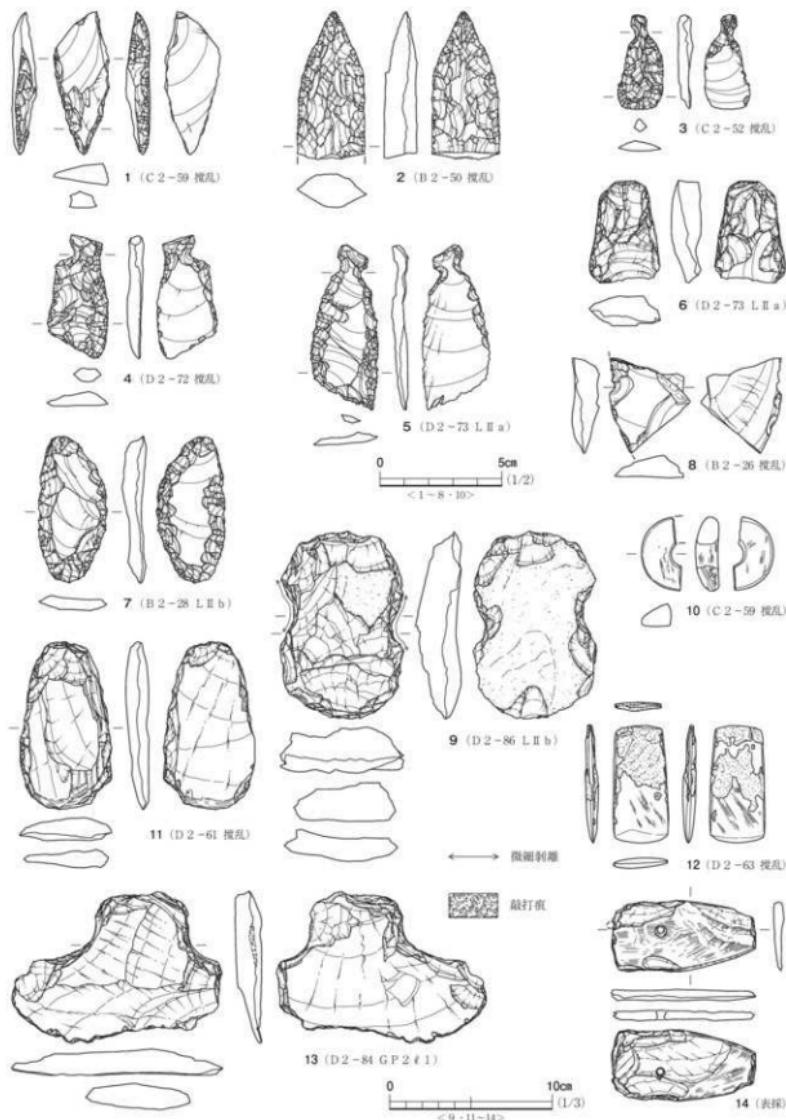


図29 調査1区小穴・遺構外出土遺物

図29－3～5は綾形の石匙である。全て頁岩製で、左右非対称、側縁及び下縁部が刃部となるものである。3は小型品で、下端部が幅広となり、丸味をもっている。4・5は右側縁と下縁が直線状をなし、左側縁が弧を描くもので下端部が幅広となる。

6は小型の石鎧で頁岩製である。撥形で刃部が片刃状となる。素材の背面側はほぼ全面が調整で覆われるが、主要剥離面は側縁部だけに周縁加工が施されるもので、素材の剥離面で構成される刃部に加工は認められない。

7は剥片の縁辺に連続的な調整を施して刃部を作り出した頁岩製の削器で、素材の形を大きく変えない不定形な綾形である。器体両面に周縁調整を施し、下縁部にも刃部が作出される。8は左側縁の一部にノッチ状の調整が認められる二次加工痕のある頁岩製の石器である。

9は粘板岩製の打製石斧である。厚手の扁平円錐の両側縁部に表裏面からの加工により一对の抉りを施し、分銅型の打製石斧と考えられる。上下端部に二次加工を施し、両端を刃部とする。表面は一部表皮を残すが全体に大振りな剥離を施し、裏面は大半の表皮を残し、上下端、両側縁の抉りのみ表裏面の両方向から簡略な調整を施す。縄文時代前期中葉～後葉頃の資料と判断している。

10はメノウ製の直径約3cmの块状耳飾りで右側が欠損している。表面は緩やかな球状、裏面は平坦で、全面に丁寧な磨きが施されている。抉り込み部は磨り切りで切断され、一部削痕が残る。横断面形が肉厚な三角形をなすので、縄文時代前期前葉でも古い時期の可能性が高い。

弥生時代(図29－11・12・14)

11は粘板岩製の両刃石斧で長さは10.3cmである。全体的に調整剥離を施し、刃縁から5～10mmほどの幅のみ表裏面に研磨を行い、刃部が形成されている。刃縁には研磨痕との重複関係が不明瞭な使用痕が観察できるため、再加工品の可能性もある。

12は全体に薄く、刃面のしのぎが不明瞭な扁平片刃石斧である。調整剥離後に敲打を加え、刃部を中心で研磨している。研磨は丁寧で、刃縁には綾方向の使用痕が観察できる。石材は流紋岩で長さ7.2cmとやや小型である。

14は粘板岩製の石包丁で、左半分と右先端が折損する。背部幅は2.5mmと薄く、刃部は研磨により明瞭な稜を形成する。薄手の剥片を素材とし、剥離調整後に研磨されるが、一部の調整剥離痕が残る。研磨後に回転穿孔による紐孔が表裏面から穿たれているが、2個の紐孔のうち、左側は一部欠損している。紐孔の直径は4mmで、裏面中央では、紐孔脇に径1～2mmの盲孔が認められる。なお、紐孔を中心として、表面の一部にコーングロスの光沢が確認できる。

(植 松)

第2章 調査2区の調査成果

第1節 遺構の分布と基本土層

1. 遺構の分布（図30、写真38～41）

調査2区は東西方向に延びる遺跡の南西部、段丘の平坦面に位置する。調査区範囲は北東辺約101m、南西辺約77m、西辺約53mの逆台形状を呈する。

表土除去後の検出面の地形は、C 4-05グリッド付近を変換点として北東側は標高7.5～7.7mの平坦面、南西側は標高7.2～7.4mの緩斜面となるが、調査区西端から東側にかけて徐々にL IIが薄くなり、保存地区東端では表土直下でL IIIに達するため、近現代の土地改変による影響を受けている。本来の微地形は東側から西側に下る緩斜面が形成されていたと考えられる。

調査の結果、調査区北西部の圃場整備区域から古墳時代前期後半の竪穴住居跡9軒、土坑1基、平安時代の掘立柱建物跡1棟、土器焼成遺構3基、土坑3基、時代不詳の土坑2基、性格不明遺構1基を検出した。

古墳時代の竪穴住居跡は東半部に集中し、東側は隣接する保存地区（表土除去後に圃場整備から除外された区域）へと分布が続いている。保存地区側の分布密度が高く、集落跡の中心は保存地区側に存在する。住居跡の分布は西側の4・7号住居跡で途切れるが、北側は6号住居跡、南側は22号住居跡が位置しており、南北方向の遺構の広がりは不明である。

平安時代の遺構は南部に1号建物跡と21～23号土坑、9号住居跡に重複して1～3号土器焼成遺構が位置する。1号建物跡の主軸方位は真北を向く。21～23号土坑は1号建物跡東側に接近し、1基は1号建物跡と重複する。土器焼成遺構3基は9号住居跡内に位置し、住居跡のくぼみを利用して構築されている。1・2号土器焼成遺構は竪穴住居跡南西壁、3号土器焼成遺構は北西壁を奥壁として利用し、住居跡中心側に焚口を設けて放射状に並ぶ。3基の重複関係は認められない。1号掘立柱建物跡と土器焼成遺構との関連は不明であるが、いずれも9世紀前葉頃の年代と考えられる。

保存地区では縄文時代後期の埋甕1基、古墳時代の竪穴住居跡11軒、土坑1基、時代不詳の竪穴住居跡2軒、土坑5基を検出した。埋甕は北西側に単独で位置し、土坑は西側を中心として散漫に分布する。竪穴住居跡は地区内のほぼ全面に広がり、分布域はさらに保存地区的外側へ広がりが見られる。保存地区的竪穴住居跡13軒のうち、10～18、24、25号の11軒の検出面から遺物が出土した。

古墳時代前期後半の住居跡の規模には、大・中・小型の組み合わせが想定できる。一辺が6m以上8m未満の大型住居跡（9a・10・11・15・16号住居跡）、一辺が4m以上6m未満の中型住

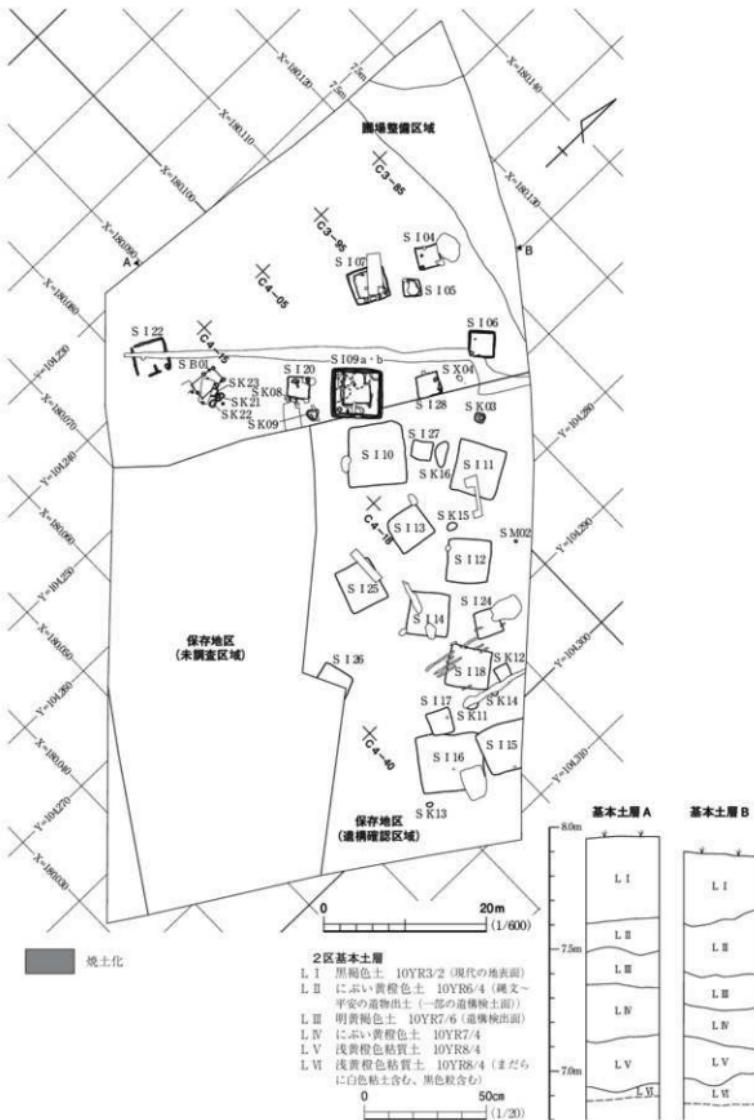


図30 調査2区構造配置図・基本土層

居跡(7・9b・12~14・18・22・25号住居跡)、一辺が4m未満の小型住居跡(4~6・17・20・24・28号住居跡)である。また、主軸方向の異なる住居跡の存在、重複による新旧関係(16号→15号・17号)から、複数期の変遷が認められる。

2. 調査2区の基本土層(図30、写真41)

調査2区西壁(土層A)と北東壁(土層B)で基本土層を観察・記録した。掘削最深度は現地表下1.3mで、L VI上位まで確認した。基盤礫層は確認していない。堆積状態は調査1区と共通するが、同区北東端で確認されたL V上面までの湧水は確認されなかった。

L I : 黒褐色粘土層。現表土に相当する。表層は2011年3月11日の東日本大震災時の津波堆積物を含む。下位は近現代の宅地造成に伴う碎石を含む盛土層や畑地等の作土である。平均層厚35cm。

L II : にぶい黄橙色粘土層。上位は近現代の削平のため本来の堆積層厚は不明である。L IIより上位に堆積していたと考えられる古土壤との漸移層に相当する。古土壤は堅穴住居跡の覆土上層にレンズ状に堆積する。縄文時代以降の遺物を包含する。一部の遺構はL II上面で検出した。平均層厚23cm。

L III : 明黄褐色砂質粘土層。遺構検出面に相当する。L IVがソフト化した層と考えられる。L III以下は無遺物層である。平均層厚15cm。平成26年度に調査した県道北泉小高線間連査

表2 調査2区堅穴住居跡一覧

遺構名	遺構図版	地区	年代	グリッド	方位	規模(m)		住居内施設				
						長軸	短軸	炉	野戸窓	間仕切り溝	壁溝	細部
S 104	BS32	開場整備区域	古墳時代前期	C 3 ~ 86	N29°E	2.81	2.72	●	●			
S 105	BS34	開場整備区域	古墳時代前期	C 3 ~ 86	N40°E	2.10	1.97	●				
S 106	BS35・36	開場整備区域	古墳時代前期	C 3 ~ 87	N45°E	3.20	3.20	●	●	●	●	
S 107	BS39	開場整備区域	古墳時代前期	C 3 ~ 85・86、95 ~ 96	N29°E	4.20	3.95	●	●			
S 109a	BS40・41	開場整備区域	古墳時代前期	C 3 ~ 96・97、C 4 ~ 6・7	N47°E	6.30	6.12	●	●	●	●	
S 109b	BS43・44	開場整備区域	古墳時代前期	C 3 ~ 96・97、C 4 ~ 6・7	N47°E	5.60	5.36	●	●	●	●	
S 110	保存地区	古墳時代前期		C 4 ~ 7・8、17	N39°E	7.50	6.90					
S 111	保存地区	古墳時代前期		C 3 ~ 98、C 4 ~ 8	N61°E	6.30	5.80					
S 112	保存地区	古墳時代前期		C 4 ~ 8・9	N48°E	5.40	5.20					
S 113	保存地区	古墳時代前期		C 4 ~ 8・18	N 9°E	4.70	4.40					
S 114	保存地区	古墳時代前期		C 4 ~ 19	N41°E	5.30	5.00					
S 115	保存地区	古墳時代前期		C 4 ~ 20・30、D 4 ~ 11・21	N21°E	6.00	-	●				
S 116	保存地区	古墳時代前期		C 4 ~ 30・40、D 4 ~ 21・31	N38°E	7.80	6.80	●				
S 117	保存地区	古墳時代前期		C 4 ~ 30	N30°E	3.00	2.80	●				
S 118	保存地区	古墳時代前期		C 4 ~ 19・20	N56°E	5.20	4.90					
S 120	BS46・47	開場整備区域	古墳時代前期	C 4 ~ 6	N47°E	2.75	2.70	●	●			
S 122	BS49	開場整備区域	古墳時代前期	C 4 ~ 14・15	N27°E	4.00	4.00	●	●	●	●	
S 124	保存地区	古墳時代前期		C 4 ~ 9・10、19 ~ 20	N24°E	3.20	3.20					
S 125	保存地区	古墳時代前期		C 4 ~ 18・28	N18°E	5.40	4.80					
S 126	保存地区	古墳時代前期		C 4 ~ 29	N78°E	4.00	-					
S 127	保存地区	古墳時代前期		C 3 ~ 97・98、C 4 ~ 7・8	N50°E	2.50	2.30					
S 128	BS50	開場整備区域	古墳時代前期	C 3 ~ 97	N27°E	2.96	2.70	●	●			

区(以下、県道調査区)のLⅢaに相当する。

LⅣ：黄褐色砂質土層である。粗密度の強い砂質の黄褐色土を基層とする。平均層厚19cm。県道調査区のLⅢbに相当する。

LⅤ：にぶい黄橙色粘土層。LⅣとLⅥとの漸移層である。黄褐色土中に白色粘土粒を多く含有する。平均層厚20cm。

LⅥ：浅黄橙色粘土層である。白色粘土を基層とする。風化した花崗岩を母材とする水成堆積層。層厚不明。県道調査区のLⅣに相当する。

3. 保存地区の出土遺物(図31、写真94・95)

出土した遺物はすべて検出面からであり、古墳時代前期後半のものである。

図31-1～3は土師器鉢である。14号住居跡から出土した。1・2は薄手で精製である。1は体部が深い丸底風の平底で、短い口縁部がわずかに外傾する。口唇部は丸みを持つ。体部中央に緩い段を持ち、内面には対応する稜がみられる。外面はハケメと体部下端のケズリ後にミガキ、内面は口縁部のヨコナデと下半にミガキ、内外面とも赤色塗彩が施される。胎土は径1mm以下の長石、石英、黒雲母を少量含む。2は中央が凹む丸底風の底部で、半球形の体部から口縁部が強く内湾する。口唇部は尖る。器厚は底部が厚く、口唇部に向かって徐々に薄くなる。内外面にミガキと赤色塗彩が施されている。胎土は径1mm以下の長石、石英、黒雲母を多量含む。内外面とも被熱しており、あばた状の火ハゼ痕が観察される。3は凹底で、体部は緩く外反する。外面はケズリ後にハケメ、内面はヘラナデが施されている。胎土は径2mm以下の長石、石英を中量含む。

図31-4～6は土師器高杯である。4は18号住居跡、5・6は13号住居跡から出土した。4は外傾する杯底部に棱を持ち、脚部が「八」字状に聞くもの。脚裾部は緩やかに広がる。口唇部はやや内削で丸みを持ち、杯底部の稜も緩い。杯部と脚部の接合部は脚部の周りに粘土を貼り付けて整形した痕跡が残る。脚部の円孔は欠損のため不明である。杯部外面の口縁部はヨコナデ、体部～底部はハケメ後に横方向のミガキ、内面はヘラナデ後ミガキが施される。脚部外面はハケメ後にミガキ、内面はヘラナデ後に脚部下端のヨコナデが施される。内外面に赤色塗彩が施されている。5は「八」字状に聞く脚部で、杯部を欠失する。杯部内底面に相当する脚部上端はわずかに凹む。3方向の円孔が外面側から穿たれている。外面はミガキ、内面は周方向のハケメ、下端にヨコナデが施されている。外面にのみ赤色塗彩が施されている。胎土は径3mm以下の長石、石英、黒雲母、砂礫を多く含む。6は中実棒状の脚部で、杯部を欠失する。外面の摩耗が著しいが、わずかにミガキ、赤色塗彩の痕跡が見られる。内面はヘラナデにより整形されている。

図31-7～9は土師器甕である。7は12号及び13号住居跡、8は11号住居跡、9は17号住居跡から出土した。7・8は口縁部片、9は口縁～胴部片である。7は口縁部が「く」字状に屈曲し、外傾する。口唇部は面取りされている。外面はハケメ後にナデ、内面はヘラナデ、口縁部はヨコナデが施される。胎土は緻密で径2mm以下の石英、長石、海綿骨針をわずかに含む。8は口縁部

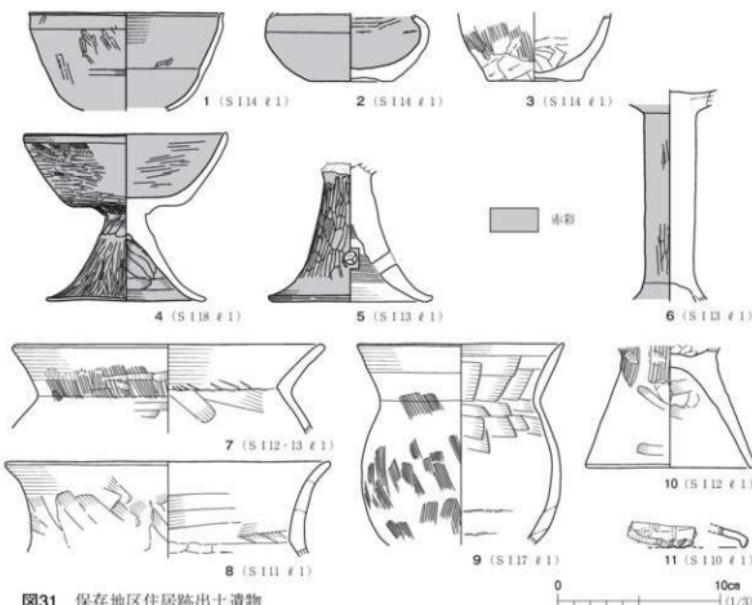


図31 保存地区住居跡出土遺物

が長く、緩やかに外反する。口唇部は丸みを持つ。内外面へラナデ後、口線上端にヨコナデが施されている。胎土はやや粗く、径2mm以下の石英、長石、黒雲母を多量に含む。9は楕円形に近い球形の胴部で、弱い凹の頸部から長い口縁部が外傾する。口唇部は丸く、内削ぎ気味である。胴部最大径よりわずかに口縁部が広い。内外面はハケメ後、口線上端にヨコナデが施されている。胴部に煤状付着物が観察される。胎土はやや緻密で、径2mm以下の石英、長石、黒雲母、海綿骨針をわずかに含む。

図31-10は土師器台付壺の台部である。「八」字状で、直線的に開く。台部上端は指頭痕が顕著である。外面はハケメ後ナデ、内面はナデが施される。外面は被熱痕跡が見られる。胎土は径4mm以下の長石、石英、赤褐色岩片、海綿骨針を多量に含む。

図31-11は破片のため全体形状が不明であるが、土師器高杯あるいは器台の脚部の裾端部と考えられる。端部はヘラ状工具による斜めの刻みが施され、下方に折り曲げられている。内外面にヘラナデ、赤色塗彩が施されている。胎土は緻密で径1mm以下の石英、長石、赤褐色岩片を多く含む。

(山田)

第2節 壁穴住居跡

4号住居跡 S I 04

遺構 (図32、写真42・43)

4号住居跡は調査2区の北西部、C 3 - 86グリッドに位置する。標高7.60mの平坦地に立地する。確認された住居跡群の北西隅にあたり、南東方向に近接して5号住居跡が分布している。本遺構の北壁は搅乱によって破壊されている。検出面はL III上面である。本遺構と重複する遺構はない。

本住居跡の平面形は正方形である。南東壁を基準とする住居跡の向きは、真北に対して29°東へ傾く。規模は北西壁の長さが遺存値で2.72m、南西壁の長さが2.81mである。検出面から床面までの深さは12cmを測る。南西壁は比較的の遺存状態が良く、外傾しながら急傾斜に立ち上がる。床面はほぼ平坦だが、住居跡中央部から周壁へ向かってわずかに傾斜する。床面の標高は7.46～7.54mである。掘形は浅い溝状を基調とし、住居跡の周壁に沿って構築されるが、北西壁際の一部のみ掘形は認められない。掘形の幅は30～45cmであり、住居跡床面から掘形底面までの深さは、3～10cmを測る。南西壁に沿う掘形は深く、南東壁に沿う掘形は浅い傾向がみられた。掘形の壁は、周壁側が急傾斜で立ち上がるのに対し、住居跡中央側は緩やかに立ち上がる傾向がみられた。

遺構内の堆積土は3層に分けた。 ℓ 1は黒褐色土の自然堆積土、 ℓ 2は炭化物粒を微量に含むにぶい黄橙色土で、遺構廃絶後直後の自然流入土と判断した。 ℓ 3は灰黄褐色土で掘形を埋めた土である。

住居内施設として、炉1基、小穴1基(P 1)を確認した。炉は住居跡中央から、南西壁寄りに構築される。炉を中心として60～80cmの範囲には、床面に炭化物粒が多く確認できた。炉は掘形のみ遺存し、その平面形は楕円形を基調としており、規模は長辺が33cm、短辺が26cmである。深さは5cmと浅い。炉の堆積土は焼土粒や炭化物粒を多量に含む灰褐色土の単層で、硬化が確認できた。

P 1は住居跡南隅に位置する不整方形の小穴である。規模は一辺の長さが45～48cm、深さは住居跡の床面から23cmを測る。P 1の堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は褐灰色土で、住居跡内堆積土 ℓ 1の土質に近似することから、住居廃絶後の自然堆積土と考えた。 ℓ 2・3は地山土L VIを由来とするにぶい黄橙色土である。粘性の強いL VIで、P 1の下位を埋戻したと判断した。

遺物 (図33、写真91)

4号住居跡からは弥生土器片が2点、土師器片173点が出土した。遺物の大半は、住居跡中央から東寄りにかけて出土しており、図32にその出土位置を示した。遺物の多くは ℓ 2下位から ℓ 1にかけて出土しており、床面から2～5cmほど浮いた状態で出土したものが多い。これらの遺物について床面から若干浮いた状態で出土しているが、住居の廃絶直後の時期に属する遺物と判断している。

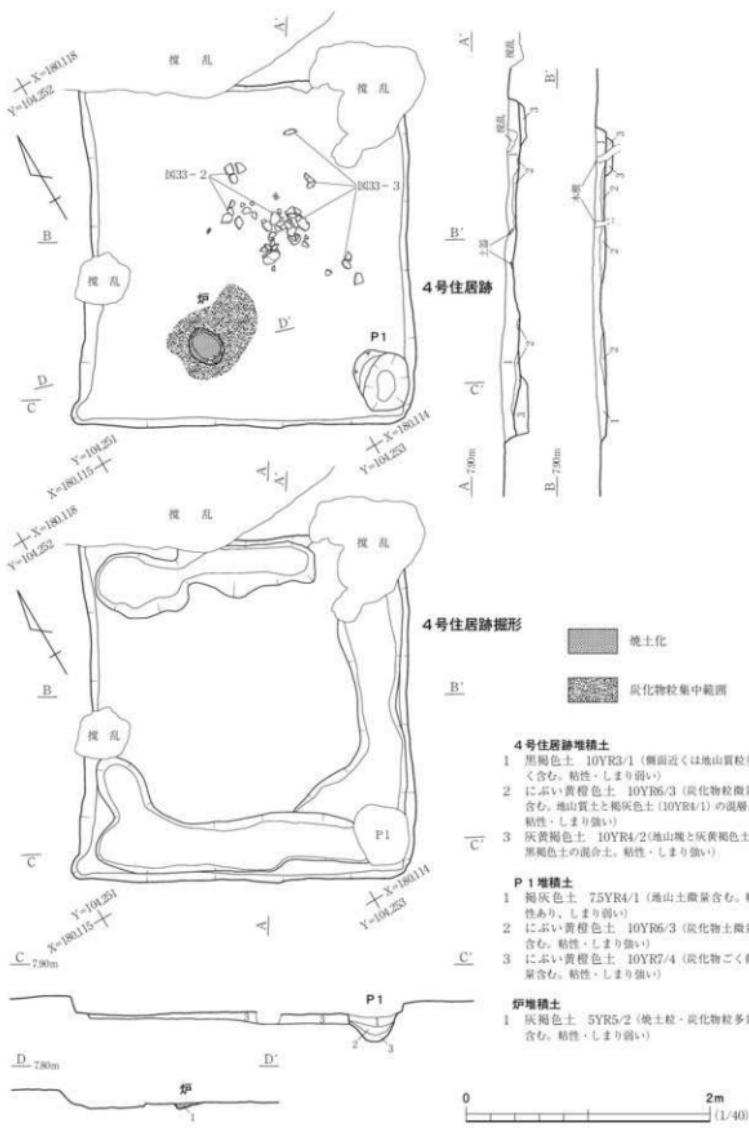


図32 4号住居跡

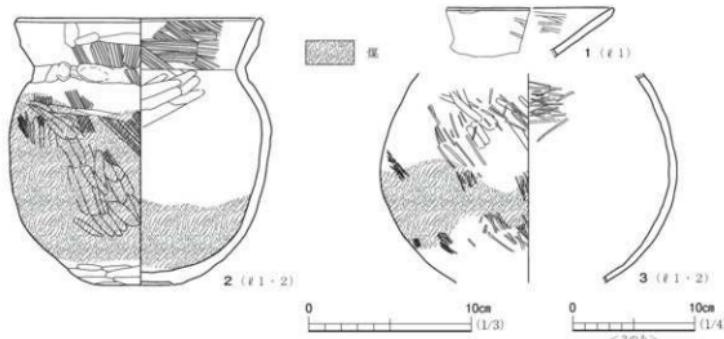


図33 4号住居跡出土遺物

図33-1は高杯の口縁部片と推測した。外面にヘラミガキを施している。図33-2は土器壺である。体部上位に最大径を持ち、口縁部は急に外傾する。外面はハケメ調整後、ヘラケズリが施される。内面は口縁部付近にハケメ調整、体部はヘラケズリが施される。外面体部の最大径より下には帯状の煤が観察された。図33-3も土器壺で、球洞状で体部のみ遺存している。外面はヘラケズリ調整後、ヘラミガキが施される。内面はヘラミガキが確認できるものの、大部分は剥離により不明である。外面体部最大径より下部には帯状の煤が観察された。

まとめ

本遺構の平面形は正方形を呈する。規模は一辺2.7~2.8m前後の小型の住居跡である。住居跡壁際には溝状の掘形を持ち、中央から南西寄りには掘形のある炉が付設されている。住居跡南東隅に位置するP1は、貯蔵穴の可能性がある。帰属時期は遺構内の出土遺物から、古墳時代前期の所産と考えられる。

(佐藤)

5号住居跡 S I 05

遺構(図34、写真44・45)

5号住居跡は調査2区の北西部、C3-86グリッドに位置する。標高7.70mの平坦地に立地する。北方向に4号住居跡が近接して分布している。検出面はLIII上面である。本遺構の西隅付近は木根により破壊されていた。

本住居跡の平面形は、方形である。南東壁を基準とする住居の向きは、真北に対して40°東に傾く。規模は南東壁の長さが2.1m、北東壁の長さが1.97mである。検出面から住居跡床面までの深さは90cmを測る。住居跡壁面は外傾しながら急に立ち上がる。床面はほぼ平坦だが、中央から南隅へ向ってわずかな高まりをもち、南隅付近では踏み縮まりが顕著にみられた。床面の標高は7.54~7.63mである。掘形は不整楕円形を基調とし、住居跡中央付近からやや東よりも構築される。規模は長辺が2.04m、短辺が0.65~1.46mである。住居跡床面から掘形底面までの深さは、

4~10cmを測る。掘形の壁は、南西側は立ち上がりが認められず、平坦なまま住居跡床面へ接続する。それ以外の壁は急に立ち上がる。

遺構内堆積土は3層に分けた。 ℓ 1は褐灰色土で遺構廃絶後の自然堆積土である。2は橙色土で被熱しており、 ℓ 3は掘形埋土である。

住居内施設は、炉1基を確認した。炉は住居跡中央から北東壁寄りに位置し、床面に褐灰色土を盛土して構築される。炉掘形は確認できない。炉の平面形は隅丸長方形を基調とする。規模は長辺が42cm、短辺が29cmで、高さは床面から6cmである。炉の断面形は台形となる。炉の上面は被熱によって硬化しており、その厚さは5cmである。5号住居跡からは、縄文土器片が1点、土器片6点が出土しているが、いずれも小片であることや、自然堆積土中からの出土のため図化を行っていない。

まとめ

本遺構の平面形は方形を呈する。規模は一辺20~21m前後の小型の住居跡である。住居跡中央付近には不整梢円形の掘形を持ち、中央から北東寄りには、盛土で構築された炉が付設されている。帰属時期は周辺の住居跡との類縁性から考慮すれば、古墳時代前期頃と推察する。（佐藤）

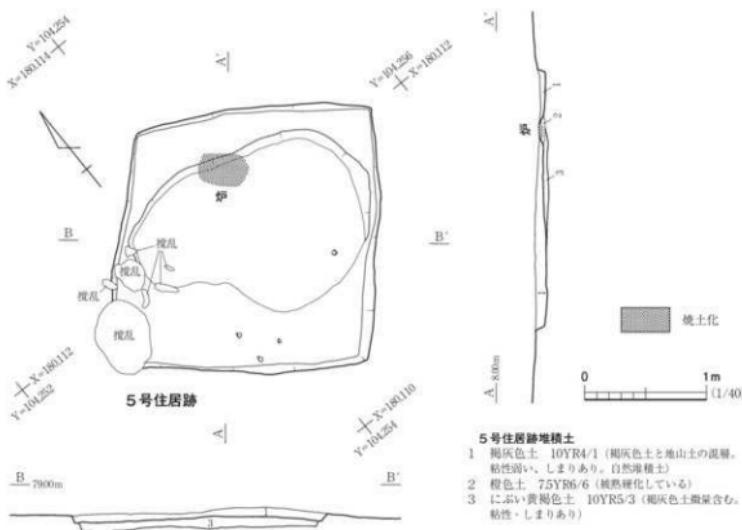


図34 5号住居跡

6号住居跡 S I 06

遺構(図35・36、写真46~53)

本住居跡は調査区北西部のC 3~87グリッドに位置する。表土掘削時にL III上面で北側の平面範囲を確認し、南側はL II上面で検出した。標高は上端7.7m、下端(床面)7.2mである。住居跡南隅の壁面と床面は近現代の溝跡により壊されており、検出時には床面~掘形埋土、P 1の平面範囲が露出していた。平面形は方形であり、規模は上端一辺3.2m、下端(床面)一辺3.0m、床面積は壁際溝を含め約9m²、検出面から床面までの深さは西隅で50cmを測る。主軸方位はN-45°-Eを示し、5・9・20号住居跡と軸線が一致する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上方でわずかに開く。

堆積土は9層に分層した。 ℓ 1・2は自然堆積の黒褐色~暗褐色土、 ℓ 3~8は黄褐色土塊・粒が混じる住居外からの流入土、 ℓ 9は焼土粒・炭化材を多く含む腐植質の黒色土で機能時堆積層である。西隅の床面直上に確認される。 ℓ 10~13は倒立状態で出土した土器内で確認された堆積土であり、細粒で粘性が強く、住居覆土が土器の割口から侵入して堆積した層である。 ℓ 14は壁溝覆土、 ℓ 15は掘形埋土で、黒色土と黄褐色土塊が斑状に混じる。

床面は掘形構築土で形成されている。掘形は中央部を掘り残し、壁際に沿って幅約50cm、深さ約10~20cmに溝状に掘削した後、これを埋めている。床面は硬化範囲中央部の黄褐色土(L III)の範囲を中心に形成されている。付属施設は壁溝、小穴2基を検出した。また、床面上で粘土塊範囲、焼土粒・炭化材分布範囲を検出した。炉跡、柱穴は未検出である。

壁溝は掘形埋戻し後に構築され、南隅を除く壁際を巡っている。断面形はU字~逆台形を呈し、規模は上幅7~14cm、下幅4~7cm、深さ5~8cmである。覆土からは少量の炭化材が出土している。

P 1は南隅に位置する。貯蔵穴と考えられる。平面形は不整円形、断面形は逆台形である。規模は長さ48cm、幅48cm、深さ45cmを測る。覆土から土師器(図37~21)、粘土塊(ℓ 6)が出土した。土師器は器形が特殊なことから、製作途中か、粘土貯蔵に関連するものと推察される。P 2は南東壁際に位置する。平面形は円形、断面形は浅皿形、直径30cm、深さ10cmを測る。壁溝より古く、一部床面から張り出す。

粘土塊範囲は床面西隅に位置し、長軸28cm、短軸9cm、高さ7cmで、突堤状に盛り上がっている。粘土塊の西側には焼土粒、炭化材を含む黒色土が広がり、その上位で図37-3・6・10・11が出土している。粘土塊の西側付近で何らかの燃焼行為が行われたと考えられる。

遺物(図37・38、写真86・95)

床面中央から西隅にかけて、土師器の鉢11点、甕4点、台付甕1点、壺3点、器形不明(底部片)1点、敲打器1点(剥片2点が接合)が出土した。床面遺物の出土状況が特異なため、これを詳述した後に遺物の特徴を記載する。

北西壁際北側では、鉢2点(図37-8・9)が倒立した入れ子の状態で出土した。9は8の上に

重なり、いずれも土圧により口縁部が一部削れていた。8・9は口縁部の内外面に被熱痕跡が観察され、被熱箇所と範囲が重なる。

南西壁際では完形の鉢(図37-4)がやや南西側に傾きつつも、正立した状態で出土した。北西壁際南側でも完形の鉢(図37-7)が正立した状態で出土した。いずれも土器内は住居内覆土が堆積し、底部を除く外面と内面の一部に被熱痕が認められた。

粘土塊西側では完形の鉢4点(図37-3・6・10・11)が倒立した状態でまとめて出土した。さらに10は3の上に重なって出土した。3・10の土器内上部は空洞で、3は底部を除く外面と口縁部内面、10は内面と一部外面に被熱痕が観察された。特に、内底面はあばた状の剥落痕が観察される。6は土圧により潰れ、口縁部が割れた状態で出土した。外面と一部内面に被熱痕が観察された。11は外面全体と口縁部内面に被熱痕が観察され、特に、口縁部内面はあばた状の剥落痕が顕著である。他の個体に比して、被熱の程度が強く、範囲が広いことから、11を中心として何らかの燃焼行為が行われた可能性がある。

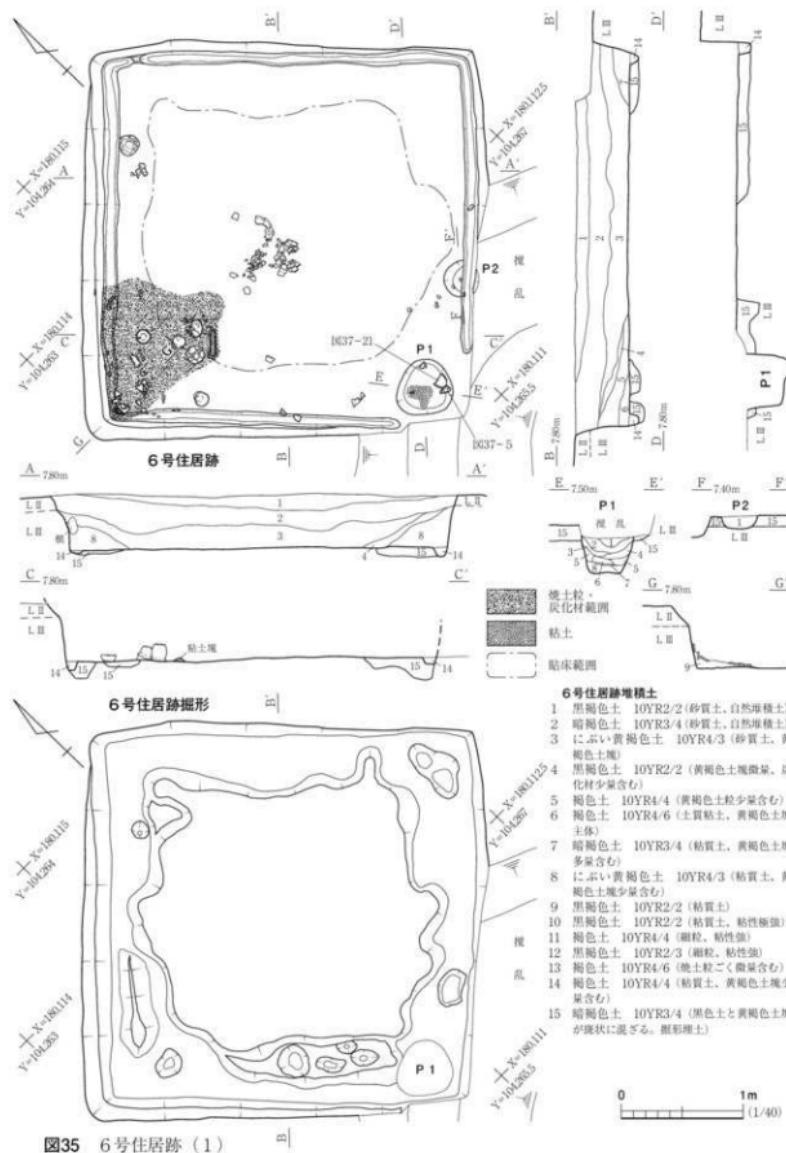
住居跡中央部では、壺(図37-13)が破片の状態で1m四方の範囲から出土した。外面に煤状付着物が認められるが、他の個体のような被熱痕は観察されない。西隅壁際では破片状態の壺(図37-20)が1m×50cmの範囲から出土した。一部は西隅壁面に貼り付く。外面全体が被熱しているが、内面が上向きの破片もあり、被熱後に破碎されたと考えられる。同範囲では敲打器(図38-1)も出土している。

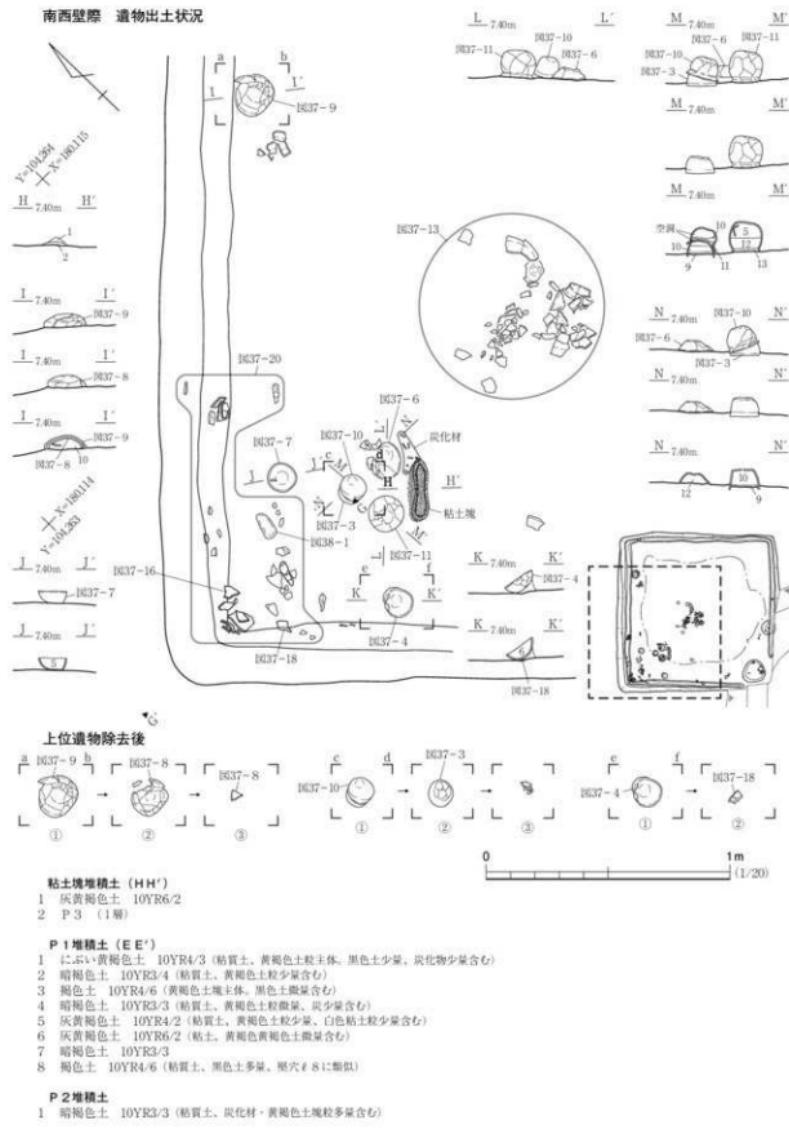
以上の出土状況から、正立状態の鉢2点(図37-4・7)、倒立状態の鉢6点(図37-3・6・8・9・10・11)は住居廃絶時の意図的な配置と遺棄が考えられる。これらは原位置での被熱である。また、破片状態の壺(図37-13)は被熱後の破碎、壺(図37-20)は未被熱で破碎され、遺棄されたと考えられる。

遺物は床面出土のものを中心に掲載した。なお、土師器の胎土は概ね径2mm以下の長石、石英、角閃石、赤褐色岩片、海綿骨針が観察される。

図37-1~11は土師器鉢である。1~4は体部が深い小型平底のもの。すべて外面にナデ、内面にヘラナデが施される。1は外面に縱位の指頭痕を残す粗雑なつくりのもの。2は体部がわずかに外傾し、口縁部が内湾する。底面～体部下端にケズリがみられる。3は口縁部が外傾し、口唇端部が薄く尖る。口縁部と体部下半に指頭痕がみられる。底部は水洗時に溶解してしまったが、出土時に底部中央内面側からの1カ所の穿孔を確認している。4は口縁部直下に紐積み痕が残り、折返し口縁を意識したような作りである。外面底部付近にヨコナデ、体部に縱位のナデが観察される。

5~9は大型でやや扁平な半球形の体部を持つもの。5・6は底径の大きい平底で、外傾する口縁部と口唇部が薄く尖るもの。5は丸底風の粗雑な整形の底部で、口縁部外面に指頭痕、体部にナデ、6は外面にミガキがみられる。いずれも内面はヘラナデが施される。7~9は底径の小さい丸底風の底部で、口縁部が内湾し、口唇部に丸みを持つ。7は外面にナデ、内面にヘラナデが施される。8・9は入れ子状で出土したもので、9より8が一回り小さい。8は底部中央がわずかに凹



**図36 6号住居跡（2）**

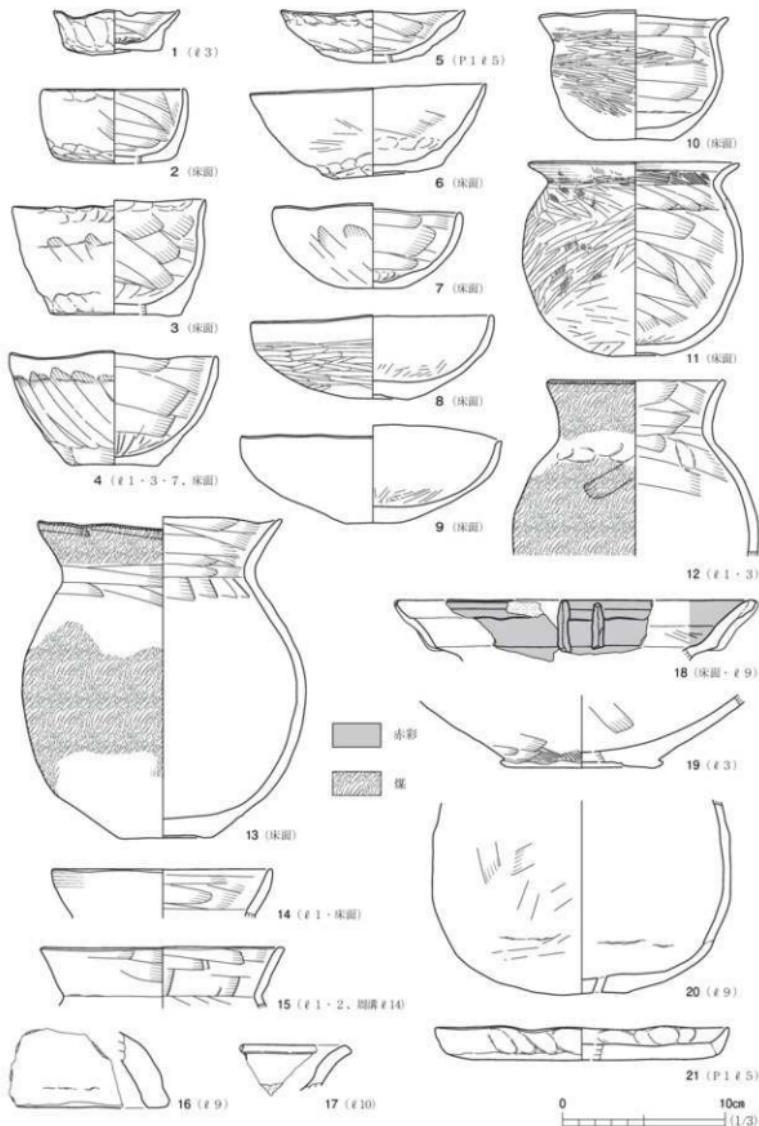


図37 6号住居跡出土遺物（1）

む。内外面にミガキが施される。

10は平底の小型短頭鉢である。口縁部に最大径が位置し、頭部の屈曲は緩く、口唇部は丸みを持つ。口縁部にヨコナデ、外面に横方向のミガキ、内面ヘラナデ後に横方向のミガキが施される。内底面にあばた状の剥落痕、煤状付着物がみられる。11は中型の変形鉢である。底面中央が凹む平底で、体部は球形、口縁部は短い「く」字状となる。口唇部は丸みを持つ。体部外面はハケメと一部ケズリ後ミガキ、内面はヘラナデ、口縁部外面にヨコナデが施される。外面全体に被熱痕、口縁部内面に被熱痕とあばた状の剥落痕が観察される。

図37-12~15は土師器壺である。すべて外面にナデ、内面にヘラナデが施される。12・13は口縁部と体部外面に煤状付着物がみられる。12は屈曲の弱い頭部から、口縁部が緩やかに外傾する。口唇部は平坦である。13は底面がわずかに凹む底部で、下端が直線状となる球形の体部から、口縁部が「く」字状に外反する。14・15は口縁部片である。14は口縁部がやや内済し、口唇部は丸みを持つ。15は直線状の口縁部が「く」字状に外傾する。内削気味で丸い口唇部を持つ。煤状付着物が観察される。

図37-16は土師器台付壺の台部片である。厚手・粗製で外面に接合痕が残る。内外面はナデが施されている。

図37-17~20は土師器壺である。17は口縁部片で、口唇部は外削で面取りされており、二重口縁壺の可能性がある。調整は磨滅のため判然としない。18は刻み目のない2本1単位の棒状浮文が貼付された折返し二重口縁壺の口縁部片である。有段部の稜は緩く、内面にも対応する稜を持つ。口唇部はわずかに内削気味で丸みを持つ。棒状浮文は幅約8mmで指頭により断面が三角形に整形されている。内外面ナデ後にミガキ、赤色塗彩が施されている。19は底部片である。外底面の中心部がわずかに凹み、体部は大きく外傾する。底部下端は粘土が捲れ括っている。外面にハケメとナデ、内面にヘラナデ、外面と破断面に白色粘土と思われる付着物が観察される。20は底部穿孔壺の体~底部片である。平底の底部には、焼成前に内面側から斜めに穿たれた直径6mm前後の梢円形の孔がある。外面はナデとミガキ、内面は磨滅のため不明である。内外面下半に煤状付着物が観察される。

図37-21は器種不明の土師器である。口縁と底部が幅広の盤状で、平底の底部に一段紐積みした粘土を指頭でつまみ上げて口縁部を作出している。内面に被熱痕跡が観察される。

図38-1は粘板岩製の扁平円碟を素材とする敲打器である。左側面は敲打痕が確認され、敲打による衝撃で節理面に沿って破碎している。破碎時の剥片1点が接合する。器体下半の表裏面には敲

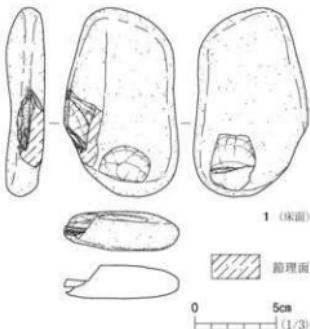


図38 6号居住跡出土遺物（2）

打時の衝撃剥離痕跡と考えられる下方向からの剥離痕が観察され、表面側の剥離痕に剥片1点が接合する。

まとめ

本住居跡の年代は刻目のない棒状浮文貼付の二重口縁壺の出土から、古墳時代前期後半に位置付けられる。土師器は器種構成に偏りが見られ、鉢が多く、次いで壺・壺となる。床面遺物の出土状況に特徴があり、鉢は完形のまま正立・倒立の状態、壺・壺は破碎の状態で意図的に遺棄されたと考えられる。同範囲から出土した敲打器も破碎土器との関連性が高い。焼土粒と炭化材の分布状況や土器の被熱痕跡からは、住居跡内西隅において何らかの燃焼行為が行われており、廃絶に伴う祭祀・儀礼痕跡の可能性がある。

(山田)

7号住居跡 S I 07

遺構 (図39、写真54・55)

7号住居跡は調査2区の、C 3-85、86、95、96グリッドに位置する。標高7.7mの平坦地に立地する。密集する住居跡群の南西隅にあたり、北東方向に4・5号住居跡が近接して分布している。本住居跡北東側の大部分は試掘トレンチによって床面下まで掘り下げられていた。検出面はLⅢ上面である。本住居跡と重複する遺構はない。

本住居跡の平面形は方形である。南東壁を基準とする住居跡の向きは、N-29°-Eへ傾く。規模は南東壁の長さが4.2m、南西壁の長さが3.95mである。検出面から住居跡床面までの深さは10cmを測る。壁面は外傾しながら急に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、住居跡中央部付近はやや踏み縮まっている。床面の標高は7.64mである。掘形は浅い溝状を基調とし、住居跡の周壁に沿って構築されるが、東隅部のP 1付近には掘形が認められない。掘形の幅は29~84cmである。住居跡床面から掘形底面までの深さは、6~13cmを測る。掘形の壁は急に立ち上がるが、西隅部のみ緩やかに立ち上がる傾向がみられた。遺構内堆積土は2層に分けた。 ℓ 1は黒褐色土で遺構廃絶後の自然堆積土、 ℓ 2は褐灰色土で掘形を埋めた土である。

住居内施設は、炉1基、小穴1基を確認した。炉は床面中央から西壁寄りの床面に褐灰色土を盛土して構築される。炉掘形は確認できない。炉の西隅は搅乱により破壊されているが、遺存する平面形は隅丸長方形と推察される。規模は遺存する長辺が29cm、短辺が15cmで、高さは床面から2cmである。炉の断面形は台形となる。炉はまだらに被熱しており、硬化状態は確認できない。

P 1は住居跡東隅付近に位置する不整梢円形の小穴である。規模は一辺の長さが50cm、深さは住居跡の床面から30cmを測る。P 1の堆積土は2層に分けた。 ℓ 1・2共に灰黄褐灰色粘質土で人為堆積である。

本住居跡からは、土師器が21点出土しているがいずれも小片のため図化を行っていない。

まとめ

本住居跡の平面形は方形を呈する。規模は一辺4~4.2m前後の住居跡である。住居跡壁際には

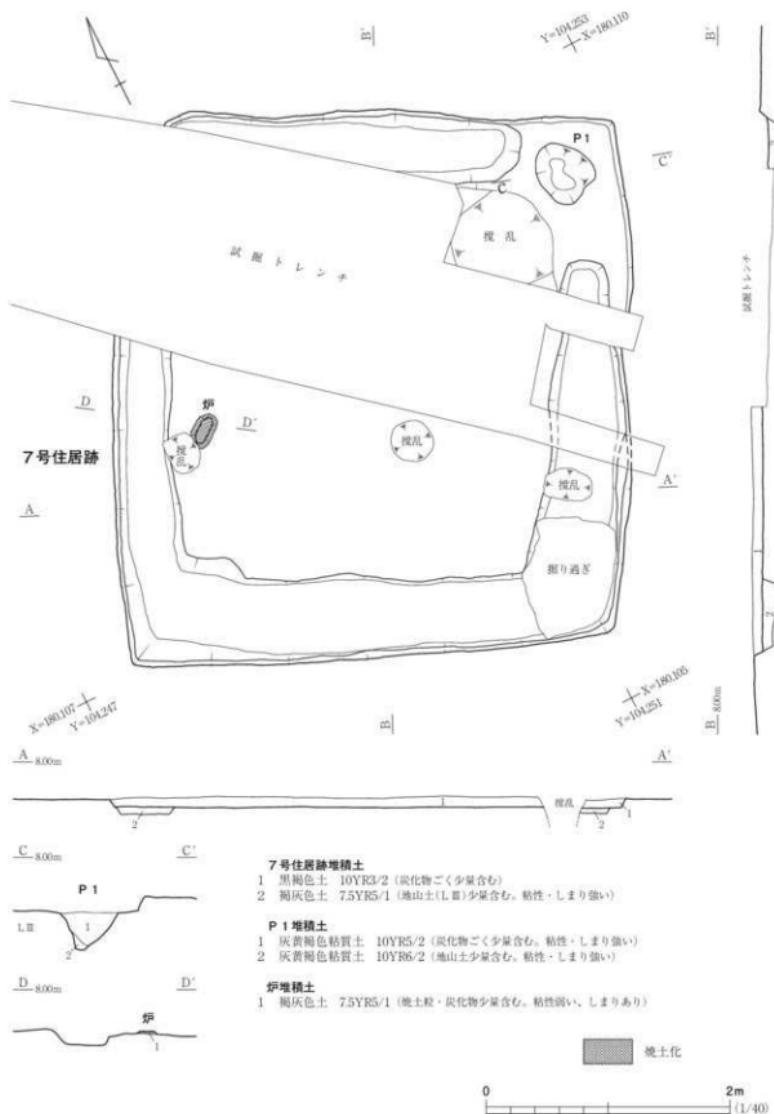


図39 7号住居跡

溝状の掘形を持ち、床面東隅に位置するP 1は調査例から貯蔵穴と推測した。床面中央から西寄りには炉が付設されている。帰属時期は周辺の住居跡との類縁性を考慮すれば、古墳時代前期と推察する。

(佐藤)

9号住居跡 S I 09

本遺構は調査2区の東寄りほぼ中央にある。周辺は南西に向かってわずかに傾斜しており、標高は7.8m、遺構確認面はL IIの上面である。南西2mに9号土坑、2.5mに20号住居跡、北東4mに28号住居跡がある。南東壁が浅い溝状の掘り込みにより破壊されている。覆土中には9世紀の1~3号土器焼成遺構があり、これらによって覆土と一部の床面が切られている。本遺構がまだ埋没しきらず窪みとなっているところを選んで土器焼成遺構が構築されたとすれば、9世紀には本住居跡が完全に埋没していなかったと考えられる。なお、覆土最上層であるℓ 1には土器焼成遺構に伴う遺物とともに近代以降とみられる陶器片も出土していることから、この土層はごく新しい時期の堆積と考えられる。

本遺構は規模拡張を伴う建て替えがなされているため、建て替え後を9a号住居跡、建て替え前を9b号住居跡としてそれぞれ記述することとする。

9a号住居跡

遺構(図40・41、写真56~60)

平面形は方形である。中軸線はN - 47° - Eで、南西に近接する20号住居跡や北10mにある6号住居跡などと中軸方向が類似する。中軸の上下辺となる北東辺、南西辺は直線的で、左右に相当する南東辺、北西辺は若干外側へ湾曲する。規模は中軸線と見た北東-南西方向で6.30m、北西-南東方向で6.12mである。覆土は自然堆積で、ℓ 1~7に分層できる。ℓ 1はごく新しい時期の堆積層で、覆土中に構築される1~3号土器焼成遺構はこの層に覆われる。ℓ 2・3は層中に砂粒を多く含むが、ℓ 4以下にはあまり含まれない。ℓ 5は焼土と炭化物を少量含む層で、壁際のみ堆積する。焼土は平面的には住居跡北西側に多く、北東壁際で焼土が顕著に認められた部分については平面図中に示した。炭化材は北西壁際南寄りに顕著で、壁に直交する向きのものが目立つ。ℓ 6・7は地山である黄褐色土を多く含む壁際の溝堆積土である。

住居跡の壁はやや外傾して直線的に立ち上がっており、深さは36cmである。床面は9b号住居跡をℓ 15~18で人為的に埋めて構築しており、壁際の拡張部分は地山をそのまま床面とする。北西壁際には梢円形の掘り込みがあり、これはℓ 12・13で埋められる。床面は縮まっているが、硬化はしていない。全体に緩やかな凹凸があり、西隅周辺は10・17・18号土坑によって浅く削られている。壁溝は、北隅と南東辺中央で途切れるほかは壁際を全周する。壁溝は、幅12~28cm、深さ5~12cm、覆土は地山黄褐色土を多く含むℓ 10である。間仕切溝は貯蔵穴P 6がある南隅を開むように2本あり、南西壁際のものは長さ80cm、幅22cm、深さ9cm、南東壁際のものは長さ76cm、幅37cm、深さ11cmで、覆土はともにℓ 11である。南東壁際の溝は一部埋められており、掘形で見

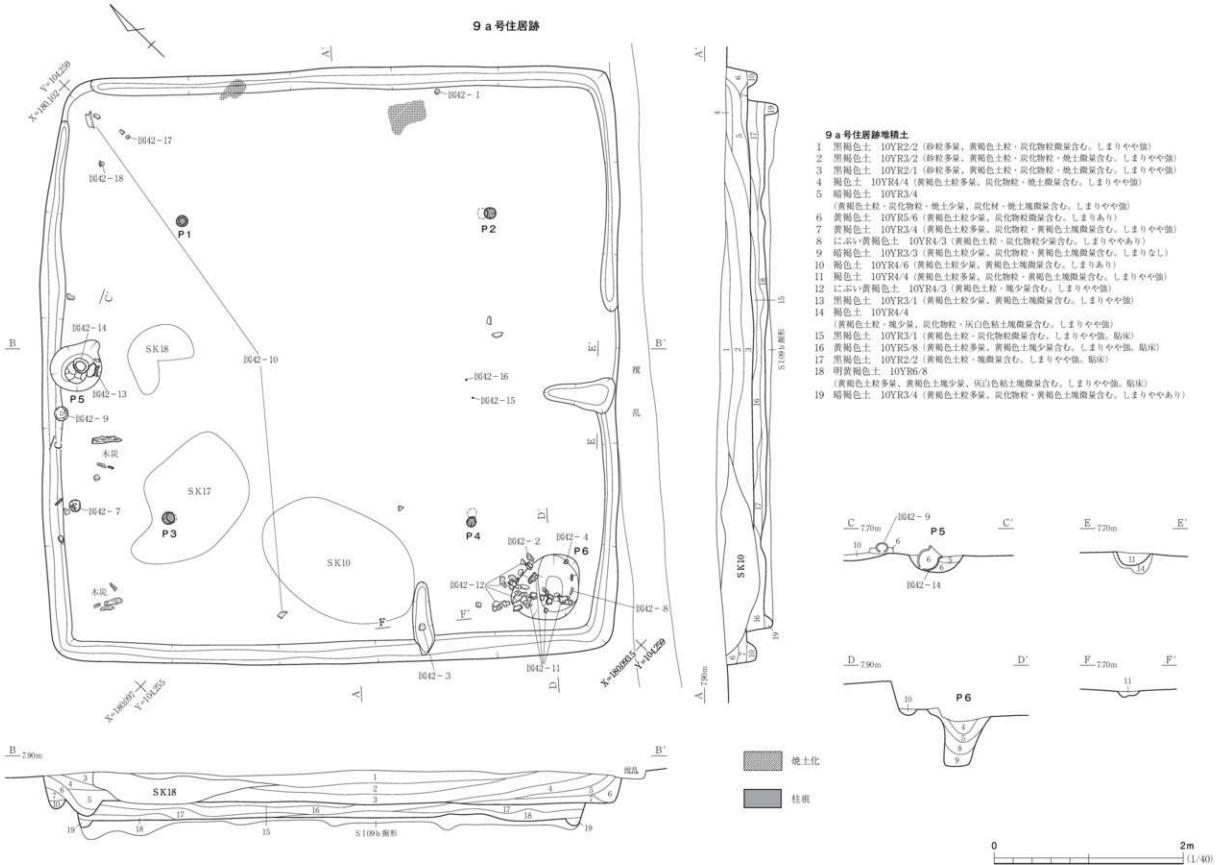


図40 9 a 号住居跡 (1)

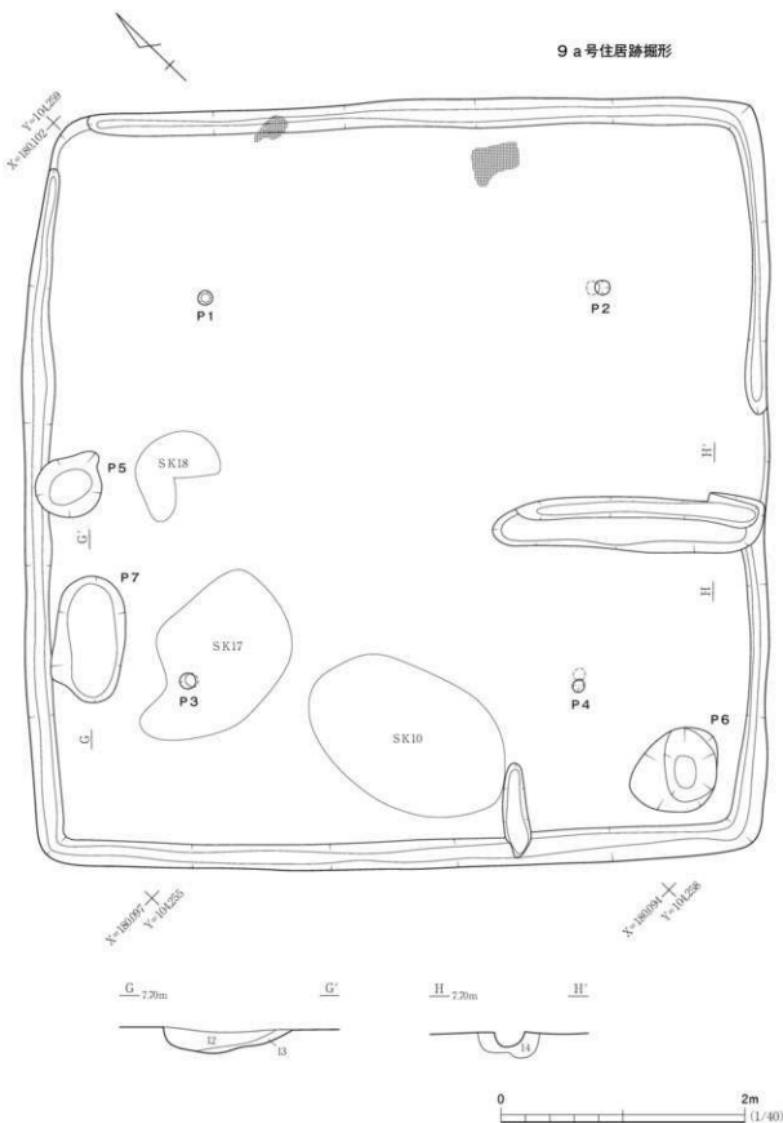


図41 9a号住居跡（2）

ると溝2本が重複するような形状を示す。掘形部分での長さ2.02m、幅44cm、深さ22cmである。

主柱穴は4基あり、ほぼ方形に配置される。床面では見つけられず9b号住居跡調査時に確認できたもので、観察結果から建て替えに伴う主柱の作り替えはなかったとみられる。柱痕部分の規模は、P1が径12×11cm、深さ75cm、P2が径12×11cm、深さ78cm、P3が径11cm、深さ77cm、P4が径12×11cm、深さ76cmで、覆土は炭化物をわずかに含む ℓ 23・24である。柱間寸法は、P1・2が3.18m、P3・4が3.18m、P1・3が3.14m、P2・4が3.15mである。P1・2は壁面と平行するように位置するが、P3・4の並びは壁面とややずれる。柱痕からすると、柱の直径は11cm前後とみられる。柱痕が直立するのはP1のみで、他の3本はそれぞれやや傾いている。入口を支える柱穴と考えられるP5は北西壁際中央にある。平面形はほぼ円形で断面は半球状であり、底面は丸みを持つ。規模は径54×50cm、深さ20cmで、覆土は住居跡覆土 ℓ 5・6である。P5の底面直上からは台部のみを欠損する土師器台付壺(図42-14)が斜位の状態で、P5の壁面に貼り付いて土師器壺(図42-13)がそれぞれ出土した。

炉は確認できない。住居跡中央部北西寄り、P5から住居跡中央に向かったあたりに焼土塊がまとまっているが、9b号住居跡の炉がここに位置するためその焼土が拡散しているものと考えられる。貯蔵穴P6は南隅にある。平面形は梢円形で、周間に不整円形の浅い掘り込みを伴う。底面は平坦で平面隅丸長方形であり、南側は垂直気味に、北側はなだらかに立ち上がる。規模は径61×43cm、浅い掘り込みを含めると径72×70cm、深さ60cmである。覆土は ℓ 4・5・8・9でレンズ状に堆積しており、住居跡壁際に堆積する焼土・炭化物層の ℓ 5が覆土の上位にある。 ℓ 8・9は住居跡内下層に堆積する ℓ 7に似る。 ℓ 5を中心とした層位には図42-11・12の土師器壺などが破片の状態で多く含まれており、土師器小型丸底壺(図42-4)のはか中型の壺片もわずかに混じる。

遺 物 (図42、写真87・93・95)

出土遺物は住居跡の規模からすると少なく、壁際からの出土が目立つ。土師器は壺・壺主体で、高杯、器台、壺、ミニチュア土器が少量出土する。赤彩された遺物はわずかで、高杯や中型の壺などに認められるのみである。図42に図示した遺物は土師器14点(ミニチュア土器(鉢形)2点、器台2点、壺2点、高杯1点、壺5点、甕1点、台付壺1点)、土製丸玉4点、棒状土製品1点、石鏃1点である。土師器は胎土に海綿骨針を含むものがほとんどで、認められないのは図42-5(器台)、図42-15・17(土製丸玉)のみである。ただ図42-5は小破片であり、15・17もほかの土製丸玉と胎土が類似することから、海綿骨針を含まない胎土とは決めかねる。

図42-1はミニチュア土器の完形で、北東壁際床面上から出土した。内外面ともに指頭圧痕が残る。図42-2は鉢形のミニチュア土器で貯蔵穴付近から、多数の壺片とともに床面からやや浮いて出土した。口縁部は粘土貼り付けにより複合口縁状となっている。全体に歪みが大きく、内外面とも指頭圧痕が目立つ。色調の異なる破片が接合しているため、破片となったのち被熱したと考えられる。壺2点(図42-3・4)はともに南隅付近から出土した口縁～体部の破片で、3

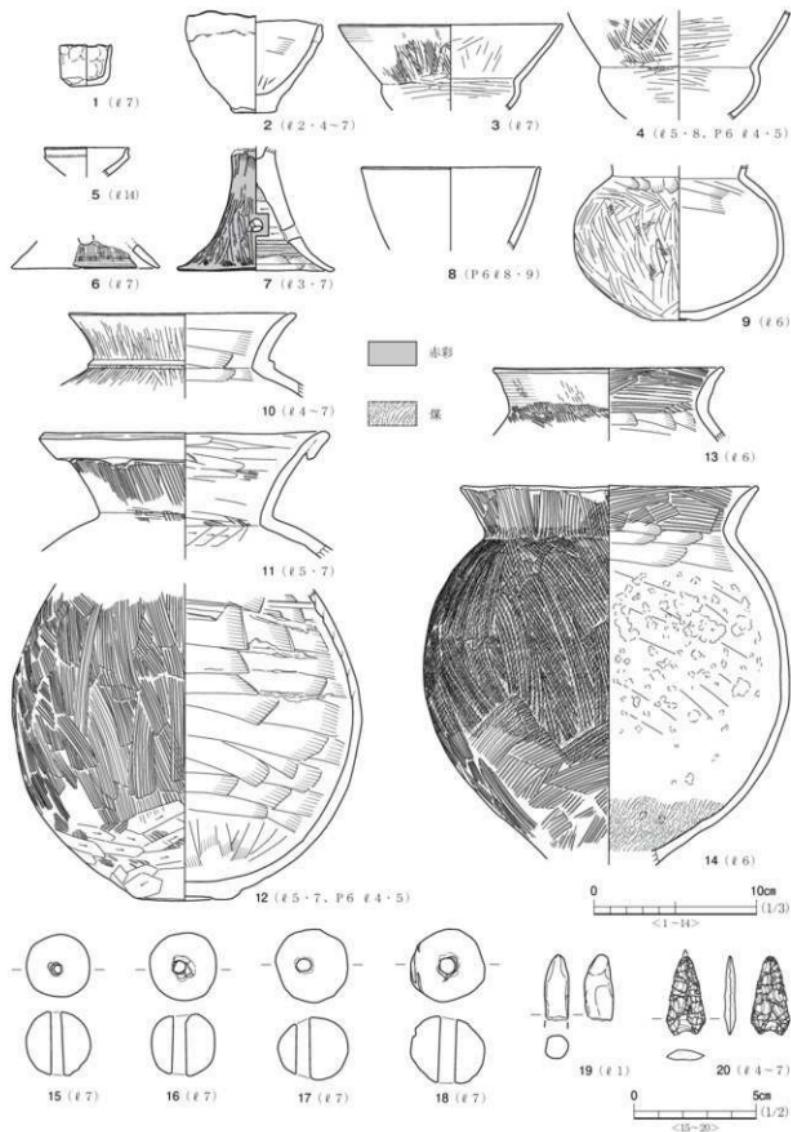


図42 9a号住居跡出土遺物

は間仕切溝上面、4は貯蔵穴内の壁面に接して出土している。3は内面が単位の不鮮明なミガキ、外面は口縁部ハケメのちヨコナデ・縦方向の粗いミガキ、体部は横方向のミガキで、体部上端の復元外径は8.6cmである。4は内面が横方向のミガキ、外面は口縁部がハケメのち縦方向の粗いミガキ、体部はケズリのち横方向のミガキで、体部上端の復元外径は3よりやや大きい9.7cmである。図42-5は器台杯部で、南東壁際間仕切溝掘形内から出土した。表面は磨滅のため調整不明で、口縁部外面は段を持ち、短く外反気味に立ち上がる。図42-6は器台脚端部で、住居跡西部の床面付近7cmから出土した。内面は磨滅しており、外面はハケメのちヨコナデである。孔が確認できるのは1カ所のみのため、全周の孔数は不明である。図42-7はほぼ完形の高杯脚部で、北西壁際の床面直上から正立の状態で出土した。全周で3孔を持ち、孔は径7mmで器面に対し直角に穿たれる。上面欠損部の状況から、底面に突出部がある杯部と接合されたものとみられる。内面上半はナデ、下半はハケメのちヨコナデ、外面はハケメのち縦方向の密なミガキである。外面は全面赤彩される。図42-8は中型の直口縁壺で、貯蔵穴内底面から約10cm浮いて、貯蔵穴の壁面に接して出土した。表面は磨滅しており調整は不明である。口縁部は直線的に開いており、わずかに内湾する。図42-9は中型の壺胴部で、北東壁際中央の床面直上から正立の状態で出土した。内面はナデ、外面はハケメ及びナデのちミガキである。底部は平底で、中央がわずかに凹む。体部から口縁部へは鋭角的に屈曲しており、外面は被熱により赤変している。体部径12.8cm、底径3.3cmである。図42-10は壺口縁部で、床面から7~10cm浮いて北隅と南西壁際からそれぞれ出土した破片が接合したものである。頸部外面に突帯が貼り付けられ、内面調整はナデ、外面は密なミガキである。突帯先端はさほど鋭角的ではなく、口縁部は外反気味に開く。図42-11は粘土貼り付けによる複合口縁の壺で、貯蔵穴上面付近から破片の状態で出土した。折り返し部底面は粘土を貼り付けたままの部分がほとんどだが、一部のみ粘土を貼り付けて平坦面としている。折り返し部の内面は一部が浅く凹み、緩やかな段を有するように整形される。内面体部はナデ、口縁部は横方向のハケメのち横方向のナデである。外面は体部ハケメのちナデ、口縁部は粘土貼り付けのち上半ナデ、下半縦方向のハケメである。復元口径17.4cm、復元頸部径10.8cmである。図42-12は壺の体~底部で、図42-11などとともに貯蔵穴上面付近から破片の状態で出土した。体部はやや縦に長い球胴、底部は突出する平底で、中央が凹む。調整は内面ナデ及びヘラナデで、体部上半に紐積み痕が顕著に残る。外面は体部ハケメのち下半ケズリで、体部最大径21.8cm、底部径6.2cmである。色調の異なる破片同士が接合しており、破片となったのち被熱したことがわかる。図42-13は單口縁の壺口縁部で、P5中位の壁面に接して出土した。体部から口縁部へは緩やかに屈曲する。調整は内面体部上端ナデ、口縁部ハケメ、外面体部上端ハケメ、口縁部ハケメのちヨコナデである。図42-14は台付壺で、P5内底面直上から、台部のみ欠損し口縁~体部はそのまま割れず斜位の状態で出土した。通常の壺の可能性もあるが、体部下半のやや直線的に伸びる形状から台付壺と考えたものである。口縁部は單口縁で、頸部は「く」の字に屈曲する。体部は球胴で、下半はやや長く伸びる。調整は内面胴部ナデ、口縁部ハケメ、外面口縁~体部ハケメである。内面胴部はあばた

状に表面が剥落している。煤は内面体部下半、外面体部中位～口縁部に付着する。体部最大径は22.5cmである。

土製丸玉は4点出土している。すべて完形で、図42-15・16は中央部南東壁寄りで床面からわずかに浮いて、図42-17・18は北隅で床面上5cmから出土しており、それぞれ2点ずつが組になるように出土するという特徴的なり方を示す。4点とも法量、胎土はほぼ同様だが、近接して出土する各2点同士は特に類似点が多い。15・16は17・18より丁寧に作られており、外径、孔径ともやや小さい。15は径2.6cm、孔径0.4～0.5cm、16は径2.7cm、孔径0.5～0.6cmである。17・18は全体にいびつで調整も荒い。17は径3.0cm、孔径0.6～0.7cmで、孔は中心から外れて開けられている。18は表面に植物纖維の圧痕が認められる。径3.0cm、孔径0.7cmである。

図42-19は住居跡西部覆土上層から出土した棒状の土製品である。下半は欠損し、表面には指頭圧痕が残る。残存長2.7cm、径0.9～1.2cmである。

図42-20の円基無茎石錐は覆土中から出土した。ほぼ完形で、先端をわずかに欠損する。現存長3.3cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、現存重量1,747gである。側縁は直線的だが、先端及び基部はやや湾曲する。繩文時代の遺物の混入であろう。珪質頁岩製である。

まとめ

本住居跡は9b号住居跡からの建て替えで、中軸線を同一として床面を高く、規模を拡張して構築されている。遺物の多くは壁寄りからの出土で、2点1組となる土製丸玉やミニチュア土器は住居跡廃棄に伴う祭祀行為の結果と推定される。所属時期は古墳時代前期後半と考えられる。

9b号住居跡

遺構(図43・44、写真61～67)

平面形は9a号住居跡と相似形となる方形で、中軸線も同じくN-47°-Eを指す。規模は中軸線と見た北東-南西方向で5.60m、北西-南東方向で5.36mで、中軸線方向にやや長い。覆土は人為堆積で、地山である黄褐色土塊などを含む⑯15～18が堆積する。

壁はやや外傾して直線的に立ち上がっており、深さは9a号住居跡掘形底面下20cm、確認面からは50cmである。床面は壁際をやや深く、中央を浅く掘り下げた後に⑲29～32で貼床して構築している。南東壁際は9a号住居跡の間仕切溝によって一部が切られている。床面は、方形に配置される4本主柱穴の内側部分の内区と、北西壁際付近は低く平坦であるのに対し、外側の外区はわずかに凹凸があつて内区などより一段高くなっている。内区と外区の境目は、北西壁際を除いて直線的で明確な段となって確認できる。高低差は1～5cmである。南東部(平面図下半)では一段高い部分が堤状になっており、その外側はやや低い平坦面となる。北東部(平面図上半)では外区全体が一段高い状態で、P2付近ではさらに一段高い土手が形成されるほか、北隅は浅く窪む。内区は著しく硬化している。堤状部分の硬化は一部に限られ、南西辺と南東辺南半は硬く、北東辺と南東辺北半は軟らかい。また、北西壁際の炉から壁際に至る部分は硬化しておらず、そこから壁際40cmほどはさらに軟らかい床となっている。外区床面は基本的に軟弱で、北隅・東隅・南隅付近に部分的

にやや硬く締まっているところがある。東隅では隅部を含む壁際、北隅では隅部を除く半径1～2mの扇状の部分が締まっている。南隅付近ではP7周辺は軟らかく、P7上端から30～50cm離れた幅80cm～1mの部分が締まっている状況が確認できる。

掘形は、壁際を深く中央付近を浅く掘り窪め、黄褐色土塊などを含むℓ29～32で貼床している。深さは2～20cmである。掘形の土層は主柱穴の掘形覆土を覆っているため、主柱設置後に貼床が施されたと考えられる。壁溝は壁際を全周する。幅は9～20cm、深さ5～12cm、覆土は地山黄褐色土を多く含むℓ19である。間仕切溝は床面では確認できず、掘形調査時に確認した。あり方は9a号住居跡と類似しており、南隅を囲むように南西壁際と南東壁際に各1本ある。南西壁際のものは長さ1.13m、幅26cm、深さ10cmと幅広で、底面の深さは一定である。9a号住居跡の間仕切溝と位置を比較すると、20cmほどのずれがある。南東壁際のものは長さ1.38m、幅20cm、深さ9cmで、底面は両端が深く、中央が浅く掘り込まれる。位置は9a号住居跡の間仕切溝とほぼ同位置である。覆土はともに地山黄褐色土塊を含むℓ33・34で、人為的に埋められたものとみる。

主柱穴は4基あり、ほぼ方形に配置される。9b号住居跡の主柱をそのまま9a号住居跡でも使用したと考えられるため、深さ以外は9a号住居跡の主柱とほぼ同様である。柱痕部分の規模は、P1は径12×11cm、深さ55cm、P2は径12×11cm、深さ61cm、P3は径11cm、深さ65cm、P4は径12×11cm、深さ63cmで、覆土は炭化物をわずかに含むℓ23・24である。柱間寸法は、P1～2が3.18m、P3～4が3.18m、P1～3が3.14m、P2～4が3.15mである。掘形の平面形はP1・3が隅丸方形、P2が円形、P4が楕円形である。底面は平坦で、柱痕部分のみは一段深く沈み込んだ上に硬化している。掘形内の柱の設置位置は、P1・2ではほぼ中央であるが、P3・4はそれぞれ壁に寄っている。なお、P2底面には小穴状のくぼみ、P4底面には浅い段があるが、ともに硬化面などは認められないため柱の建て替えの痕跡とは考えにくい。壁面は直線的で垂直かやや傾斜しており、すべての掘形に緩く傾斜する浅い掘り込みが伴う。主柱据え付けのために必要な造作だろうか。掘形の規模はP1は径68×44cm、深さ48cm、P2は径60×50cm、深さ52cm、P3は径76×68cm、深さ54cm、P4は径72×42cm、深さ54cmで、地山黄褐色土を多量に含むℓ35で埋められる。このほか、用途不明の柱穴が南隅に2基(P5・6)ある。重複しているが新旧関係は明確ではなく、同時存在の可能性もある。P5は径26×22cm、深さ22cm、P6は径26×24cm、深さ14cmで、P5覆土中からは直口縁の壺口縁部片が出土している。2基とも掘形を持っており、掘形の規模はP5が径36×32cm、深さ34cm、P6が径43×31cm、深さ28cmである。

炉は住居跡中央北西寄りにある。住居跡の中軸線と直交する方向に長い楕円形の掘り込みと、それを挟んで対称する被熱によって赤変する部分からなる。掘り込みの規模は23×18cm、深さ3cmと浅く、赤変部分を含めた長さは42cmである。掘り込み部分は赤変・硬化とも認められず、赤変部分を含む周囲一帯が硬化している。赤変部分西端から12cm北西壁寄りの地点から壁に向かう部分は、やや軟らかい床面となっている。

貯蔵穴(P7)は南隅にある。覆土と貼床土の区別がつかなかったため床面では存在がわからず、

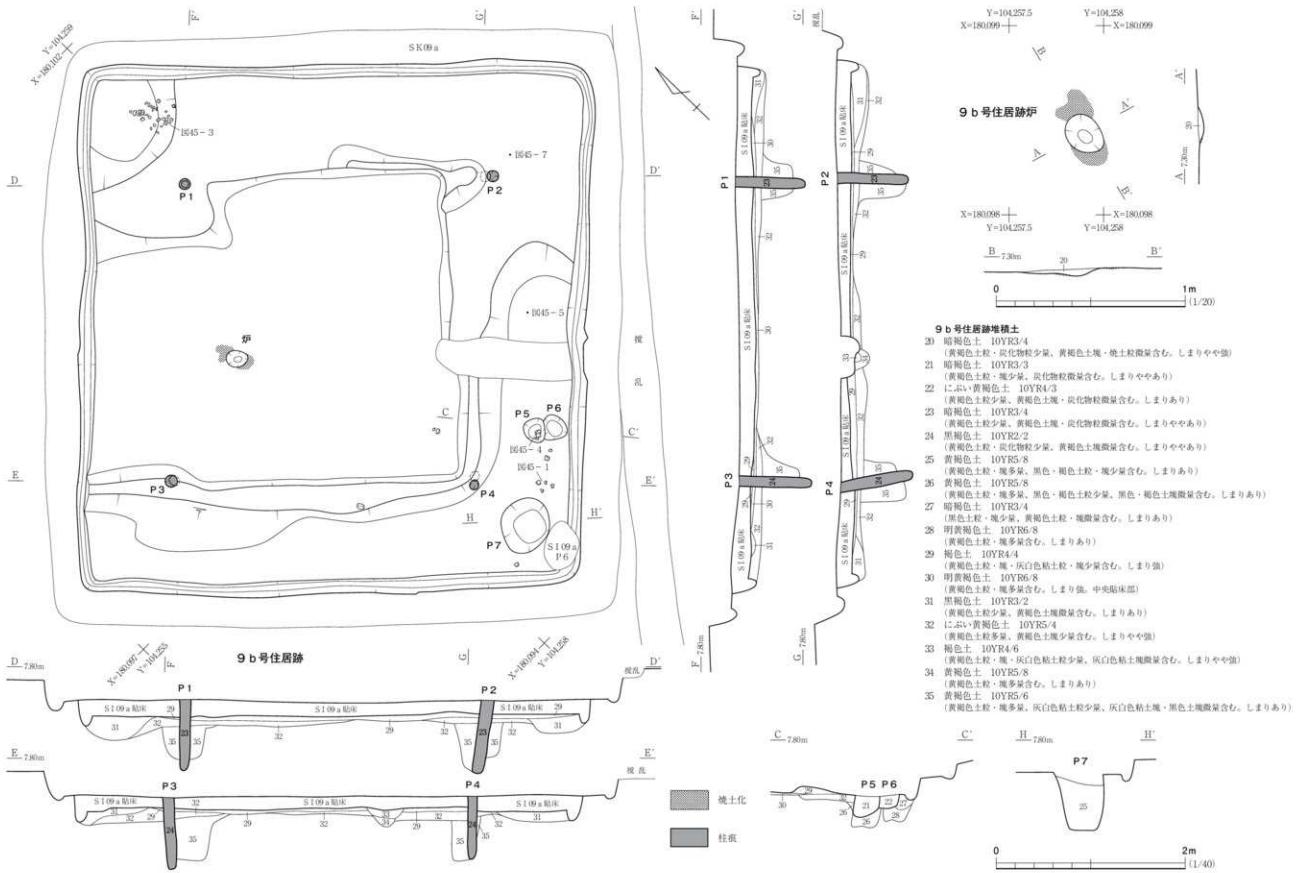


図43 9 b号住居跡 (1)

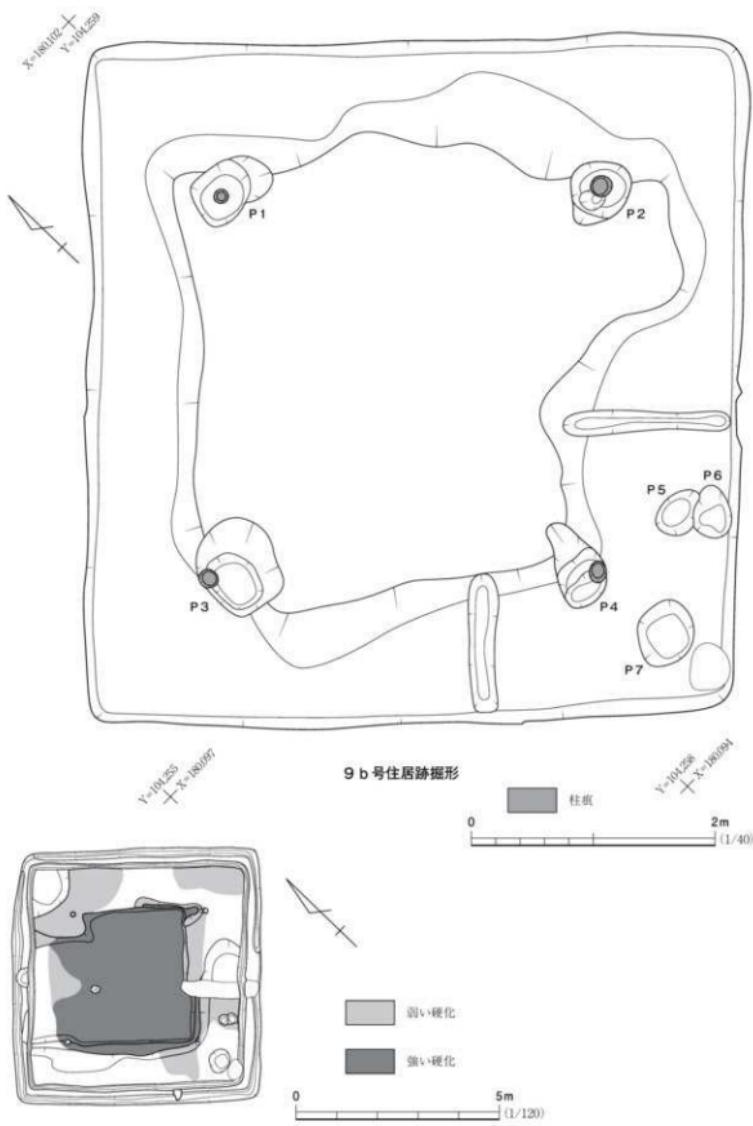


図44 9 b 号住居跡 (2)

掘形調査段階で確認できたものである。9 a号住居跡の貯蔵穴にわずかに切られるが、大きく重複してはいない。平面形は隅丸方形で、中軸方向は住居跡の中軸線とややずれる。底面は平坦で、立ち上がりは西側が緩やかで直線的、東側は丸みを持ちややオーバーハング気味である。規模は径54×52cm、深さは62cmで、黄褐色土塊を含む黒褐色土で埋められる。

遺物 (図45、写真88・95)

出土遺物は少ない。土師器は中型の壺主体で、甕、大型壺、高杯、小型鉢、器台が混じる程度である。甕は外面ハケ整形の「く」の字甕、大型の壺は直口縁である。赤彩は中型壺や高杯などにわずかに確認できるだけだが、量の比率では9 a号住居跡より多い。

土師器の出土は北隅と南隅にまとまっている。大半が床面直上ないしわずかに浮いた位置から細かく割れた小破片の状態で出土しており、人為的に埋める際に踏まれた結果と推定される。一方、玉類は東隅付近からガラス小玉、南東壁際から管玉の出土が確認されているが、これらはともに床面から浮いており、埋没途中で意図的に混入させた可能性がある。図45に図示した遺物は土師器4点(鉢1、器台1、壺2)、管玉1点、ガラス小玉2点である。土師器の胎土には海綿骨針を含むものが多いが、小破片のため器台(図45-2)には認められない。

図45-1の鉢は貯蔵穴付近床面直上から出土した。内面口縁部と体部の間が段となり、口縁部は内湾気味に開く。外面は粘土貼り付けにより複合口縁状を呈する。表面は磨滅のため調整は不明瞭だが、内面は横方向の密なミガキで、外面も同様の調整の可能性が高い。図45-2の器台は住居跡東寄り覆土中から出土した杯部片で、磨滅により調整は不明である。口縁部は斜め外方につまり出され、内面がやや内湾し、外面は沈線状に凹む。図45-3は北隅のほぼ床面直上から出土した直口縁の中型壺である。口縁部はやや内湾する。丁寧に整形されており、胎土も緻密で海綿骨針が顕著に認められる。内面はナデ、外面はハケメのち口唇部内外面ヨコナデのち全体に縦方向の密なミガキが施される。図45-4も直口縁の中型の壺口縁部で、P 5 覆土中からの出土である。小型丸底壺となる可能性もある。胎土に海綿骨針が顕著に認められる。口縁部はハの字に開き、上半でわずかに内側へと直線的に屈曲する。調整は内外面とも密なミガキで、下半は縦方向、上半は内面が横方向、外面は斜位に施される。

図45-5は石製の管玉で、南東壁際中央付近で床面から5cm浮いて出土した。完形で、表面は側面、端部とも丁寧に研磨されている。両面穿孔であり、中央で孔がわずかに食い違いをみせてい

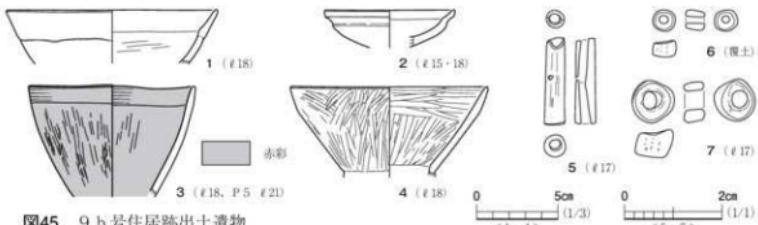


図45 9 b号住居跡出土遺物

る。片側端部が平坦ではなく斜めになっているほか、穿孔が食い違いをみせる部分でわずかに孔が開いているが、これらは欠損や使用によるものではなく、製作段階の入念な研磨により生じたものとみられる。長さ18cm、径3.5～4.5mm、孔径2mmである。蛇紋岩製である。

図45-6は完形のガラス小玉で、住居跡覆土を箒にかけて発見したものである。整った円筒状で、色調はライトブルーを呈する。内部には孔と平行する方向に列点状に並ぶ丸い気泡が認められており、管切り法で作られたとみられる。小口面はなめらかであり、再加熱により丸く整えられたものだろう。表面に研磨痕は認められない。内部に確認できる黒色の微粒子は、素材ガラスの不純物であろうか。直径4.5mm、厚さ4.5mm、孔径2mmである。

図45-7は大型のガラス小玉で、住居跡東隅で床面から10cmほど浮いて出土した。完形で、色調はコバルトブルーを呈する。やや重みがあり、片側の 小口面が凹面となっている。管切り法で作られたとみられ、内部気泡は孔と平行に列状に並んでおり、列の方向に長い紡錘形をしている。側縁や小口面には、気泡が表面に現れてしまつて小さな凹みとなっているところがある。小口面はなめらかであるため、再加熱により丸く整えられているのだろう。直径8.5mm、厚さ5.5mm、孔径4mmである。

まとめ

北東～南西方向にやや長い方形住居跡で、4本主柱穴と地床炉、貯蔵穴を持つ。内区と外区の床面状態の相違は、空間利用のあり方の違いと解釈される。9a号住居跡への建て替えのため人為的に埋められており、覆土中から出土した管玉とガラス小玉は祭祀行為の痕跡であろう。遺物は少ないが、所属時期は古墳時代前期後半と考えられる。

(谷 中)

20号住居跡 S I 20

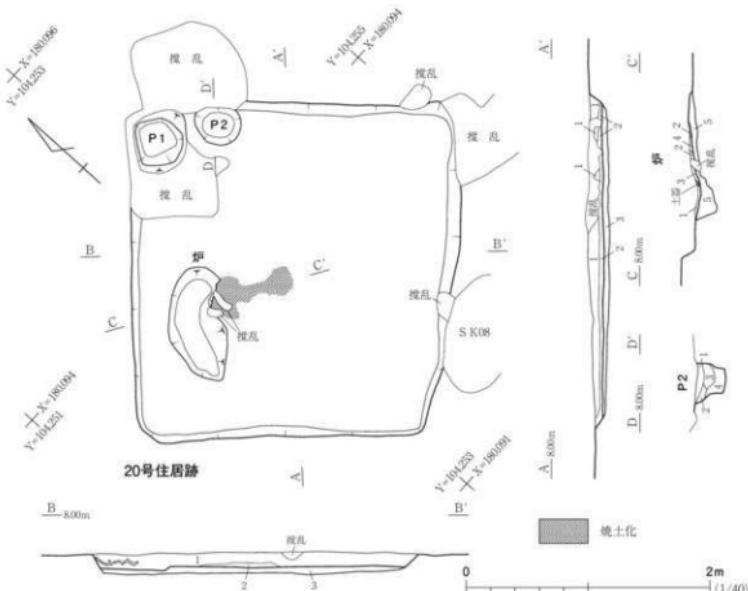
遺構(図46・47、写真68～71)

本遺構は、調査区中央部の西寄りに存在し、C 4-6グリッドに位置する。遺構検出面はL III上面である。周辺は南西に向かってわずかに下降しており、標高は7.7mである。遺構南東部で8号土坑と重複し、本遺構の方が古い。また、東方1.4mに9号土坑、北東2.7mには9a・b号住居跡及び1・2号土器焼成遺構が近接する。なお、遺構東隅は浅く後世の搅乱を受け、北隅は重機により大きく削平されている。

平面形は方形で、南西辺が短いため南東辺は緩く湾曲している。主軸方位はN-47°-Eである。規模は主軸の北東～南西方向で2.75m、北西～南東方向で2.7mを測る。壁は外傾して直線的に立ち上がり、壁高は4～15cmである。床面は水平に近いが緩やかな起伏があり、床面全体が貼床され、硬化部分はないものの全体に締まっている。

遺構内堆積土は3層に分層され、ℓ 1・2は遺構廃絶後の自然流入土、ℓ 3は貼床土である。ℓ 1・2は褐色粘土を含み、ℓ 2には焼土が少量混入している。

床面からは、炉跡1基と小穴2基(P 1・2)が検出された。

**20号住居跡堆積土**

- 1 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物・褐色粘土少量、焼土粒微量含む。しまりあり)
- 2 暗褐色土 10YR3/4 (褐色粘土、焼土粒、炭化物微量含む。しまりあり)
- 3 褐色土 10YR4/4 (22層主体。23黄褐色土塊多量含む。しまりあり。掘形埋土)

P2堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3 (褐色粘土少量、炭化物微量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/4 (炭化物微量、焼土粒・塊含む)
- 3 暗褐色土 75YR3/4 (焼土粒、炭化物微量含む)
- 4 明褐色土 75YR5/8 (焼土塊多量含む。かたい)
- 5 褐色土 10YR4/4 (LⅢ塊土多量含む。掘形埋土)

図46 20号住居跡 (1)

炉跡は床面中央西寄りにあり、底面が床面よりも若干高い地床炉で、被熱により赤色硬化している。平面形は北西 - 南東主軸の長い不整形を呈し、規模は長軸70cm、短軸38cmを測る。掘形を埋めてその上面を底面としており、底面上には焼土を含む土が堆積していた。炉跡の掘形は大規模で、東側の浅い不整形部分と西側の深い楕円形部分からなる。規模は東西1.08m、南北95cm、深さは東側で5~10cm、西側で20cmを測る。

P 1は遺構北隅にあり、平面形は隅丸方形で上部は重機で削平されている。底面も方形でやや起伏があり、壁は北側が急に、南側が緩やかに丸みを持って立ち上がり上半で角度を変えている。確認できる規模は51×43cm、深さは床面から28cmを測る。堆積土は3層に分層され、最下層のℓ 3は黄褐色粘土塊を多量に含み、人為堆積の可能性がある。

P 2はP 1の南東に隣接し、平面形は楕円形を呈する。長径37cm、短径32cm、深さ27cmを測

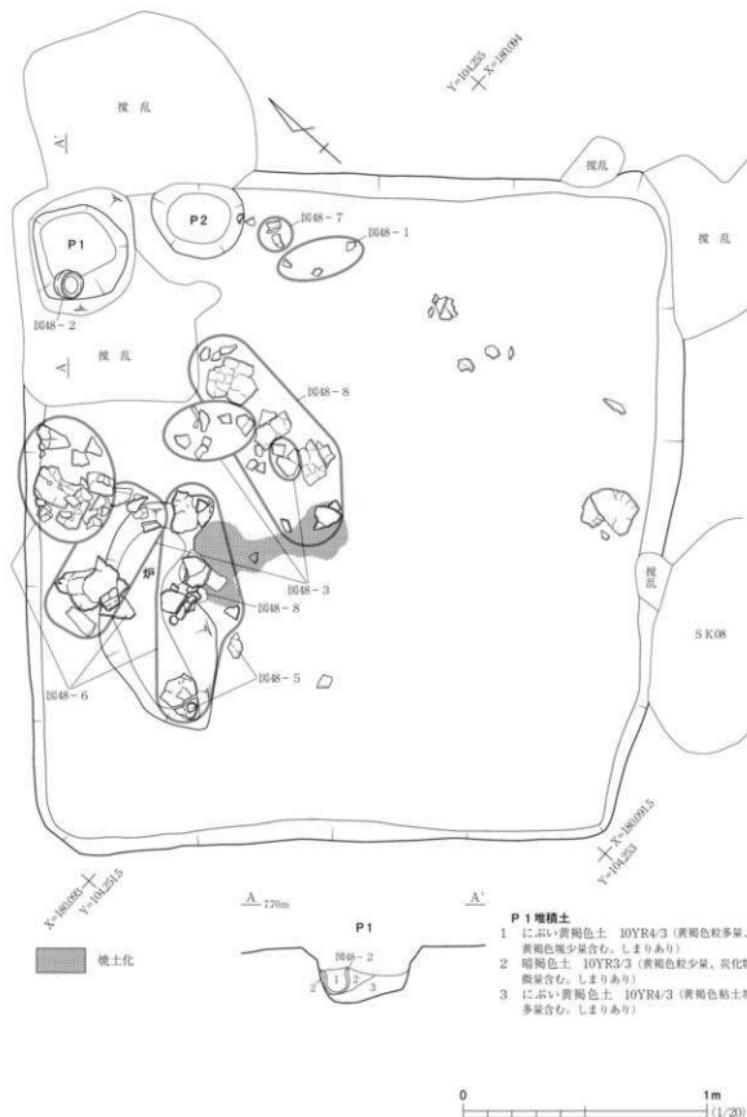


図47 20号住居跡（2）

る。壁は直線的で中位に段を持ち、底面は丸みを持つ。堆積土は4層に分層され、いずれも自然堆積と推測される。 ℓ 2は黄褐色土塊を多く含んで硬く締まり、 ℓ 3には焼土の他に炭化物が多く含まれている。

貼床土除去後に検出した掘形底面は西隅付近が深い他は大きな起伏はなく、深さは西隅付近以外では3~5cm、西隅付近は5~30cmである。

遺 物(図48、写真89・90)

遺物は炉跡及び北西壁際周辺に集中し、東部でも出土している。南隅に少ないので削平のためとも考えられる。遺物の多くは床面から5cm程度浮き、同一個体の破片が散乱せずまとまって出土しており、各個体片は土圧により接合可能な状態で細かく割れている。図示した遺物は土師器8点(鉢1点、小型壺1点、壺6点)で器種としては壺主体であり、すべて胎土に海綿骨針を含んでいる。壺以外の器種は破片でも少なく、図化以外の壺片は中型の破片数点だけであり、鉢片は全く認められない。

図48-1は完形の土師器鉢で、北東壁際から出土した。底部から内湾して立ち上がり、口縁部は緩く外反する。成形は丁寧で、外面と内面口縁部~体部が赤彩される。底面中央が浅く凹む。口縁端部は外向きに面取りされており、図48-4・7の口縁部と類似する。

図48-2は土師器の小型の球胴壺である。完形で、P1から正立の状態で出土しており、 ℓ 3堆積後に意図的に置かれた可能性がある。成形はやや荒く歪みが目立ち、体部内面の調整はハケメ主体で上半に紐積み痕を顕著に残す。赤変や剥落、煤付着といった使用痕跡は認められない。法量は大きいがミニチュア土器に類する個体であろう。

図48-3は土師器の広口壺で、炉周辺に広がって出土した破片が接合した。口縁部は外反気味に立ち上がり、体部は球胴である。粘土紐貼付による複合口縁で、体部下半には体部成形の際の接合部である粘土紐貼付による段を持つ。段は丸く、口縁部形状に酷似する。外面及び口縁部内面はハケメ後に密なミガキ、体部内面下半はハケメ後にナデ、体部上半は強めのナデである。成形は丁寧だが真円ではなく、口縁部径は23.5~25cmである。

図48-4~6は土師器壺で、白色・半透明砂粒を多く含む淡褐色の胎土であることから同一個体の可能性があるが、器形的に繋がりにくいため別個に図化した。4は二重口縁の口縁部片で、 ℓ 1から出土した。内外面とも密なミガキで、外面下半に粘土の繋ぎ目が残っている。外反気味に立ち上がり、口縁端部は外向きに面取りされ、中央がやや凹んでいる。5は頸部から体部上半の破片で炉跡南西部から出土した。外面はハケメ後にミガキ、内面は頸部がナデ後に密なミガキが施され、体部には指頭圧痕が残っている。6は炉跡から北西壁際に広がって出土した破片の接合で、底面に2回分の木葉痕が残っている。体部は球胴である。内面は剥落部分が多い。体部下半には1.1×1.3cmの小孔があり、孔外周の剥落の様相から外側からの穿孔と推測する。

図48-7・8は赤彩の土師器壺で、ともに胎土は白色・半透明砂粒を多く含む褐色土のため同一個体とも考えたが、頸部径が合わず別個体とした。7は北東壁際P2付近から出土した二重口縁

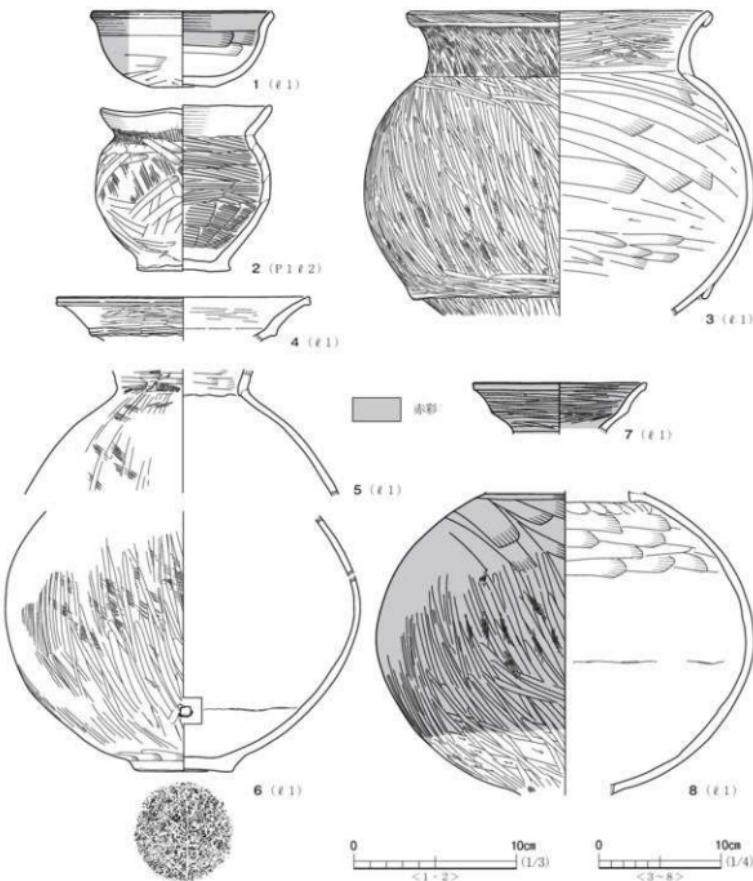


図48 20号住居跡出土遺物

壺で、内外面とも赤彩されている。成形は丁寧で、外反気味に立ち上がり、口縁端部は垂直に面取りされている。外面下半には指頭圧痕や粘土の皺が残っている。頭部内径は現存部分で6.4cmである。8は炉跡及び遺構北隅に広がって出土した破片が接合した。体部は球胴である。外面調整は丁寧で、体部中位ではハケメ後にミガキ、下半ではケズリ後にミガキを施している。内面は剥落が著しく、体部上端に指頭圧痕や粘土の皺が目立つ。体部最大径31cm、頭部内径10.4cmを測る。

まとめ

本遺構は方形基調の壺穴住居跡で、北東に近接する9a・9b号住居跡や北方13mに存在する

6号住居跡などと主軸方向が近似する。炉跡は住居跡中央西寄りにあり、大規模な掘形を伴う。貯蔵穴はP1だが、埋められた後にP2へ作り替えられた可能性がある。遺物は土師器のみで、器種は壺に偏っている。破片は床面上5cm程度の高さで広範囲に広がっており、各個体の破片は混在しない。住居跡廃絶後に、一定時間経過した後に高所から落下するなどして破片が一帯に散乱し、その後、土圧により小破片化したものと推定される。所属時期は出土遺物から古墳時代前期後半と考えられる。

(能登谷)

22号住居跡 S I 22

遺構(図49、写真72・73)

22号住居跡は調査2区の西部、C4-14・15グリッドに位置する。本遺構は、密集する住居群とは離れて分布している。標高は7.36mであり、他の住居群より20~30cm程低い場所に立地している。本遺構は住居跡中央を縦断するように溝状の擾乱を受けている。本遺構はLIIを掘り下げ後、LIIIの上面で方形の平面範囲として確認した。遺存状況は極めて悪く、住居内施設の周溝、小穴1基、溝1条を確認したにとどまる。周溝から復元した住居跡の平面形は、方形と推測される。周溝は西隅と南東側の一部には認められない。北西周溝を基準とする住居の向きは、真北に対し27°東へ傾く。規模は、遺存の良好な北東側周溝で4mを測り、周溝の幅は12~30cm、検出面からの深さは12cmである。遺存状況が良い北東側の周壁の、住居跡外側の壁は直立して立ち上がるのに対し、住居跡内側の壁は緩やかに立ち上がる。周溝の堆積土は、にぶい黄褐色土の単層で自然堆積土と考えられる。

P1は住居跡東隅に位置する小穴である。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸の長さが53cm、短軸の長さが40cm、床面からの深さが45cmである。壁面は急に立ち上がる。P1の堆積土は2層に分けた。1・2層ともに黒褐色土を基調としており、いずれもLIIに近似する土質であることから自然堆積土と判断した。底面の南西隅部分は、地山質土がわずかに堆積していた。

溝1は住居跡南東周壁からほぼ直角に住居内側に伸びている。規模は長軸が1m、幅が32cm、検出面からの深さは12cmである。堆積土は、周壁堆積土と同様である。

遺物(図49、写真91)

本遺構からは、繩文土器片が1点、土師器片が24点出土している。遺物のほとんどはP1から出土している。図化した遺物はいずれもP1の底面付近から出土しており、本遺構に伴う遺物と判断した。

図49-1は土師器壺の口縁部である。二重口縁となり、縦位に細密なヘラミガキが施され、口縁部には斜位の刻目が施される。図49-2は土師器鉢である。平底で体部は球形となり、口縁部は急に外傾する。外面はユビナデ後、ヘラミガキが施される。内面は口縁部から頸部にかけて横位のハケメ後、ユビナデを施す。赤彩は外面が底部を除く全面に、内面が口縁部から頸部にかけて施される。図49-3は土師器壺の底部片である。内面にヘラナデ調整が施される。

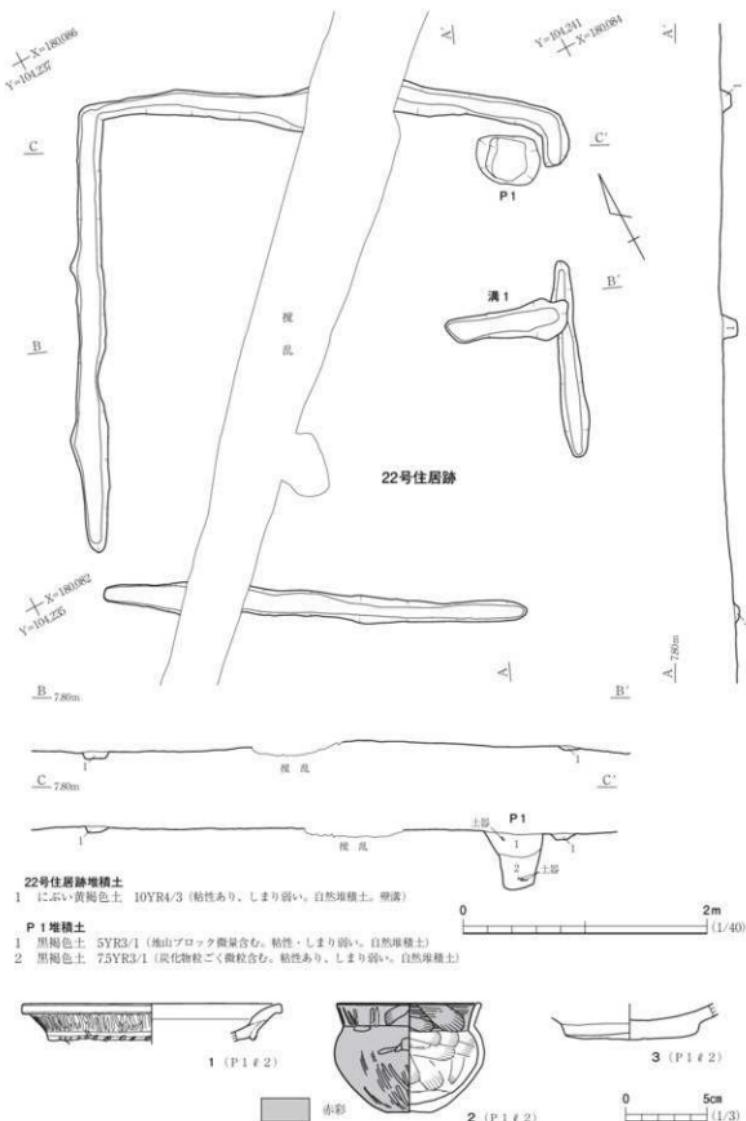


図49 22号住居跡・出土遺物

まとめ

本遺構は一辺4mの方形を呈する住居跡と推測する。住居跡東隅に位置するP1はその位置から貯蔵穴と推測され、南東周壁からほぼ直角に伸びている溝1は、調査例から間仕切溝と推測される。間仕切溝は貯蔵穴に近接して構築されており、この傾向は9号住居跡に共通する。本住居跡の帰属する年代については、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。
(佐藤)

28号住居跡 S I 28

遺構(図50、写真74・75)

28号住居跡は調査2区の中央部、C3-97グリッドに位置している。標高7.74mの平坦地に立地している。本遺構の北側には6号住居跡が、南西側には9号住居跡が分布している。検出面はLⅢ上面である。本遺構と重複する遺構はない。

本遺構の平面形はやや歪んだ方形である。北西壁を基準とする主軸の向きは、N-27°-Eである。規模は北西壁の長さが2.7m、南東壁の長さが2.96mである。検出面から床面までの深さは15cmを測る。壁面は北西壁が急に立ち上がり、それ以外の壁面は垂直である。床面は全体的に凹凸が目立つ。西隅から東隅へ向ってわずかに傾斜しており、その標高は7.5~7.62mである。掘形は幅広の浅い溝状を基調とし、住居の周壁に沿って構築される。しかし、北東壁の一部には掘形は認められない。幅は、広い箇所で90cm、狭い箇所では53cmとなる。住居跡床面から掘形底面までの深さは、2~8cmを測る。掘形の底面には掘削時の凹凸が多く確認できた。

遺構内堆積土は4層に分けた。 ℓ 1・2は炭化物を多く含む人為堆積土である。 ℓ 3は炉の周辺にのみ堆積しており、炭化物粒や焼土塊を多量に含む。 ℓ 4は黒褐色土で掘形を埋めた土である。

住居内施設として、炉1基、小穴1基、小段状の高まりを確認した。炉は住居北東壁際近くに構築されており、炉と住居跡壁の間は10cm程である。炉は炭化物や焼土粒塊を多量に含む土(ℓ 3)によって覆われていた。炉の平面形は梢円形で、規模は長辺が22cm、短辺が18cm、被熱の厚さは2cmを測る。炉には掘形があり、平面形は不整長方形で、規模は長辺が48cm、短辺が40cmで、深さは住居跡床面から5cmである。掘形の断面形は浅い皿状を呈する。炉の堆積土は褐灰色土の單層で炭化物粒、焼土粒を多様に含む、炉掘形の埋め土である。

P1は住居跡東隅に位置する不整梢円形の小穴である。住居跡掘形の覆土を掘り込んで構築されている。規模は一辺の長さが39cm、深さは住居跡の床面から20cmを測る。P1の堆積土は2層に分けた。 ℓ 1は褐灰色土で、住居跡内堆積土 ℓ 2の土質に近似することから、住居を埋めた際に共にP1も埋められたと考えられる。 ℓ 2は橙色粘質土である。粘性の強い土で、P1の底面を埋めている。

小段状の高まりはP1に隣接して位置し、掘形に埋められた土である ℓ 4を盛土して構築している。盛土の断面形は緩い台形状で、高さは10cmから5cmと浅い。

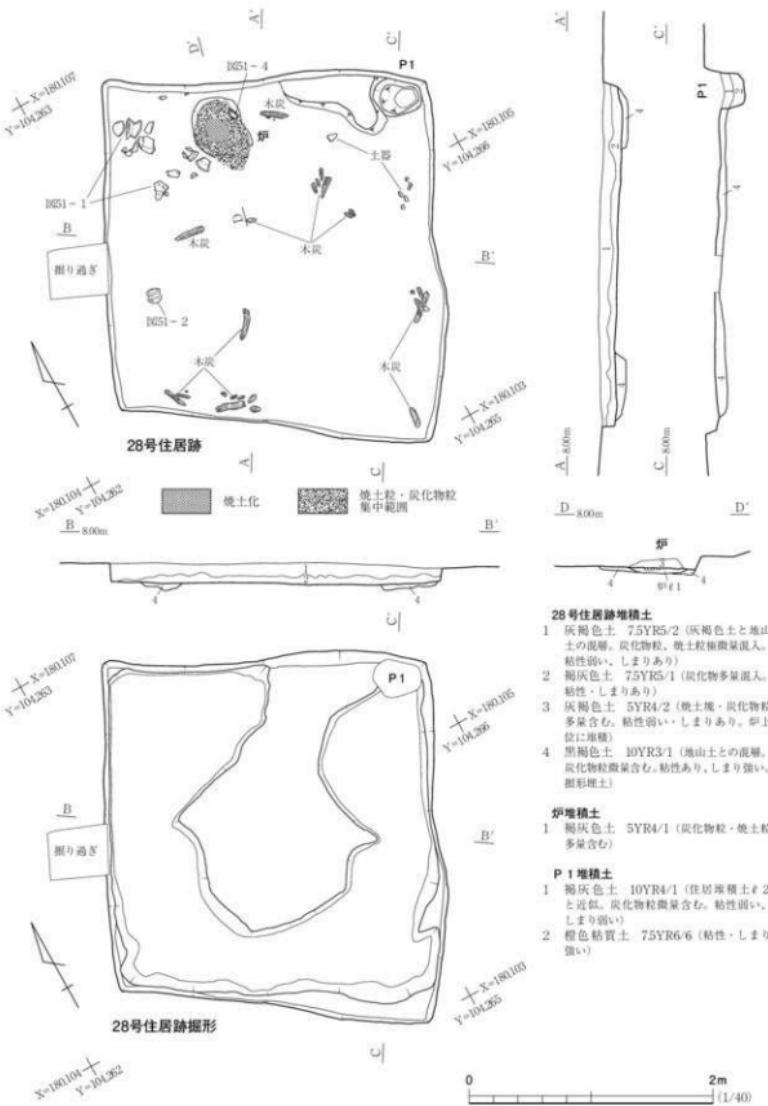


図50 28号住居跡

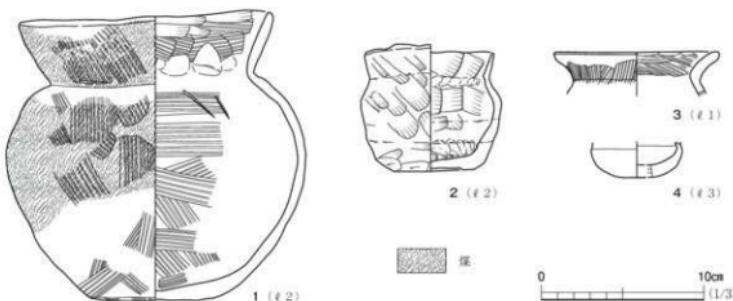


図51 28号住居跡出土遺物

遺 物 (図51、写真91)

本遺構からは、土師器片が113点、焼成粘土塊5点が出土した。出土位置は図50に図示した。図51-1は土師器壺である。平底で体部は球胴状を呈し、口縁部は急に外傾する。内外面ともにハケメ調整を施す。煤が体部最大径を中心として、帯状に付着している。図51-2はミニチュア土器の壺である。完形で出土している。底部は平底で体部上位が最大径となり、口縁部は急に外傾する。外面は底部をヘラケズリ、体部から口縁部に斜位のユビナデを施す。図51-3は小型の土師器壺で、頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部は外反しており、内外面ともにハケメを施す。図51-4は小型平底の土師器鉢の底部から体部にかけての破片である。体部は半球状になる。

ま と め

本遺構は一辺2.7~3m前後の方形を呈する小型の住居跡である。溝状の掘形を持つ。東隅に位置するP1は調査例から貯蔵穴と推測した。北東壁際には掘形のある炉が敷設されている。北東壁の東隅寄りには小段状の高まりがあり、掘形と同様の土で盛土している。帰属時期は遺構内の出土遺物から、古墳時代前期の所産と考えられる。

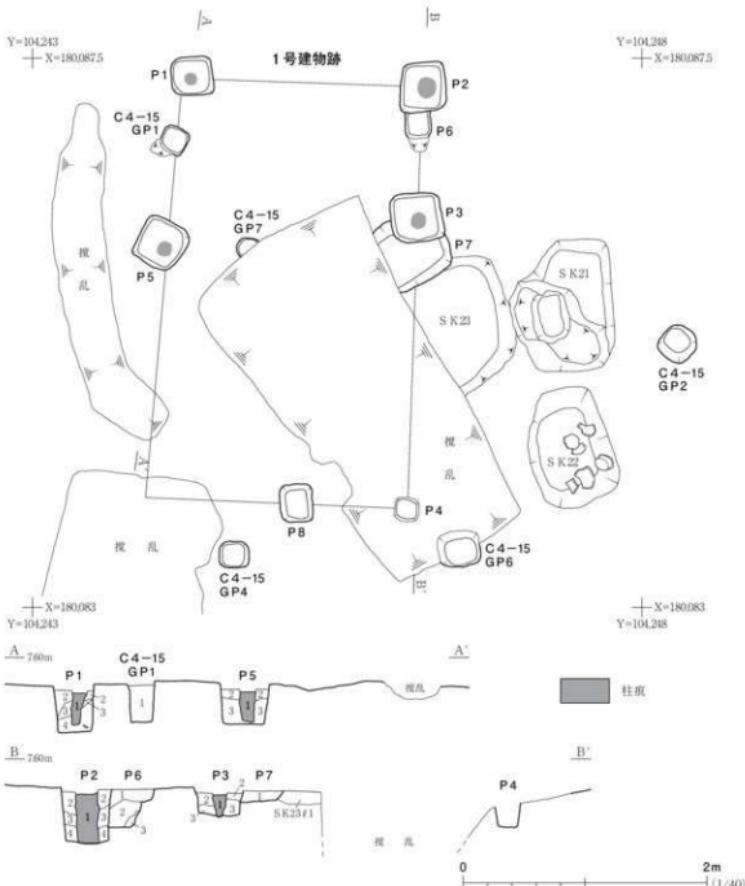
(佐藤)

第3節 掘立柱建物跡

1号建物跡 S B 01 (図52、写真76・77)

1号建物跡は調査2区の西部、C4-15グリッドに位置する。周囲は平坦地で、その標高は7.4mである。本遺構の東側には21~23号土坑が接するように分布する。P7との重複関係から、本遺構よりも23号土坑が古いと判断した。遺構検出面はLⅢ上面である。

1号建物跡は後世の搅乱によって柱穴が失われているが、柱穴の配置が不揃いである。東側柱列を主軸とした建物の向きは、ほぼ真北になる。本建物跡の北側柱列P1-2は1間で、その距離は1.95mである。東側柱列P2-4は2間で、その距離は3.46mである。南側柱列は南西隅の柱穴を欠くが、中央にP8が配され2間となる。柱間距離は、南側柱列のP4-8が0.9m、東西柱列P

**P 5堆積土**

- 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物ごく少量含む)
- 褐色粘質土 10YR4/4 (炭化物ごく少量含む)
- 黒褐色土 10YR2/3 (黄褐色土粒少量、炭化物ごく少量含む)
- 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物ごく少量含む。黒色土と黄褐色土の混土)

P 2堆積土

- 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物ごく少量含む)
- 黒褐色土 10YR3/2 (炭化物ごく少量含む。黄褐色土塊と黒色土の混土)
- 褐色土 10YR4/4 (黒色土少量、炭化物ごく少量含む)
- 褐色土 10YR4/4 (炭化物ごく少量、黒色土塊含む)

P 3堆積土

- 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物ごく少量含む)
- 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物・黄褐色土塊含む)
- 褐色土 10YR4/4 (炭化物ごく少量含む)

P 6堆積土

- 黒褐色土 10YR2/2 (機土壤多量、炭化物ごく少量含む)
- 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物ごく少量含む)
- 褐色粘質土 10YR4/4 (炭化物ごく少量含む)

P 7堆積土

- 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物ごく少量、黄褐色土塊含む)
- 黒褐色土 10YR3/2 (炭化物・黄褐色土粒ごく少量含む)
- 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物ごく少量、黄褐色土塊含む)

図52 1号建物跡

1-5が1.38m、P2-3が1.1mと狭い。また、本建物跡の南半部は柱間の間隔が広く、東側柱列のP3-4が2.34mを測る。

各柱穴の平面形は方形を基調とする。規模はP3が一辺40cmで、P4が最も小さく一辺が20cmである。柱穴の深さは、検出面から20~45cmである。また、P2・3には柱穴の重複が認められ、建て替えの痕跡と判断した。柱穴の堆積土は柱痕跡と掘形埋土に分けられる。P1~3・5では柱痕跡が認められ、柱材として直径10cm前後の丸太材が用いられたことが分かる。掘形埋土は、黒褐色土とLⅢを起源とする黄褐色土が混ざった土で、硬く縮まる。

本建物跡P1・2から土師器の小破片が合計6点出土した。磨滅した小破片のため図示していない。

1号建物跡は柱穴の配置や柱間距離に規格性が認められない。本遺構の年代は、重複関係から23号土坑よりも新しい時期で、概ね9世紀前半代と考えている。
(福田)

第4節 土器焼成遺構

土器焼成遺構は3基確認されており、すべて調査2区の9号住居跡内から検出された。9号住居跡が完全に埋まりきっていない浅い窪地を利用して構築したものと考えられ、土層的には9号住居跡ℓ1に覆われており、ℓ2以下の覆土を切って構築される。9号住居跡の南西壁際中央に1号土器焼成遺構、南隅に2号土器焼成遺構、北西壁際中央に3号土器焼成遺構がある。近接して位置するため重複の可能性があるが、遺構確認の段階ですでに覆土の大半を除去していたため不明である。出土遺物の検討からは、概ね同時期に構築されたものと考えられる。9号住居跡ℓ1中には、焼成失敗品とみられるロクロ整形の土師器杯、筒形土器、甕、焼粘土塊、伏焼に伴う焼けた被覆粘土と考えられる粘土塊などが多数含まれており、各焼成遺構に属する遺物が一括されてしまっているとみられる。

なお、調査の段階でそれぞれの遺構を、10号土坑、17号土坑、18号土坑としたため、報告にあたり調査時の遺構略記号と番号を変更せずに、これを踏襲することとした。ただし、10号土坑(SK10)→1号土器焼成遺構(SK10)、17号土坑(SK17)→2号土器焼成遺構(SK17)、18号土坑(SK18)→3号土器焼成遺構(SK18)となる。

1号土器焼成遺構 SK10 (図53・54、写真78~80・92)

本遺構は9号住居跡の南西壁際中央、壁際から住居跡中央へと低くなる緩斜面に位置する。9号住居跡を切り、北西に2号土器焼成遺構が近接している。住居跡覆土を掘り下げてしまったため、上端は不明な部分が多い。平面形は不整楕円形で、規模は長径2.30m、短径は確認できた部分で1.96m、深さは41cmである。中軸線の方向はS-33°-Wで、9号住居跡の中軸線に類似する。底面は概ね平坦で、中央の不整楕円形部分が一段深く掘り下げられる。比高は5~10cmである。立

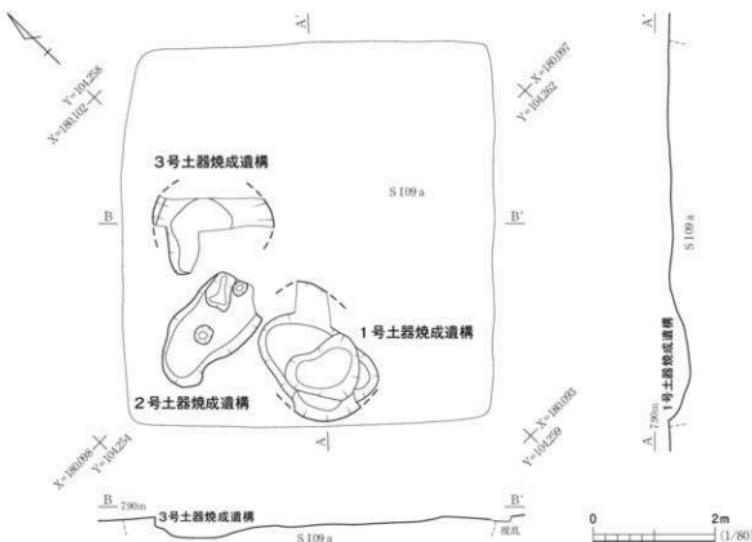


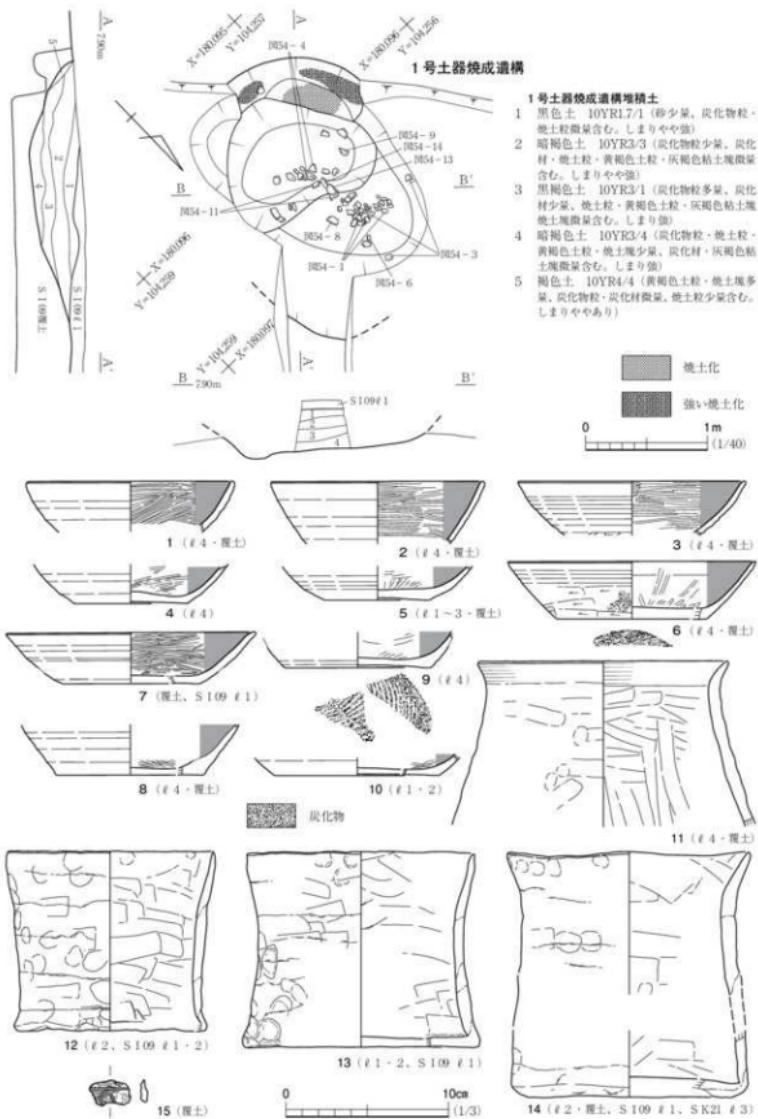
図53 1～3号土器焼成遺構

ち上がりは全体に緩やかで、図下端である北東部の傾斜は最も緩く、相対する図上端の南西部が急な立ち上がりとなっている。南西部の壁面は被熱のため赤変しているほか、壁面直下の底面もわずかに赤変している。覆土は自然堆積で5層に分層でき、 ℓ 2～4には焼成遺構の天井部とみられる灰褐色粘土塊が含まれる。 ℓ 3は炭化物粒を多く含む層である。

遺物は ℓ 3・4に多く、被熱のためか剥離するように割れているものが目立つ。色調の異なる破片が接合した個体もあり、欠損後被熱したものの多いとみられる。 ℓ 3底面ないし ℓ 4上面付近では、細かく割れた破片が一面に敷かれたように出土する部分がある。出土遺物は多く、口クロ整形の土師器杯と筒形土器が主体で、甕がわずかに含まれる。筒形土器と杯には焼けハジケによる破片もあり、多くは焼成失敗品を見てよからう。底部で個体数を確認すると、図化した個体を含め杯13点、甕1点、筒形土器3点で、焼粘土塊は図化した1点のみである。

図54に図示した遺物は土師器杯10点、土師器甕1点、筒形土器3点、焼粘土塊1点の計15点である。出土層位から見ると、上層 ℓ 1・2出土が図54-5・7・10・12～14、下層 ℓ 3・4出土が図54-1～4・6・8・9・11・15である。筒形土器片は ℓ 1・2に多い。杯は各層から出土するが、層位ごとの製作技法や形態の類似性、層位間の違いはなさそうである。

杯はすべてロクロ整形である。内面は黒色処理とみられるが、被熱により褐色になってしまっているものもある。内面黒色と褐色の破片が接合するため、破片となったあとに被熱しているのだろう。底部外面に線刻があるものは2点あり、図54-6は直線の線刻1本、図54-9は線刻とミガ



キ類似の直線が十字形に描かれる。底部切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りがあり、図化以外も含めると回転ヘラ切り6点、回転糸切り5点、不明2点である。図54-3は外面体部下半に、図54-6は外面体部下半から底面にケズリが施される。ともに外面のロクロメが著しいため、それを除去しようとしたものとみられる。内面ミガキは幅1~2mm程度の細かく丁寧に周方向に施すものがほとんどで、ミガキの単位がつかみにくいものもある。やや粗い放射状のミガキは図54-6のみ、図54-5・9は体~底部に放射状のち部横方向の幅広なミガキが密に施され、底部切り離しは糸切りである。図化した10個体の法量からは、器高が高く口径・底径が小さい図54-1~5、器高が低く口径・底径が大きな図54-6~10に大別することも可能である。前者は口径12.6~13.9cm、底径6.6~7.0cm、器高は3.9cm以上、後者は口径15.2cm、底径8.4~10.1cm、器高3.2~3.6cmである。ただ、こうした法量上のまとまりと製作技法や切離し方法などの相関関係は見いだせない。

図54-11は土師器甕である。胎土は杯や筒形土器と異なる白っぽい灰褐色を呈する。④から出土した。

図54-12~14は筒形土器で胎土は3点とも類似している。すべて作りは雑で全体に歪みがあり、ヨコナデは施さない。外面は紐積み痕、粘土の皺、指頭圧痕が顕著に残るが、内面は密なナデにより平滑に仕上げられる。器高11~12cm、口径12~15cmである。 (谷中)

2号土器焼成遺構 SK 17 (図53・55、写真78・80)

本遺構は9号住居跡の南隅、壁際から住居跡中央へと低くなる緩斜面に位置する。9号住居跡を切り、南東に1号土器焼成遺構、北東に3号土器焼成遺構が近接する。住居跡覆土の掘り下げとともに壁を掘り下げてしまったため、東端では壁の立ち上がりが確認できない。平面形は楕円形とみられ、長径2.04m、短径は1.20mで、中軸線はS-88°-Wである。底面はこまかなる凹凸を持ち東



図55 2号土器焼成遺構

から西へと一定の傾斜で高くなつており、円形や不定形の浅い掘り込みが伴う。中央の円形の窪みはちょうど9号住居跡の主柱穴の位置にあたり、主柱穴の柱痕覆土が軟弱なために低くなつてしまつたものと考えられる。壁は丸みを持ってやや急に立ち上がる。現状での深さは20cmだが、9号住居跡確認面から測ると38cmである。底面の標高を比較すると1号土器焼成遺構より3cm高く、3号土器焼成遺構より3cm低いだけであり、深さは3基ともほぼ同様と見てよかろう。平面図の上端となる西端壁面には被熱による赤変が確認できるが、被熱の程度は弱い。覆土は自然堆積で焼土や炭化物を含む4層に分層でき、ℓ1・3に小さな焼土塊が含まれる。焼土層や炭化材層はないが、全体の層序や含有物などの点では1・3号土器焼成遺構と類似する。覆土中からは焼成失敗品とみられるロクロ整形の土師器杯片がわずかに出土するのみで、図示できる遺物はない。遺物量は3基中最も少ないが、これは遺構の存在を認識するのが遅れ、遺物が9号住居跡出土遺物に含まれてしまつたためとも考えられる。

(谷 中)

3号土器焼成遺構 SK 18 (図53・56、写真78・81・92)

本遺構は9号住居跡の北西壁際中央、壁際から住居跡中央へと低くなる緩斜面に位置する。9号住居跡を切り、南西に2号土器焼成遺構が近接する。住居跡覆土を先に掘り下げてしまつたため遺構の状況を確認できない部分が多いが、平面図上端となる北西部が幅広く直線的になる楕円形と推定される。中軸線はN-55°W、規模は長径2m、短径は確認できる部分で1.25mで底面は緩やかな丸みを持ち、中心から北西寄りが最も低い。深さは36cmである。壁は、直線的な平面形を示す北西部では段を持って立ち上がり、上半はオーバーハング気味となる。これ以外はなだらかで、北西部に相対する位置となる南東部が最も緩く傾斜する。被熱部分はない。覆土は自然堆積で4層に分層でき、北西部には焼土が目立つ。ℓ3に少量の炭化材と焼土塊が、ℓ3・4には焼成遺構の天井部とみられる灰褐色粘土塊が含まれるなど、1号土器焼成遺構との類似点が多い。粘土塊の量は1号土器焼成遺構より少ない。

遺物はℓ3に多く、被熱のためか剥離するように割れているものが目立つ。破片数としては土師器壺や筒形土器主体で、ロクロ整形の土師器杯は少ない。土師器壺片はすべて白っぽい灰褐色を呈しており、杯や筒形土器などの胎土とは大きく異なる。焼粘土塊は多く、図示したものを含め7点出土した。筒形土器は図化以外に1個体ある。各器種に認められる特徴は、1号土器焼成遺構出土遺物と酷似している。

図示した遺物は土師器杯3点、土師器高台付杯1点、土師器壺2点、須恵器壺1点、筒形土器2点、焼粘土塊2点の計11点である。出土層位から見ると、ℓ2出土が土師器壺(図56-6)と須恵器壺(図56-7)と筒形土器(図56-8)、ℓ3出土が杯(図56-1~3)、土師器高台付杯(図56-4)、筒形土器(図56-9)である。覆土下層に杯類が多い点は1号土器焼成遺構と類似するが、筒形土器が上層に偏ることはない。

図56-1・2の土師器杯は内面黒色処理と考えられるが、被熱により褐色になつている部分も

多い。ともにロクロメは目立たず、底部は手持ちヘラケズリが施される。1は体部下端に糸が当たったような痕跡があり、糸切り離しの可能性がある。内面調整は1がやや雑で幅広な放射状のミガキ、2は単位がつかめないほど丁寧で密なミガキである。底径は1が7.0cm、2が8.5cmである。図56-3は土師器杯で底径11.4cmと大きく、底部切り離しは回転ヘラ切りである。図56-4は土師器高台付杯の脚部である。

図56-5・6は土師器甕で、5はロクロ整形された口縁部、6は縦位のヘラケズリが施された底部である。

図56-7は須恵器甕の体部片で、外面にはタタキメがみられる。

図56-8・9は筒形土器である。雑な作りで全体に歪みがあり、ヨコナデは施さない。外面は紐積み痕、粘土の皺、指頭圧痕が顕著に残るが、内面は密なナデにより平滑に仕上げられる。焼粘

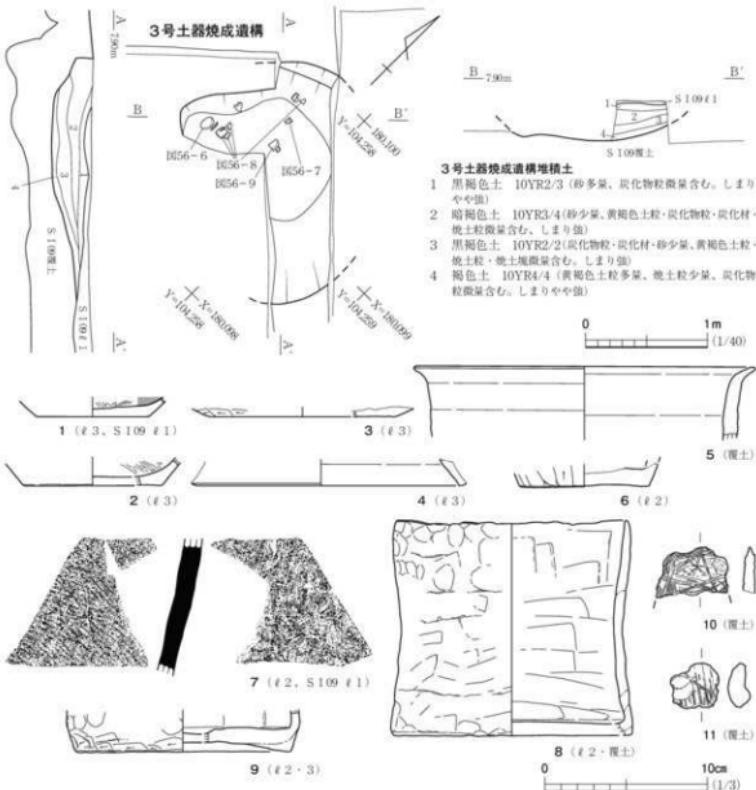


図56 3号土器焼成遺構・出土遺物

土塊はともに南西側覆土中出土で、表面に残る植物繊維の圧痕が著しい。

(谷 中)

第5節 土 坑

3号土坑 SK 03 (図57、写真82)

3号土坑は調査2区の中央部、C 3 - 98グリッドに位置する。本遺構は保存地区の設定前に調査を開始していたため、例外的に完掘まで調査を行った。本遺構は標高7.6m平坦面に立地する。検出面はLⅢ上面である。本遺構に接して11号住居跡が分布する。

平面形は方形である。規模は一辺の長さが1.27mで、検出面からの深さは31cmである。底面の北東側には平面形が不整形の浅い掘り込みがあり、規模は長軸82cm、底面からの深さは12cmである。

遺構内の堆積土は5層に分けた。 ℓ 1 ~ 4はレンズ状の堆積を呈すことから自然堆積土と考えられる。 ℓ 5はにぶい黄橙色粘質土で、不整形の浅い掘り込みを覆うように堆積していた。灰黄褐色粘質土をブロック状に含んでいることや、締まりのある土質から人為堆積土と考えられる。3号土坑からは、土師器片が11点、焼成粘土塊が8点出土しているが、いずれも小片のため図化していない。

本遺構の具体的な性格は不明だが、底面の浅い掘り込みを粘質土によって埋めている点が特徴的である。帰属する年代は、底面から塙釜式期の土師器甕の小片が出土していることから、古墳時代前期の所産と考えられる。

(佐 藤)

8号土坑 SK 08 (図57、写真82)

8号土坑は調査2区の中央部、C 4 - 6グリッドに位置する。標高7.64mの平坦地に立地する。本遺構から東へ向かって1.7m付近に9号土坑が分布している。本遺構は20号住居跡の南東側と重複しており、これより新しい。検出面はLⅡ上面である。

平面形は梢円形と推察される。規模は長径95cmで、検出面からの深さは19cmである。遺構内の堆積土は3層に分け、いずれも黄褐色土を基調とし、レンズ状堆積を呈することから自然堆積と考えられる。本遺構からは、 ℓ 1から塙釜式期の甕の小片が出土しているが、20号住居跡からの流入と判断した。本遺構の具体的な性格は不明だが、年代は20号住居跡と重複し、これより新しいことから、概ね古墳時代前期以降の所産と考えられる。

(佐 藤)

9号土坑 SK 09 (図57、写真83)

9号土坑は調査2区の中央部、C 4 - 6グリッドに位置する。標高7.73mの平坦地に立地する。本遺構と重複する遺構は無いが、西へ向かって1.7m付近に20号住居跡、8号土坑が分布している。検出面はLⅡ上面である。

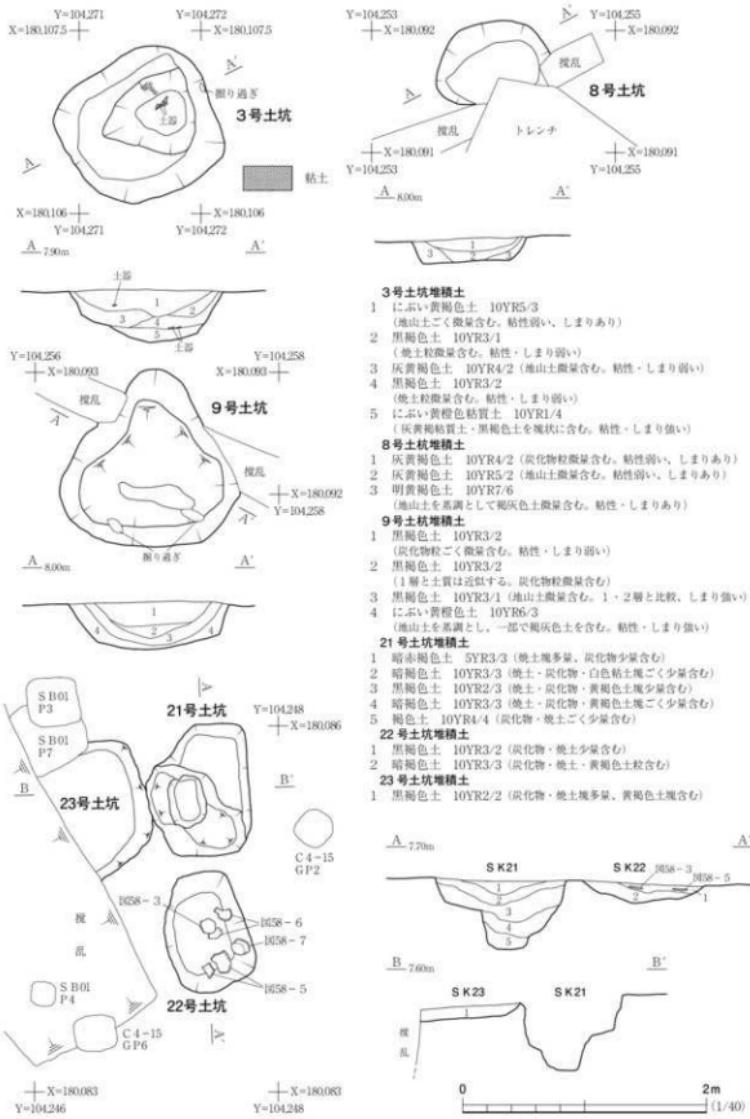


図57 3・8・9・21~23号土坑

平面形は不整形である。規模は北西－南東方向の長さが132mで、検出面からの深さは39cmである。底面の幅が小さく、断面形はすり鉢状となる。遺構内の堆積土は4層に分け、レンズ状の堆積を呈することから自然堆積と判断した。本遺構から遺物は出土していない。本遺構の具体的な性格や年代は不明である。

(佐藤)

21号土坑 S K 21 (図57・58、写真83)

21号土坑は調査2区の西部、C 4 - 15グリッドに位置する。標高7.4m付近の平坦地に立地している。本遺構は23号土坑と重複しているが、遺構間で重複する範囲が非常に狭く、新旧関係を明らかにできなかった。本遺構の南側に隣接して22号土坑が位置している。検出面はL II上面である。

本遺構の平面形は長方形を基調とするが、南西側の平面形は乱れている。規模は長辺の長さが104m、短辺の長さが52cmとなる。検出面からの深さは23cmで、南西側は1段低く掘り込まれており、深さは56cmとなる。周壁は急に立ち上がりっている。底面は北東側が平坦となるが、南西側は凸凹がみられる。遺構内の堆積土は5層に分けた。いずれも人為的な堆積土と考えられる。ℓ 1は暗赤褐色土で焼土を多く含み、ℓ 2は暗褐色土で白色粘土塊を含んでいる。

本遺構のℓ 3からは土師器片が77点、須恵器片が1点出土した。出土遺物の中でも特徴的なものを図58に示した。図58-1はロクロ整形の土師器壺である。体部のみ遺存しており、下半に縦位のヘラケズリを施す。図58-2は土師器壺の体部片であり、外面にタタキメを残す。

本遺構の性格については、焼土や粘土塊を多量に含む人為堆積土で埋められていることから、土器を含む廐棄坑と推測される。年代は出土した土師器から9世紀前半頃の所産と考えられる。

(佐藤)

22号土坑 S K 22 (図57・58、写真84・91)

22号土坑は調査2区の西部、C 4 - 15グリッドに位置する。標高7.4mの平坦地に立地している。本遺構の北側に隣接して21・23号土坑が位置している。検出面はL II上面である。

本遺構の平面形は、長方形を基調とする。規模は長軸95cm、短軸54cmである。検出面からの深さは浅く10cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、周壁から底面にかけての断面形は皿状を呈する。底面は北東側が平坦であるが、南西側へ向かってわずかに低くなっている。遺構内の堆積土は2層に分けた。いずれも人為的な堆積土と考えられる。ℓ 1が黒褐色土、ℓ 2は暗褐色土で、いずれも炭化物、焼土を含んでいる。

本遺構のℓ 1から土師器片が46点出土した。その中から遺存が良好なものや器種構成を考慮し、図58に示した。図58-3～5は土師器杯である。いずれもロクロ整形で3・5は底部からゆるく内湾気味に口縁部へ立ち上がり、内面はヘラミガキ調整後、黒色処理を行っている。4は底部のみ遺存しており、内面調整は行われていない。図58-6は筒形土器である。底部から直立して

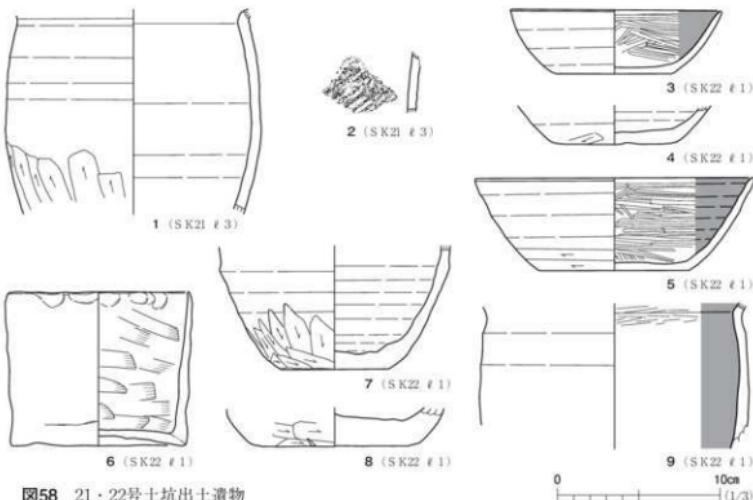


図58 21・22号土坑出土遺物

口縁部へ立ち上がる。口縁端部はユビオサエによって整形している。図58-7~9は土師器壺である。いずれもロクロ整形で、7・8は体部下端にヘラケズリを施す。9の内面はヘラミガキ調整後、黒色処理を施す。

本遺構の具体的な用途は不明だが、21号土坑と同様に廃棄坑と推察される。年代は出土した土師器から9世紀前半頃の所産と考えられる。
(佐藤)

23号土坑 SK 23 (図57、写真84)

23号土坑は調査2区の西部、C 4-15グリッドに位置する。標高7.3mの平坦地に立地している。本遺構と1号建物跡のP 7に重複関係がみられ、本遺構の方が古い。また、本遺構の東側上端で21号土坑が重複しているが、遺構間で重複する範囲が非常に狭く、新旧関係を明らかにできなかった。本遺構の南側に隣接して22号土坑が位置している。検出時は不整形の黒褐色土の平面範囲として確認した。

本遺構の西側は後世の搅乱で壊されているため、その平面形は不明瞭であるが、平面形は長方形と推測される。規模は長軸90cm、短軸は遺存値で80cmとなる。検出面からの深さは10cmである。周壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦で、わずかに南西側へ向かって傾斜している。遺構内の堆積土は、黒褐色土の単層で、炭化物・焼土塊を多量に含むことから人為的な堆積土と判断した。本遺構の ℓ 1からは土師器片が17点出土しているが、いずれも磨滅した小片のため図示していない。

本遺構の性格については、21・22号土坑と同様に人為堆積土が確認できることから廃棄坑と考

えている。年代は、出土した土師器の小片にはロクロ整形の甕がみられることから、9世紀前半頃の所産と考えている。

(佐藤)

第6節 その他の遺構と遺物

2号埋甕 SM02 (図59、写真85・93)

2号埋甕は調査2区の北東部、C4-9グリッドに位置する。本遺構は、序章第1節で記述した通り、圃場整備に伴う掘削範囲から除外され保存地区とされた範囲に位置する。調査の進捗上、保存が決定される前に調査が終了してしまったため、本項に掲載することとした。本遺構と重複する遺構はないが、西方には古墳時代前期に属する11・12号住居跡が分布する。遺構は標高75mの平坦地に立地する。遺構検出面はLIII上面である。

本遺構は、掘形内部に底部を人為的に打ち欠いた深鉢形土器を正立させた状態で埋設している。掘形壁面と埋設された土器の間隔は、検出面では5cmとなるが、土器の下半部と掘形壁面が接している。埋設する深鉢形土器の形状に合わせて掘形を掘り込んでいるものと推察される。

掘形の平面形は円形で、その規模は検出面で径35cm、底面で径12cmを測る。遺構の構築時の深さを窺う所見は得られていないため本来的な深さは不明であるが、調査時の検出面から掘形底面までの深さは13cmである。埋設土器内堆積土は、炭化物をわずかに含む黒色土で、やや縮まりに欠ける。土器内部の土を水洗して微細遺物の確認に努めたが、本遺構の性格を推定する遺物は確認できなかった。掘形内堆積土は炭化物をわずかに含む暗褐色土である。

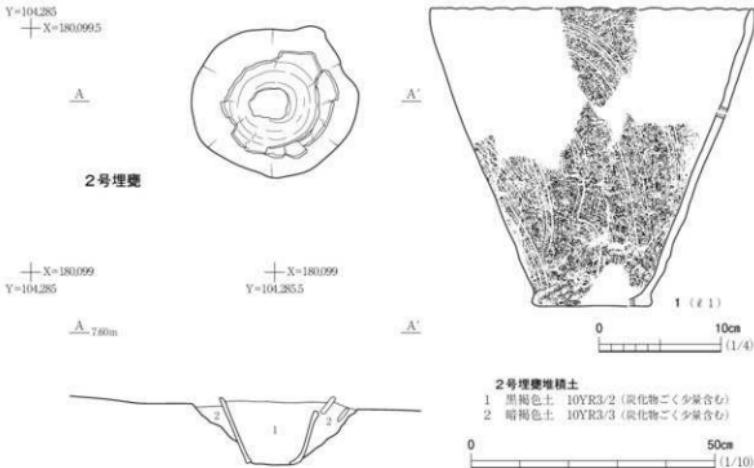


図59 2号埋甕・出土遺物

埋設土器(図59-1)は、底部から口縁部に向かって大きく開く深鉢形をなす。口唇部には幅広で浅い刻みが施される。体部には、3~4本歯の櫛歯状施文具を用いて、縦位の弧文や流水文が描かれている。

底部を打ち欠いた土器を埋設する特徴から、從前までの調査成果や研究との比較検討からすれば、土器を用いた墓と考えられる。しかし、今回の調査においては、埋設された土器の内部や掘形の内部に副葬品などの遺物が出土していないことから、本遺構を墓とするだけの積極的な所見は得られていない。本遺構の年代については、埋設された土器の文様などの特徴から、縄文時代後期後半頃に属すると推察される。

(福田)

4号性格不明遺構 S X 04 (図60、写真85)

4号性格不明遺構は調査2区のC 3-97グリッドに位置する。標高7.2~7.3mの平坦面に立地する。本遺構と重複する遺構はないが、南西方向に28号住居跡が近接している。検出面はL II上面である。本遺構の遺存状況は極めて悪く、全容を確認することはできなかった。遺存する平面形は楕円形で、長さは長径80cm、検出面からの深さは6cmである。西側の壁は急に立ち上がるのに対し、焼土範囲側は壁を持たない。堆積土は褐灰色の単層で、炭化物粒、焼土粒を含む。焼土範囲は、底面に盛土し構築されており、その範囲が被熱硬化している。平面形は楕円形で、長さは長軸で20cm、厚さは5cmである。本遺構からは、土師器片が1点出土しているが、小片のため図化をおこなっていない。本遺構は、遺存状況が悪いことや、出土遺物に乏しいことから明確な性格や年代は不明である。

(佐藤)



図60 4号性格不明遺構

遺構外出土遺物 (図61、写真93)

調査2区の遺構外から、縄文土器片が30点、弥生土器片が1点、陶磁器片が12点、石器が4点、土製品が1点、土師器片が232点、須恵器片が2点出土した。調査2区で確認した遺構群が古墳時代前期を中心とするものであるため、遺構外出土遺物の大半が古墳時代前期に属する土師器である。これらの遺物は遺構検出作業によって出土したもので、遺構検出面を覆うL II層の下部から出土した。さらに、遺跡の現状が宅地や畠地であったため、遺構検出面が既に削平され、遺物が小破片となつたものが多い。これら遺構外出土遺物の内、形状が把握できたものを図61に示した。

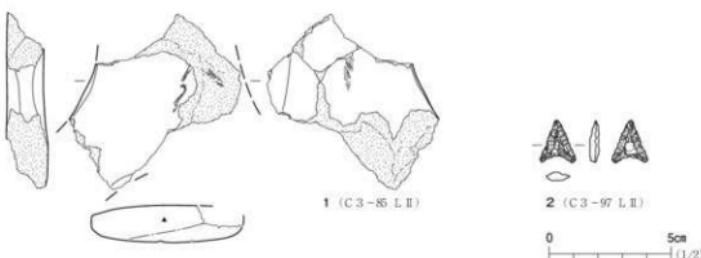


図61 調査2区遺構外出土遺物

図61-1はC3-85グリッドにおいてL III上面の遺構検出作業で出土した。遺物の形状から、土偶の胴部破片と推察される。側縁部の遺存状態が悪い破片であるため全体的な形状は不明であるが、土偶の下半身を表現したものであろう。表裏面とも平滑になる板状の土偶で、厚さは1.5cm程度である。形状は腰部で括れて脚部が大きく開くと推察される。外面はミガキが施され、平滑に整えられている。その他に乳房などの表現は観察できない。また、胎土に纖維混和痕が認められる。本遺物と関連する遺構群は検出されていないだけでなく、縄文土器や石器などの遺物の出土は極めて希薄である。一方、調査2区から北側に150m離れた調査1区と平成26年度に調査を実施した県道部分の発掘調査区において、縄文時代前期前葉から中葉にかけての遺構や遺物が比較的まとまって確認されている。本遺物の年代について、これら遺構群との関連を評価すれば、概ね縄文時代前期頃の所産と考えられる。

図61-2は小型の凹基無茎石鏃で、丸みを帯びた抉り込みのある基部である。石材は鉄石英である。
(福田・植松)

第3章 総括

第1節 旧石器・縄文・弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で旧石器・縄文・弥生時代の遺構が主に発見された調査1区は、五畠田・犬這遺跡の中の北西側の部分にあたる。ちょうど遺跡が立地する段丘の縁辺に沿って東西にトレンチを入れることになる。また、今調査に先駆けて平成26年度(2014)の県道北泉小高線工事に伴う発掘調査(以下、県道調査と略す)では、遺跡範囲の概ね中央部を、東西16m南北約180mの範囲にわたり調査が行われた。この他、平成5年には高圧電線用鉄塔建設に伴い、原町市教育委員会によって県道調査の南西側に隣接して調査(11m×11m。以下、市調査と略す)が行われた。これらはいずれも、部分的な調査ではあるが、これにより本遺跡の古い段階の様相が徐々に明らかになってきている(図62)。

旧石器時代 今回の調査で最も古い遺物と考えられる物は後期旧石器時代後半のナイフ形石器である。調査1区の包含層中より1点出土している。これは、関東地方などで所謂切出形ナイフなどと呼称される小型のもので、本遺跡の所在する浜通り地方北部では初めて確認されたもので、県内では郡山市弥明遺跡などに類例がある。なお、当地域において当該期の遺跡は、概ね標高7m以上の段丘上や舌状の丘陵上に立地している状況が垣間見られることから、周辺遺跡などからの流れ込みの可能性も推測される。

縄文時代 縄文時代では、前期前葉～後葉にいたる各時期の資料が認められた。これは調査1区を中心としているが、前述した県道調査でも一部同様の時期(大木2a式期)の遺構や遺物が確認されているが、県道調査では未発見であったその前後の時期の遺物も今調査では一定量確認されているため、縄文時代前期の時間軸の中での継続的な空間利用などが窺えた。以下に前述の各調査や、同じ流域内の周辺遺跡も合わせて本遺跡の特徴とその変遷を整理していく。

本遺跡の縄文時代で最も古相のものは、遺跡西側の試掘調査で出土した早期中葉前半の日計式の土器片(県教委2015)であり、原町地域では押型文系としては初出の資料である。次に早期中葉後半では、県道調査で田戸下層式土器が極わずかに出土しているが「集落を形成したかまでは不明」(山元2016)である。今回の調査で早期末葉が若干確認されたにすぎない。

本遺跡で主体となる前期の特徴では、①周辺遺跡では数少ない縄文時代前期前葉から後葉までと存続期間が長い遺跡である。②堅穴住居跡や土坑はあるものの、玦状耳飾りの出土などから、逆に一般的な拠点的集落とはやや様相が異なる状況が推測できる。③前期前葉の大木2a式期の時期は縄文海進期にあたり、当地域においては遺跡が各河川の上～中流域に立地している傾向が見られるが、本遺跡は概ね当時の海岸線沿いに立地する数少ない遺跡のひとつである、ことなどが挙げられる。



図62 五畠田・犬道遺跡の縄文～弥生時代の遺構分布

具体的に①・②では、大木1式期では、当該期の遺物が関東系の関山I式土器も含め調査1区全体から一定量出土し、19号住居跡が標高6.2～6.4m前後の台地縁辺の谷頂部東側に出現している。縄文海進による汀線(標高5～6m)から、遺跡の北側には、遼浅の海底が広がっていたものと思われるため、外湾に面した微高地上に集落が展開していたものと思われる。

次段階の前期前葉の大木2a式期には、1区23・29号住居跡、6号土坑が谷頂部の東西にあり、県道調査1・3号住居跡、1号特殊遺構など遺跡範囲の北東側にも生活痕跡がみられる。

しかし、次期の前期前葉～中葉の大木2b・3式期には、調査1区や市調査のみで確認される。特に、大木3式期は、調査1区C2-51グリッド周辺や市調査に限られ、集落が縮小する傾向も窺えるが、市調査では完形品も多く遺跡が集約化した可能性もある。

最終段階の前期中～後葉の大木4・5式期は、調査1区谷頂部の東側に遺物が偏り、県道調査も含めた遺跡範囲の東側に集落がまとまる傾向がある。但し、大木4式期は主に県道調査で2号住居跡や一定量の遺物が認められ、大木5式期では調査1区の谷部周辺に若干遺物が出土するに留まる。なお、大木6式期も市史(市教委2016)では確認されるが、今調査を含め希薄なようである。

③で示した周辺遺跡との関連では、原町地域は前期初頭(花積下層式期・大木1式期)の遺跡分布の大半(15遺跡)は、新田川やその支流、太田川などの河川沿いの標高60～100mの中位段丘上に立地する。一方、本遺跡と同じ海岸沿いの遺跡は非常に少なく、新田川右岸の標高6～7mの中～低位段丘上に3遺跡(上浜佐前屋敷遺跡、南才ノ上遺跡、五畝田・犬這遺跡)が確認されるのみである。

前期前葉～中葉(大木2a・b・3式期)では、大木2a式期に遺跡数が新田川上流域や海沿いでも若干増加する(赤沼遺跡)。但し、次の大木2b・3式期では全体に遺跡数が減少し、上流域の遺跡でも前段階から継続する拠点的な集落(高松B遺跡、原遺跡)がある程度であり、海沿いでは五畝田・犬這遺跡のみである。

前期中～後葉(大木4・5式期)では、遺跡数は再び増加傾向にあり、新田川上流域の拠点的集落の周辺に遺跡が増え、海沿いでも五畝田・犬這遺跡に北接する南才ノ上遺跡などで、本遺跡に後続する大木5・6式期の遺物が一定量出土する。

全体的に、本遺跡は当地域では数少ない海沿いに面した遺跡で、新田川左岸の中～低位段丘に前期を通じて存続するものと推測される。但し、その性格は、出土遺物の特徴などから一般的な拠点的集落とは判断しづらく、長期間に渡り上流域の遺跡などから季節毎に海岸沿いに人々が集まるなどした一時的な集落跡と考えられる。本遺跡の南には、約6km離れて小高川流域の貝塚(片草・角部内南台貝塚)、約10km離れて井田川流域の貝塚(宮田・北原・浦尻貝塚)など当該期の貝塚が発達し、これらの貝塚は、その規模から海岸沿いの拠点的な集落といえる。一方で本遺跡が所在する太田川・新田川流域以北には、当該期の貝塚が発達しない。調査の制約上、不明な部分もあるが、本遺跡の性格も貝塚遺跡ではないことからも上記のような遺跡の性格が推測されるのではないだろうか。

その他時期が分かるものとしては、後期後葉～晚期前葉(瘤付土器段階～大洞B式期)に比定できる櫛描文の埋甕(SM02)が調査2区で単独で発見されている。縄文時代後期末頃に一時期墓域としての土地利用が知られる。

弥生時代 今回の調査では弥生時代の明確な遺構は未検出であった。ただ、県道調査区では中期後葉(桜井式期)の埋設土器(SM01)が出土しており、今調査でも当該期の土器・石器が主に県道調査区に近い調査1区の東側で一定量出土していることから、弥生時代の集落が遺跡東側へ広がっていることが窺える。

遺物

次に今調査で出土した遺物のうち主に縄文時代早期末葉～前期の土器の特徴を、当該期の先行研究(山内1929・1937、伊東1957、興野1967～1970)なども踏まえ、古い順に概述する。なお、周辺遺跡から出土した資料を含めて当該期土器の概要を図63に示した。

早期末葉の繩圧痕文土器は、福島県内では日向B式が著名である。口縁直下に隆帯を持たず、地文地に繩圧痕を施している。次の前期前葉大木1式土器以前の資料は連続爪形文とコンバス文を持つ資料で新潟県の布目遺跡が知られている。同時期の周辺遺跡では相馬市段ノ原B遺跡II-4群土器資料(吉田1995)などが類似する。次の大木1式土器は、羽状縄文やループ文が主体的で、それに伴い連続爪形文、円形竹管による刺突文などが文様構成に加わる。近年調査の新地町朴木原遺跡(三浦2014)などに類似する。また、今回の調査と南相馬市宮田貝塚出土で当該期の標識資料として著名な宮田Ⅲ群土器とも類似し、今調査の19号住居跡からは関山I式土器など関東北部からの移入も窺える。

前期前葉の大木2a式土器は、沈線によるコンバス文や、押し引き状の刺突によるコンバス文を主幹文様とする他、幅の狭い口縁部文様帶を隆線で区画し、口縁部文様帶として連続爪型文や刺突文で描くものが多い。地文には網目状撲糸文や葺瓦状撲糸文、木目状撲糸文などがある。これらは、南相馬市赤沼遺跡、会津美里町脣宮西遺跡、いわき市弘源寺貝塚、福島市宇輪台遺跡、同市獅子内遺跡、同市下ノ平E・D遺跡などで良好な資料がある。また、近年調査された南相馬市宮前遺跡でも多く見られ(大河原2005)、今回調査の類似土器群から「大木2a式土器新段階」(芳賀1984)と推測される。一方で、県道調査では、脣宮西遺跡と宇輪台遺跡の土器文様などの形態の差異(芳賀・植村1984)から、系統差の相違を指摘する(山元2015)。しかし、今回の調査では、コンバス文の存在は類似するが、平行沈線文や連続刺突文、地文の葺瓦状撲糸文や網目状撲糸文など新たな要素が多く、県道調査では判然としない内容となっている。これらのことから、大胆に推測すると大木2a式は古相の要素が強い県道調査の大木1式土器に近い段階と、今回調査の文様が多様化する新段階に分かれ、上記「大木2a式土器新段階」の証左となろう。

後続の大木2b式土器は、従来のメルクマールとなるS字状連鎖沈文を地文とし、口縁部に連続斜位沈線や刻み目をもつ隆帯(興野1968)から確認できるが、地域性が強く、次の大木3式土器との判別が難しいことも近年知られている(早瀬2008)。前段階の大木2a式土器や後続する大木3

式土器と比べると、文様のバリエーションが少ない。

大木3式土器は、半截竹管による押引き手法による連続爪形文、刺突文や平行沈線などで幾何学的な文様を描く。連続爪形文は、大木2a式土器にもあるが、大木3式土器と比べ、施文される間隔が広い(三浦2005)が、今調査は破片が多く判然としない。大木2b～3式土器の相双地区的調査事例は、飯館村上ノ台C遺跡、同村羽白C遺跡、同村柏久保遺跡、新地町新田遺跡、南相馬市角部内南塚貝塚、葛尾村広谷地B遺跡などがあり、本遺跡は、羽白C遺跡や新田遺跡に近似すると思われる。

大木4・5式土器は、粘土紐を波状(大木4式土器)から鋸歯状・梯子状(大木5式土器)に貼り付ける文様変遷(興野1968)、粘土紐の貼り付けが、1本紐を折り曲げる(大木4式土器)から短く貼り重ねる(大木5式土器)への変遷の指摘がある。今回調査では後者の出土量が多いが、県道調査では文様・貼り付けとも前者が多く、近年調査の南相馬市萩原遺跡などでも同様の差異が窺える。関東系の諸磕b式土器や浮島II式土器などは大木4式土器と概ね共伴していることから、時期や地域的な差異(小林2015)も窺える。

(植 松)

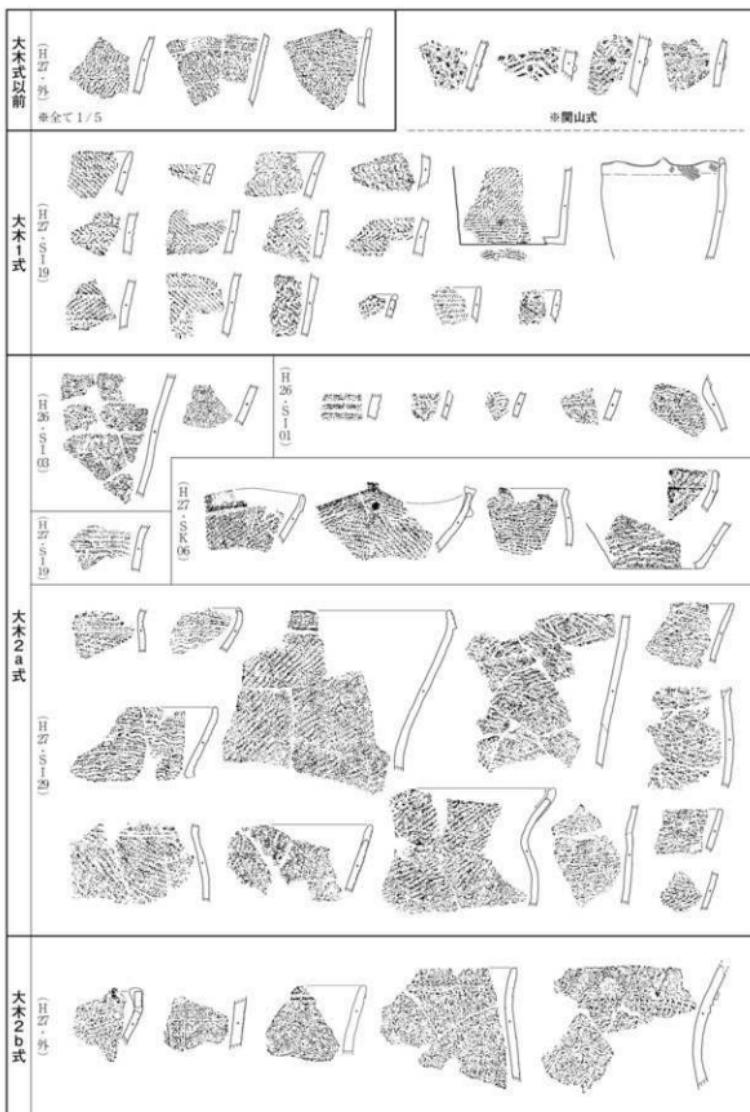
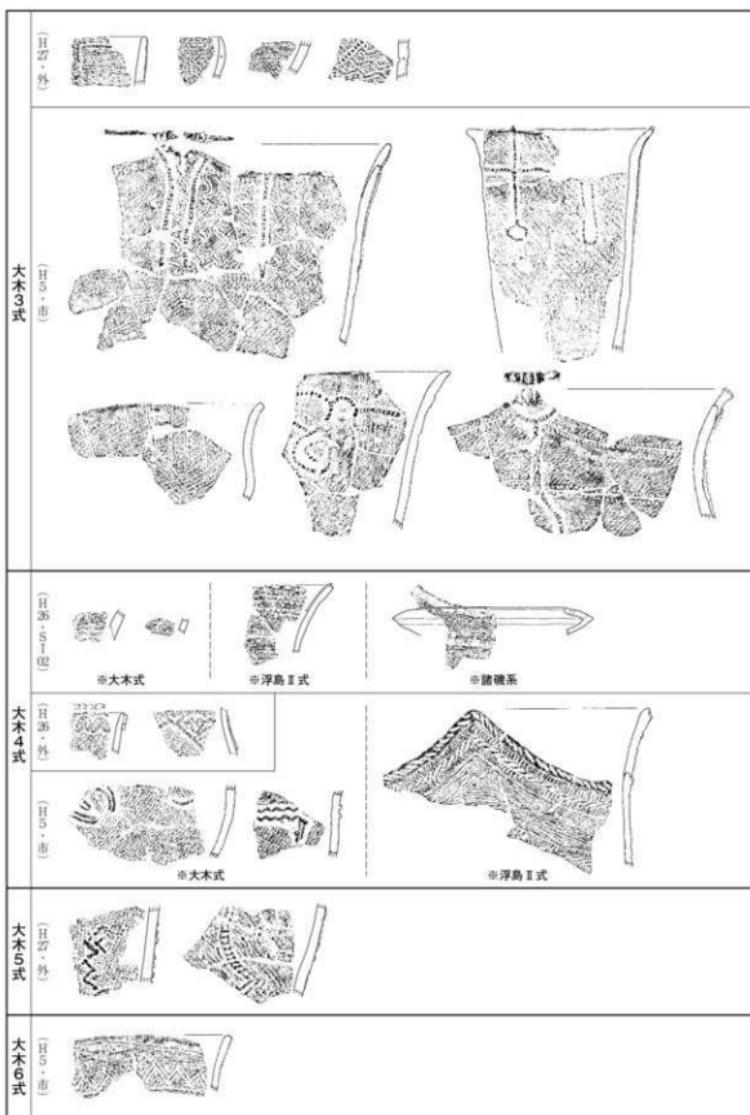


図63 五畠田・犬道遺跡出土の主な縄文時代前期土器群



* (H5・市)は平成5年の市教育委員会の調査出土土器。(H26)は県道北泉小高線関連調査出土土器を表す

第2節 古墳時代の遺構と遺物

遺構について

本調査では保存地区を含め古墳時代以降の住居跡を23軒確認しており、中でも出土した遺物の特徴から古墳時代前期に比定されるものは20軒である。なかでも古墳時代前期の住居跡は、調査2区からのみ確認された。住居跡は調査2区の中央から東部にかけて密集して分布している。また、北西部及び西部にも分布し、これより西方では確認できないことから、北西部及び西部から確認された住居跡は、集落の端部と推測される。本項では住居跡の規模と、住居内施設に着目し若干の考察を加えていく。

本遺跡における、住居跡の規模は3群に大別できた(図64)。大型は長軸が6m以上8m未満(9a・10・11・15・16号住居跡)、中型は長軸が4m以上6m未満(7・9b・12~14・18・22・25号住居跡)、小型は長軸が4m未満(4~6・17・20・24・28号住居跡)となる。

次に住居内施設に着目して特徴を挙げていきたい。

地床炉：床面に炉が付設される住居跡は9軒確認した。炉の位置は、住居の西壁に寄るもの(4・7・9b・20)と北東壁に寄るもの(5・17・28号住居跡)、中央に寄るもの(16号住居跡)がある。炉の構造は、炉に掘形を持つもの(4・9b・20・28号住居跡)と盛土状に構築するもの(5・7号住居跡)に大別できた。小型の住居跡であっても炉が付設されており、住居の機能を有していたことが理解できる。

貯蔵穴：床面に貯蔵穴と考えられる小穴を有する住居跡を8軒確認した。貯蔵穴はいずれも住居跡の壁際に1基ないし2基を付設している。北隅に位置するもの(20号住居跡)、南隅に位置する

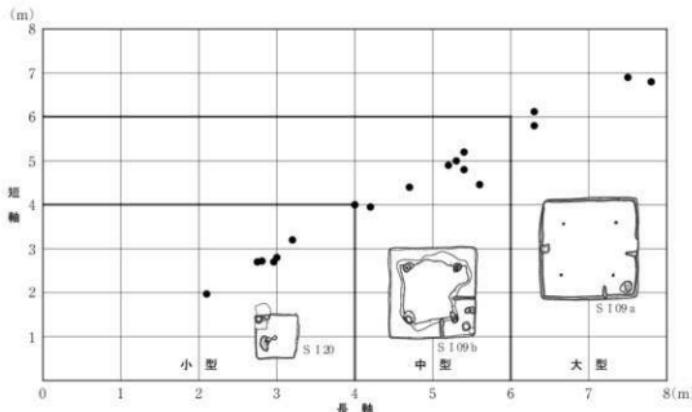


図64 住居跡規模

もの(4・6・9 b号住居跡)、東隅に位置するもの(7・22・28号住居跡)、南隅と西壁中央付近の2カ所に位置するもの(9 a号住居跡)がある。

柱穴：柱穴を確認した住居跡は9 a・b号住居跡の2軒のみである。方形に配された4本の主柱穴で、すべての柱穴に柱痕がみられる。

掘形：床面に掘形を持つ住居跡は6軒確認した。周壁の際を溝状に掘り込むもの(4・6・7・9 b・28号住居跡)と住居跡中央部を梢円形に掘り込むもの(5号住居跡)に大別でき、前者が多い傾向にある。

古墳時代前期に比定される住居跡は重複関係がみられるものではなく、住居内施設にも共通性がみられること、さらには出土遺物による年代幅も殆どみられないことから、ほぼ同一時期に営まれた集落跡と考えている。

住居規模を大・中・小型に分類した数値は、古墳時代前期の首長居館とされるいわき市折返A遺跡、同市菅俣B遺跡の数値(いわき市教委2003)と一致することから、福島県浜通り地方における古墳時代前期の住居規模に一定の共通性があると推測できる。また、菅俣B遺跡3号堅穴住居跡のように、一辺の規模が8 mを超える長大な住居跡は本遺跡では確認されていない。

本遺跡の中・小型住居跡は、住居内施設に炉と貯蔵穴を持ち、溝状の住居跡掘形を持つパターンが多くみられた。当該地域では、古墳時代前期の集落跡の調査例として高見町A遺跡が挙げられるものの、本遺跡でみられるような住居内施設のパターンはみられない。

また、9号住居跡は、次の特徴が指摘できる。①中型住居(9 b号住居跡)から大型住居(9 a号住居跡)へ、住居の拡張を行っている。②住居内施設の充実(柱穴、貯蔵穴、周溝、間仕切溝)。③住居覆土から玉類などが出土しており、祭祀的様相が窺えること。

以上のことから9 a・b号住居跡は、集落内でも有力者層の居宅であったと推測している。
(佐藤)

古墳時代前期の遺物

古墳時代前期の出土遺物は土師器・土製品・石製品・ガラス製品で、量は少ない。土師器の器種としては鉢、器台、高杯、壺、甕、ミニチュア土器があり、遺構ごとの器種の偏りが顕著である。全体に器台、高杯や赤彩土器は少ない。鉢は丁寧に調整された小型丸底形のほか、やや荒く整形される半球状の例が認められる。高杯は中実柱状の1点以外は、脚部がハの字状に開く。壺は中型直口縁のものと大型のものとがある。大型のものの口縁部は直口縁、折返し口縁、二重口縁などで、二重口縁に棒状浮文を貼り付ける例もある。20号住居跡の壺(図48-6)は胴部下半に孔が穿たれる。甕は丁寧に整形されるものと全体にやや歪みが目立つものがあり、前者は頭部「く」の字、後者は頭部が「く」の字ないし丸みを持つ。台付甕は2点のみである。6号住居跡では器種不明盤状の土器があるほか、定型的な台付甕とは異なる台部片が出土する。各器種に見られる特徴から、編年的な位置付けとしては辻秀人氏編年のⅢ-2期、青山博樹氏編年の塩釜2式新相に相当するもの

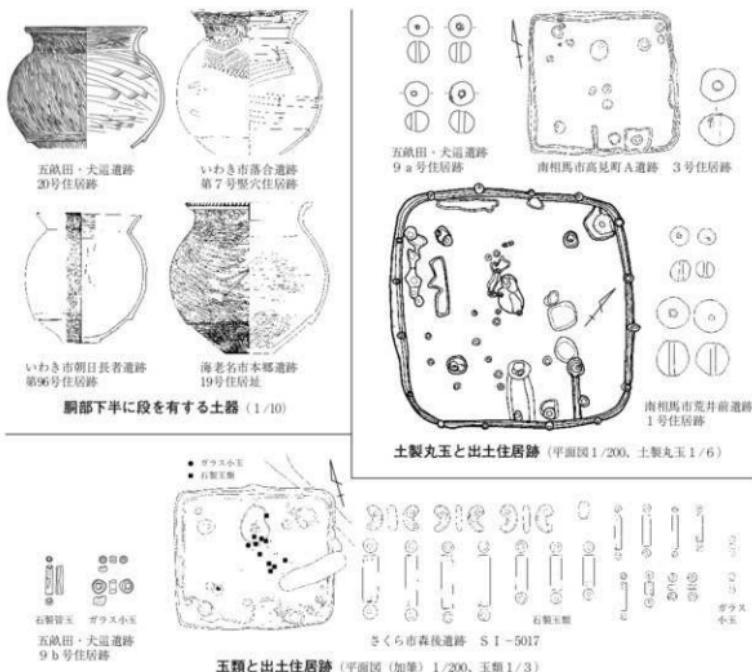


図65 古墳時代前期の関連遺物

と考えられる。

特徴的な遺物として、体部下半に粘土紐貼り付けによる段を持つ20号住居跡出土の壺(図48-3)がある。段は接合面に相当し、体部中位以上を積み上げる際に作出したとみられる。断面形は丸みを持ち、形状は口縁部の折返し口縁のそれに類似する。類例としては、いわき市落合遺跡7号竪穴住居跡出土の壺がある。幅広の折り返し口縁を持ち、体部下半の段は突出せずに作出される。細部の形状は異なるが、折り返し口縁を持ち球胴・広口である点は本遺跡例と類似する。この他、いわき市朝日長者遺跡第96号住居跡でも段を持つ土器が出土する。器種は壺とされ、外面全体はミガキ調整される。口縁部は短く「く」の字に屈曲し、段は直線的に断面三角形状に突出する。神奈川県の本郷遺跡で体部下半の段を持つ広口壺(辻秀人氏編年I-1期並行)の出土があり、こうした例が系譜を知る手掛かりとなろう。

土製丸玉 9a号住居跡から4点出土している。すべて完形で、2点は中央部南東壁寄りで床面からわずかに浮いた位置、もう2点は北隅の床面上5cmから、それぞれ10cmほどの距離を置いて出土するという特徴的なあり方を示す。出土状態からは、意図的に置かれたものと考えられる。4

点とも法量、胎土はほぼ同様で、近接して出土する各2点同士は法量や調整面で特に類似点が多い。時代や地域に隔たりがあるが、鳥取県青谷上寺地遺跡では弥生時代遺物に多数の土製丸玉があり、直径13cmほどの輪にしたヒノキの細枝に土製丸玉1点ないし2点が通されている。実用的な魚網錘などではなく、祭祀行為に伴うと考えられている。本遺跡出土例がそれと同様とは断定しえないが、表面や孔に擦痕などは認められないという観察結果や出土状態などからすると、実用の道具ではなく住居の廃絶に伴う祭祀行為に使用したものと考えたい。

周辺の古墳時代前期の遺跡では、新田川南岸の高見町A遺跡3号住居跡から土製丸玉1点が出土している。直径は4cmほどとやや大きい。住居跡は一辺6mと9a号住居跡と近い規模で、入口用の梯子穴と思われる小穴を伴う。時期的には本遺跡より若干先行する。新田川北岸に位置する荒井前遺跡では、1辺10mと大型の1号住居跡から4点出土している。法量は4点中2点が径約4cm、他2点が2~2.5cmほどである。出土状態は明確ではないが、法量からは2点ずつ一組になる様子が窺える。住居跡は4本柱穴、垂木穴、周溝、間仕切溝、梯子穴、炉、貯蔵穴を伴い、時期的にはこちらも本遺跡に先行するとみられる。本遺跡9a号住居跡、高見町A遺跡3号住居跡、荒井前遺跡1号住居跡とも大型であり、当地域における大型住居跡の廃絶に伴う祭祀行為の一様相とも言えよう。

なお、新地町山中遺跡でも調査区内から径2.4~3cm前後の土製丸玉が多数出土している。1号土坑、27号土坑、21号溝跡、24号溝跡で土師器とともに各1点、28号溝跡から手握土器や土製品とともに土製丸玉4点が出土している。時期的には本遺跡とほぼ同じか若干後とする。

この他、丸玉ではなく管状の土製品は南相馬市高見町A遺跡35号住居跡で1点、いわき市朝日長者遺跡第43号住居跡で1点、同第50号住居跡で2点出土している。

玉類 ガラス小玉と管玉が9b号住居跡から出土している。ガラス小玉のうち1点は覆土を篭にかけて確認したもので、出土地点はつかめない。管玉は南東壁際中央付近、ガラス小玉のうち1点は東隅からともに床面からは浮いた状態での出土で、互いに近接せず離れている点が特徴的である。覆土は人為堆積とみられるため、これら玉類は9b号住居跡を埋めている途中で意図的に混入させた可能性がある。住居の廃絶に伴う祭祀行為の結果と推測できよう。

ガラス小玉と管玉がともに住居跡から出土する例は県内では見当たらず、県外では栃木県でさくら市森後遺跡で調査されたS I - 5017がある。ここでは古墳時代前期の住居跡が7軒（うち1軒は建て替え）確認され、このうち2軒が一辺4m前後、5軒（うち1軒は建て替え）が6~7mとやや大型である。S I - 5017は大型の1軒で、壁際に幅の狭い一段高くなつた硬化面が巡るという特徴的な構造を示す。出土した玉類は石製勾玉3点、石製管玉12点、石製白玉2点、ガラス小玉2点で、北壁寄り中央にある炉から住居跡中央付近の床面直上から出土している。出土地点がまとまっている上に器種・点数とも豊富であり、9b号住居跡と様相が異なるが、住居跡廃絶に伴う祭祀の行為の一例ととらえられよう。なお、琥珀製勾玉はいわき市朝日長者遺跡第102号住居跡から1点出土している。

(谷 中)

第3節 平安時代の遺構と遺物

土器焼成遺構

古代の土器焼成遺構は3基あり、すべて9号住居跡の範囲内に近接して位置する。住居跡が完全に埋まりきらず浅い窪地状となった場所を選地したものと考えられ、最も低い住居跡中央部を前壁とし、そこから住居跡の壁へ遺構の長軸方向を向けるよう3基が放射状に構築されている。遺構確認の段階ですでに覆土の大半を除去していたため新旧関係は確認できないが、出土遺物から概ね同時期に構築されたものと考えられる。

本遺構の生産器種はロクロ整形の土師器杯と高台付杯、土師器甕、筒形土器と考えられる。遺構から出土するこれらの器種は、焼成失敗品のため特に筒形土器と杯には焼けハジケによる破片が多い。土師器杯は、器高が高く口径・底径が小さい一群(口径12.6～13.9cm、底径6.6～7.0cm、器高は3.9cm以上)と、器高が低く口径・底径が大きな一群(口径15.2cm、底径8.4～10.4cm、器高3.2～3.6cm)に大別できるが、こうした法量上のまとまりと製作技法や切離し方法などの相関関係は見いだせない。法量等から金沢地区製鉄遺跡群で設定された土器群中のV群、遺構期IV期(8世紀第4四半期～9世紀第1四半期)に相当すると考えられる。

遺構の平面形態は3基とも梢円形基調で、壁は奥壁が急傾斜で前壁はなだらかで、被熱赤変するのは奥壁側の一部のみである。望月精司氏による焼成遺構の形態分類(窯跡研究会1997)ではB I b類となる。これは、B類は9世紀以降普及・展開するとした望月氏の指摘にも沿う。3号土器焼成遺構は奥壁がやや直線的となるため、逆台形ないし無花果形で前壁を持ち、前壁が緩く立ち上がる形態とされるA II a 1類とも分類できる。表面に植物圧痕が顕著な焼粘土塊の出土から、遺構上面を稲わらなどの植物と土で覆う「覆い焼き」による焼成方法が想定される。

土器焼成遺構は県内各地で確認されており(菅原1997)、堅穴住居跡内に構築された例としては、いわき市大久保F遺跡23号土師器窯跡、楢葉町鍛冶屋遺跡土師器焼成坑がある。大久保F遺跡23号土師器窯跡は方形を基調とした形状で、南向き緩斜面に位置する住居跡の北西壁際を奥壁とし、斜面下方に向けて解放する形をとる。完全に埋まりきらない住居跡を利用し、地形と覆土の傾斜により奥壁を高く、前壁を低くなるよう作られている。土坑、住居跡とも9世紀第4四半期とされている。楢葉町鍛冶屋遺跡では、遺構形状は不明だが2軒の堅穴住居跡の覆土中に9世紀前葉～中葉の土器焼成遺構が構築されたことが出土遺物の検討から明らかにされ、埋没途中に構築されたものと想定されている(菅原2008)。

福島県内の土器焼成遺構は多くが須恵器窯などの窯業生産との関連が窺える立地を示し、一般集落内で確認されること少ないとされる^[1]。今回確認した遺構は数少ない一般集落における調査例とも言えるが、南に隣接して犬追瓦窯跡、南1kmに京塙沢瓦窯跡A・Bがあるなど周辺には8世紀を中心とする窯業遺跡があり、こうした窯業生産と関連して土器生産が行われた可能性も指摘でき

る。また、より広範囲を見れば本遺跡南側の丘陵地に川内迫B遺跡群や蛭沢遺跡群といった8世紀中葉から9世紀代に実用農耕具や武器、仏教法具の生産や製鉄を行った遺跡が存在することなどから、土器焼成遺構も新田川南岸地域において複合的に展開した古代手工業生産現場の一つとも捉えられる。塩の生産に郡衙が関与している⁽²⁾とすれば、生産・運搬に関わる筒形土器の焼成は、土器焼成遺構での生産活動が郡衙管理下に置かれていたことを示す証左と言えよう。

(谷 中)

(1) 菅原祥夫氏のご教示による。

(2) 津野仁氏の研究による。

第4節 まとめ

今回の調査により、本遺跡は旧石器時代から平安時代の複合遺跡であり、時代ごとに空間利用が異なることが判明した。

旧石器時代では、調査1区でナイフ形石器が出土していることから、ここに居住域が存在したか、あるいは、狩猟の場であったことが推測される。

縄文時代前期には、調査1区を中心に全期を通して居住域が存在したことが推測され、特に、前期前葉から中葉にかけては調査1区に集落が形成されていたことが判明した。

縄文時代後期末から晩期初頭には、調査2区中央部は墓域であったことが推測され、埋葬が検出されている。

古墳時代前期後半には、調査2区で集落が形成されていた。調査で確認しただけでも20軒を超える堅穴住居跡が検出されており、調査開始後に計画変更になり表土除去を行っていない区域も含めると、その数はさらに増加するものと推測される。堅穴住居跡は、規模が一辺約6m以上の大型のもの、一辺4~6mの中型のもの、4m未満の小型のものに大別でき、規模の異なる住居跡が主軸方向をそろえて分布することから、それらのセット関係が窺える。その中で、9号住居跡では建て替えの痕跡が確認できた。旧住居跡(9 b号住居跡)を人為的に埋めて、新住居跡(9 a号住居跡)を一回り大きく拡張している。さらに、9 b号住居跡からガラス製小玉2点、石製管玉1点が出土したことと9 a号住居跡から土製丸玉4点が出土したことは特筆に値する。

平安時代には、調査1区の西部は9世紀後半に居住域、調査2区の西部から中央部西寄りは9世紀前半に居住域及び生産域であったが、調査1区は堅穴住居跡1軒、調査2区は掘立柱建物跡1棟が存在するのみで、集落を形成するほどのものではない。また、調査2区の中央部からは、9 a号住居跡が埋まりきる前の窪みを利用して土器焼成遺構が3基構築されていた。調査2区の掘立柱建物跡と土器焼成遺構は、同時存在していた可能性もある。

今回の調査成果が地域の歴史の解明の一助になれば幸いである。

(能登谷)

引用・参考文献

- 伊東信雄
大河原 勉
神村 透
興野義一
小林圭一
鈴鹿良一ほか
鈴鹿良一ほか
竹島國基編
中野拓大
長島達一
芳賀美一ほか
早瀬亮介
早瀬亮介
藤原紀敏
山内清男
山内清男
丸山泰徳ほか
告」福島市教育委員会
三浦武司ほか
吉田秀亨
吉田秀亨
縄文セミナーの会
縄文セミナーの会
福島県教育委員会
南相馬市
いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団
青山博樹
荒 淑人
石本 幸・安田 稔
板橋正幸・鈴木芳英
いわき市教育委員会
樺村友延・猪狩みち子・末水成清
菅原祥夫
財団法人鳥取県教育文化財団
菅原祥夫
立 秀人
辻 秀人
理学第26号
辻 秀人
津野 仁
- 1957 「縄文式文化時代」『宮城県史1 古代史・中世史』(財)宮城県史刊行会
2005 「宮前遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告40」(財)福島県文化振興事業団
1989 「石製耕作具」「弥生文化の研究5 道具と技術 I」雄山閣
1968・1969 「大木式土器理解のために(1)~(4)」「考古学ジャーナル15~21」
2014 「山形県出土の块状耳飾について」「(公財)山形県埋蔵文化財センター研究紀要」
1988 「羽白C遺跡(第1次)」「真野ダム開発遺跡発掘調査報告書XII」福島県教育委員会(財)福島県文化センター
1989 「羽白C遺跡(第2次)」「真野ダム開発遺跡発掘調査報告書XIII」福島県教育委員会(財)福島県文化センター
1983 「天神沢」竹島コレクション考古図録第1集
1994 「福島県の大木式土器素描」「いわき地方史研究第31号」いわき地方史研究会
1983 「赤沼遺跡試掘調査報告」「原町市埋蔵文化財調査報告書」原町市教育委員会
1984 「青宮西遺跡」「会津高田町文化財調査報告書第5集」会津高田町教育委員会
2008 「前期大木式土器」「絶対縄文土器」アム・プロモーション
2009 「前期大木式土器の変遷と地域性」「日本考古学会2009年度発表資料」
1993 「東北地方の石器生産」「企画展 東北からの弥生文化」福島県立博物館
1937 「縄文土器型式の細別と大別」「先史考古学1巻1号」
1961 「日本先史土器の縄紋」
1993 「宇輪台遺跡」「第三期山村振興農林漁業対策事業水原小谷地地区農道改正好事開発遺跡発掘調査報告」福島市教育委員会(財)福島市振興公社
2014 「朴本原遺跡」「新田遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告70」(財)福島県文化振興事業団
1988 「角部内南台東貝塚」小高町教育委員会
1995 「段ノ原B遺跡」「相馬開発開発遺跡調査報告書II」(財)福島県文化センター
1997 「第10回縄文セミナー前開中葉の諸様相」
2006 「第19回縄文セミナー前開前葉の諸様相」
2015 「東日本大震災復興開発遺跡調査報告1」福島県文化財調査報告書第503集
2011 「原町市史」第三巻資料編 南相馬市教育委員会
2003 「折返A遺跡 菅保B遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第95集
2010 「古墳時代前期の土器編年―仙台平野とその周辺―」「北杜一辻秀人先生還暦記念論集―」
2011 「荒井前遺跡」「原町市史」第三巻 資料編I「考古」南相馬市
1990 「第1編山中遺跡」「相馬開発開発遺跡調査報告II」福島県文化財調査報告書第234集 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・財団法人地域振興整備公団
2009 「森後遺跡I」「楠木県埋蔵文化財調査報告第319集 楠木県教育委員会・財団法人いわき生涯学習文化財団
1981 「朝日長者遺跡・夕日長者遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第6冊
2001 「青谷上寺地遺跡3」鳥取県教育文化財团調査報告書72
1997 「第9回 東北東部―古代陸奥の土師器生産体制と土師器焼成窯―」「古代の土師器生産と焼成遺構」
窯跡研究会編
2008 「古代集落内土師器生産の新事例」福島県文化財センター白河館研究紀要」福島県文化振興事業団
福島県文化財センター白河館
2011 「福島県の古代生業」「一般社団法人日本考古学協会2011年度楠木大会 研究発表資料集」日本考古学協会2011年度楠木大会実行委員会
1993 「東北南部の古墳出現期の様相」「東日本における古墳出現過程の再検討」日本考古学協会新潟大会実行委員会
1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年―その1 会津盆地―」「東北学院大學論集」歴史学・地理学第26号
1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年―その2―」「東北学院大學論集」歴史学・地理学第27号
2002 「古代鉄器からみた武器所有と武器政策」「楠木史学」第16号 國學院大學楠木短期大学史学会

- 原町市教育委員会ほか 1996 『桜井高見町A遺跡発掘調査報告書』
- 原町市教育委員会 2002 『荒井前遺跡』『県営高平地区は場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 福島県教育委員会 1986 『第1編 北原遺跡』『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅱ』福島県文化財調査報告書第166集
- 福島県教育委員会 1990 『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ』福島県文化財調査報告書第234集
- 福島県教育委員会 1995 『第4編 考察』『原町火力発電所関連遺跡調査報告V』福島県文化財調査報告書第310集
- 福島県教育委員会 1996 『常磐自動車道遺跡調査報告8 馬場B遺跡・大久保A遺跡・大久保F遺跡』福島県文化財調査報告書第330集
- 福島県教育委員会 2007 『第10編 考察』『原町火力発電所関連遺跡調査報告X』福島県文化財調査報告書第439集
- 堀 幸平 2011 『高見町A遺跡』『原町市史』第三巻 資料編I「考古」南相馬市
- 本郷遺跡調査団 1990 『海老名本郷(IV)』
- 南相馬市 2011 『原町市史』第三巻 資料編I「考古」
- 望月精司 1997 『第2節 土師器焼成坑の分類』『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編
- 吉田哲・板橋正幸・平久保直希・鈴木芳英・田熊清彦・藤原祐一・龜田幸久 2010 『森後遺跡II』栃木県埋蔵文化財調査報告第328集 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団
- 栃木県内で管玉が出土する道路
御幸前遺跡S I-22、清六畠遺跡S I-90、263、422、464、寺野東遺跡S I-122

